

産政塾

XI

產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が
溢れる心の叫びを綴ったものである。

目次

●産政塾Ⅱの発刊によせて

(財)中部産業・労働政策研究会

植本俊一

●「変らなきや」

トヨタ車体(株)

池浦芳一

●喜怒哀楽

デンソー労働組合

石本 誉

●「DNA」

全ユニー労働組合

板倉智宏

●最近思うこと

アイシン労働組合

上別府 伸一

●まあいいじゃないか!

(株)豊田自動織機製作所

大 崑 隆 之

●パラダイムチェンジ

アスモ労働組合

岡 本 雅 典

●式年的情報化社会雑感

丸栄労働組合

小野田 和 広

39

33

27

21

15

7

1

● 記念写真 — 自分を振り返る — 47

● ジャパニーズ・ビジネスマン フタバ産業株式会社 柴田 博 53

● 日本人と英語、中国人と英語 (株)松坂屋 締次 顕治 61

● 思 い 名古屋大学 常 兆 71

● 「急がば回れ」を思い出して 東邦ガス労働組合 杉下 昌明 77

● 『自己観照』 (株)東海銀行 大東 輝彦 83

● 0・25 gの球を追いかけて、ここまで生きてきた！ 名古屋鉄道株式会社 高木 敏光 91

● 最近、思うこと アイシン精機株式会社 高田 学 99

● 多様な価値観について 日本特殊陶業(株) 滝野 仁 107

● 「ホールドアップ」 中部電力労働組合 武田 和則 113

トヨタ自動車労働組合 鶴岡 光行

●これぞ私の生きる道	アラコ株式会社	中村英行	119
●突如襲った、第2の殻の外へ踏み出す未体験ゾーン	豊田合成(株)	林賢士	125
●あら！ ヨット？	中部電力株式会社	三谷建介	129
●『パソコンなんて大嫌いだ』	トヨタ車体労働組合	武藤俊和	137
●『人生の転機』	全トヨタ労働組合連合会	森崇博	145
●『出会い・思い』	トヨタ自動車株式会社	山崎一生	151
●産政塾を終えて	株式会社デンソー	横井雅弘	157
●みんなの殻と私の殻	豊田市役所	渡辺昭子	165
●“夢” “生きがい” “働きがい”	中部産政研	丹羽研次	173
●産政塾活動記録			179

産政塾Ⅺの発刊によせて

(財) 中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、この度第十一期を終えました。

産政塾は、異業種の若者二十名あまりにご参加をいただき、約一年間に渡って行うセミナーであります。

セミナーといっても、あらかじめテーマやスケジュールを決めて講師の指導を受けるといった通常のスタイルではなく、参加したメンバーが自らの企画でテーマや講師を選び、現地に出向いて体験や教えを請うという活動を通して、学ぼうとするものであります。

また、産政塾は異業種の人達の集まりであり、多様性を取り入れた論争の場でもあります。企業や仕事の枠を超えて、お互いが夢を語り、天下国家を論じ、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーを生み出そうとするものであります。

こうした活動を通して、参加者は自らの考えを検証し、自分自身の存在や役割を自覚するという、言うならば自らを磨く道場といったものであります。

今回、産政塾に参加した人達は三十才前後の若者二十五名であり、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集まりになりました。

人間形成の基本の時期は青春期であるといわれておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは三十才前後からの十年ぐらいといえます。一応仕事にも慣れ自分で判断できる能力もできつつある。精神的にも肉体的にも充実しており、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活動する時期であります。

こうした若者達の集まりである産政塾は、約一年間に渡ってお互いが夢を語り、自らの企画によってその実践に情熱を注ぎ、そしてこの度セミナーを終了いたしました。

このセミナーを通じて、参加者一人一人が新しい次代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信しております。

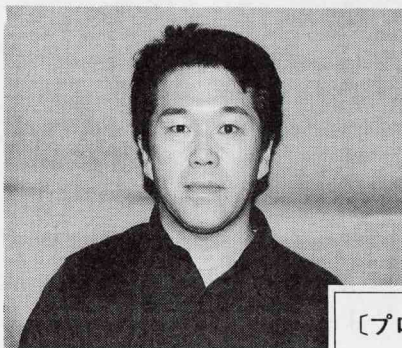
この冊子は、第十一期生がセミナーを通して得た様々な体験をふまえて、自らの想いを「若者の口マンと叫び」として綴ったものであります。ぜひご一読をお願い申し上げます。

また、産政塾は極めて小規模の催しであり、参加されるのは限られた人達であります。こうした冊子を通して一人でも多くの人達の共感を呼ぶことができればと思つて発刊をした次第であります。

塾生と同世代の人達の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとつても参考になることが多いと思います。

なお、産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ関係各位の皆さんに感謝を申し上げると共に、産政塾および塾生に対して今後共ご指導・ご声援を賜わることができれば誠に幸いです。

「変らなきゃ」



トヨタ車体㈱ 試作部

池 浦 芳 一

〔プロフィール〕

いけうら よしかず (36歳)

- 1963年 福岡県福岡市生まれ
- 1982年 トヨタ車体㈱入社

試作部配属

現在に至る

〈家族〉 妻、長男 (5歳)、長女 (5歳)、
義母の5人家族

〈趣味〉 野球、ゴルフ、釣り

〈はじめに〉

ようやく顔と名前が一致しはじめて、さあこれから、というところで第一期産政塾が終了してしまい、半年間がこれほど短く思えた研修は今までなかった。

このレポートをまとめるにあたり、今一度、産政塾とテーマ〈殻の外へ踏み出そう〉について振り返ってみる事にします。

〈きっかけ〉

私が産政塾の塾生になったきっかけは、昨年の十二月に私の机の上に置いてある産政塾のパンフレットに気がついたのがはじまりでした。最初は、どこかの政治団体のダイレクトメールかと思い、なぜ自分の名前を知っているんだろう、と、ちょっといやな気分になったのですが、上司に確認した所、私の早とちりで、人事部よりの派遣の要請で人選の結果、私に決定したというものでした。人と話しをする事が嫌いじゃない私は、不安半分、期待半分といった気持ちで参加する事にしました。

〈私には第一期産政塾〉

いよいよ第一回目「開塾式」期待と不安を胸に出席し、塾の主旨説明と塾生全員の自己紹介。さすがに組合執行部の人が多く話しの上手さに圧倒されつつも、中国からの留学生の常兆さんとのお風呂の入り方の話で盛り上がる。

けっこう楽な研修と思いきや、第二回目「養護施設暁学園 祖父江文宏氏を訪ねて」であっさりとカウンタパンチをもらい産政塾の題材の奥深さに驚愕。第一〇期生のレポートでも多くの人が暁学園をテーマにしていたが初めて訪れた人はみんなカルチャーショックを受けると思う。第三回目を欠席するものの第四回目以降、「三州足助村」、「バンドネオン奏者のスナックのマスター」、「設楽農学校」等、脱サラし各方面で活躍されている講師の方々の話を聞き、精神面・行動力のパワフルさに圧倒されつつもどこか自分にあてはまる所がないか、なにかを自分のものに出来ないか、と、毎回開催されるのが楽しみになってきて産政塾にはまっている自分に気がつく。それまで塾の内容や歴史はもちろん名前すら知らなかった私にとって何もかもが初めての経験でした。

〈変わらなきゃ〉

プロ野球に興味のない人もオリックスのイチロー選手は知っている人が多いと思うが、イチロー選手が某自動車メーカーのCMキャッチフレーズで言っていたこの言葉がここ数年の私のモットーとなっている。産政塾のテーマである、「殻の外へ踏み出そう」をパンフレットで目にしたとき「もしかして自分のモットーと同じ？」と思い、何かがつかみ取れるのではないかと出席を重ねてきたがひとつはつきりとした事がある。それはあまりにも自分の殻が小さい事に気づいたことである。

殻とは何かと考えた時、幼いころから「殻に閉じこもっていてはだめだ」と、事あるごとに言われながら誰しも成長してきたと思うが、「世間知らず」とか「協調性を持とう」という感じで自分なりに理解していたつもりでした。又、よほどの事がないかぎり大人になれば身についてくるものと思っ

いました。しかし自分がこの歳になり産政塾という機会を与えてもらった事により、講師はもとより、塾生の他産業の方々と意見交換を重ねるうちに「殻」とはその人（一個人）の考え方・受け止め方であって、一般常識を身につけるとか友達と仲良くするといった答えのあるものとは別のものということに気づき、（遅いと思われる人が多いと思うが……）そしてこの「殻」は年々部厚く頑丈なものになっていることを痛感する。それは社会人として二十年近く過ぎようとする自分を振り返ってみても、「これは、こうだ。」とか「これは、こうじゃなきゃだめだ。」といった偏った考え方をすることが増え、発想に乏しくなり産政塾といった違った環境の場になると思いをきちんと伝えることの出来ない自分に気がつくからだ。結局、一人前の社会人になったつもりでいても自己満足にすぎず、「殻」がちいさなまま厚さだけがどんどん増していつていと思う。

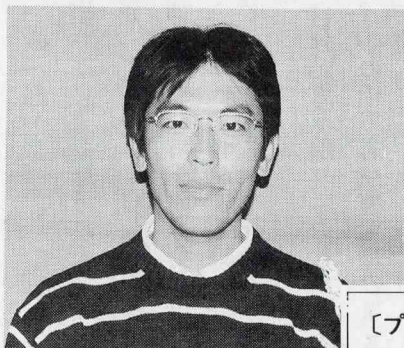
話は変わるが、以前海にいるサメという魚は泳ぎ続けていないと死んでしまうという話を聞いた事があるが、人も同じように考え続けなければ人間的な成長が止まってしまうと思う。今がベストと思う事なく、常にいまがスタートと思い、「どうすればできる」・「どうすれば変わる」と思い続けることが、いかに大事かと産政塾が思いださせてくれた気がする。そして、講師の方の生きざまの一端に接する事により「思っていれば何でもできる。」ということが実感できた。

まとめのレポートというよりはただ自分の思いを語っただけになってしまったが、今回の体験を生かし、幅広い視野で物事に立ち向かえるように努力していきたいと思えます。

最後に、産政塾という機会を与えて下さった会社や上司、ならびに産政塾に感謝します。又、短い期間ではありましたが楽しく活動できたことに対し、塾生メンバーならびに事務局の丹羽さん・岡田

さん本当にありがとうございました。いつかどこかでお会いできることと、井八の開塾（飲み会）の連絡がくることを楽しみに待っています。

喜 怒 哀 楽



デンソー労働組合

石 本 誉

〔プロフィール〕

いしもと ほまれ (36歳)

- 1964年 9月 熊本県天草郡生まれ
- 1983年 4月 日本電装株式会社
(現在 ㈱デンソー)
- 1998年 9月 デンソー労働組合執行委員
現在に至る

〈家族〉 妻、長男 (小3)

〈趣味〉 園芸

「お父さん、喜怒哀楽って知ってる」

突然の息子の質問に、一瞬戸惑った。

日曜日の夕食後、久し振りに息子と風呂に入りながら、くつろいでいた時の質問だった。

「喜怒哀楽をどうして知ってるの？」自分の記憶では、中学生時代に習った四文字熟語であった為、なぜ小学三年生の息子（伸）の口からその言葉が出てきたか、驚いた。その後、私が答えようとしたら「喜んだり、怒ったり、泣いたりする事だよ」と得意そうに説明した。

息子の言う通りだが、自分が思う限り「それだけじゃなくて、伸がいつも感じている、悲しいとか、嬉しいとか、楽しいとか、心の中で思う事全部の事を言うんだよ。」と伝えた。

後で妻に聞くと、最近、四文字熟語にこっているようで、その理由として学校の図書館で見つけた「ドラえもん四文字熟語」という本（日常生活会話に四文字熟語を取り入れておもしろおかしく書かれたもの）を読んだからだそうだった。

その夜、息子には答えたものの、もっと深い意味があるのではと、今一度国語辞典を引っ張り出して、調べてみた。「喜びと怒りと悲しみと楽しみ。さまざまな人間感情」うん、息子に言った通りだ。間違っていない（当たり前前の答えだが。）

そんな事があり、その夜も提出が遅れている、産政塾の卒業レポートのことが気になり、この人間の感情を表した、「喜怒哀楽」をテーマに考え、自分自身のここ最近の喜怒哀楽について、振り返ってみようと思った。

【喜】

喜：よろこぶこと、おもしろがること、よろこび

最近、非常におおきな喜びを感じた事があった。

今、住んでいる所は三年前に引っ越してきた為、当時は余り近所付き合いも無かった。しかし、ある日突然、子供会の役員と言う方が、家に訪ねてきて「お子さんは小学生一年生ですよね、今度子供会のソフトボール大会があるんですが、そのチームの監督をやって頂けないでしょうか？」あまりにも突然過ぎるお願いに「何故自分が」と戸惑ったが、思い当たる節があった。以前から、息子が少年野球をやっており、たまにコーチとして参加していたのだが、その監督が同じ、子供会の役員をされていた為、私に白羽の矢が立ったのだ。

まあ、昔から、よっぽどの事が無い限り、頼まれた事は断らない（断れない）のが私のポリシーであり、また断る明確な理由が無かったので、二つ返事で了解した。

引き受けたからには「よし、やるからには、勝つ、優勝だ。」と思うのが普通だが、うちのチームの現状を見てみると、ソフトボール（野球）経験者が二人で、主力が四・五年生、女の

子を中心だ。それに対し、他のチームは主力が五・六年生で野球チームに所属している子が多いし人数も倍はいて選手層が厚く、一回戦突破も非常に難しい戦力だった。

そんな事から、「子供会の行事だから皆で楽しめればいいや」と思い練習に臨んだ。初めは、「大きな声で元気良く」を合い言葉に、初心者が多かった為、基本的な練習を、繰り返し続けた。単純な事のくり返して飽きると思ったが、意外にも子供たちは、必死に取り組んでくれた。

子供たちの成長（レベルアップ）には目をみはるものがあり確実に上達していった。

そんな子供を見るとこちらも練習に熱が入るし非常に嬉しかった、「もしかしたら一回戦は突破できるのでは」と淡い期待も持った。

大会当日、下馬評を覆し一回戦突破、二回戦は僅差で敗れたものの、三位決定戦では運も手伝って奇跡の勝利（ちょっと大げさだか……）だれも想像できなかった三位という成績。子供たちも喜んだが、それ以上に私をはじめ親御さんが非常に喜んでくれた。

しかし、私が本当に嬉しかったのは、大会終了の後、子供たちが記念のフォトアルバムを作ってくれてその中に皆からの一言メッセージがあったことだ。お世辞でも上手でない字で私に対しての感謝の言葉が書いてあった。

今回の体験は感謝されるより、私の方が子供たちに感謝しているし、もらったアルバムと子供たちの一言一言は私の大切な宝物である。

【怒】

怒：おこること、いきどおること

最近妻から二つの事を言われる

① 「お父さんは私の顔を見るたびに、怒ってばかりいる」

② 「野球で子供に教える時に、余り怒らずに、やさしくしたら？」

自分自身もそれは自覚しているし注意はしているつもりだが、ついつい短気な性格が……。

この場を借りて弁解したいと思う

① については、「怒ってなくて叱っているの。」「怒られるという事は、俺がお前の事を大事な人と思っているからこそ、注意してあげているんだぞ」と訳の分からない弁解をしている。妻は半分あきれているが、そもそも、私は父親譲りの短気であるが（いなかのおふくろ曰く）多分会社では「怒り」という感情より理性が勝り、抑えているが、家に帰ると会社で理性を使い切ってしまつて、感情のみで物事を言っているのではと思ひ、少しは反省している。

② については、一生懸命な子供達を見ているとこちらも自然に力が入ってくる、そうすると思わず大声で怒鳴ってしまふ。私としては、感情的になつてゐるわけでもないし、練習風景を見た親御さんはかわいい我が子が叱られている所を見て気分を害していると思うが、子供に良かれと思ひ

行動しているので余り気にしてない。気にしてない最大の理由は、練習の場所以外でも子供たちが「石本コーチ!!」と声をかけてくれるからだ。声をかけてくれるという事は、恐い人・いやな人とは思っていない証拠と私は勝手に判断している。

「あんまり怒ってばかりいると血圧が上がって、早死にするよ!」と妻から忠告されるが、いままさ性格を変えられるものではなし、怒るパワーは貴重であり無くしたくない。

いつまでも、うるさいお父さん・厳しいコーチ・近所にいる頑固なおじさんでいたいと思う。

【哀】

哀：① あわれむこと、かわいそうに想うこと

② 悲しむこと、心をいためること

悲しむ＝涙ではないが、父親から「男は泣くな、涙を見せるな」といわれつづけてきた。そんな事もあり、幼少時は分からないが、少なくとも子供を持つまでは涙を流した記憶があまり無い。私に哀れみの気持ちが無いわけでもないし、悲しい事もある。ただ「男は泣いちゃいかん!」という理性（九州男児の意地）が涙を押え込んできたのだ。

しかし、子供が生まれてからちょっと変ってきた。「年を取ると涙もろくなる」と言うが、最近ちょっとしたテレビのドキュメントやドラマ等でも涙ぐむ事がある。自分も年を取ったものだ。

また最近、非常に心を痛めていることとして「児童虐待の問題」がある。なんて悲劇的な事か。何故、かわいい我が子を虐待するのか？ そんな疑問でいっぱいだ。少なくとも親子双方が被害者であり、問題解決には時間がかかるだろうが、家庭だけの問題でなく、学校、地域、国全体でこの問題に取り組んでいかなくてはいけないと思う。

【楽】

楽：① 心身が安らかでたのしいこと

② 好むこと、愛すること

よく口癖で言う「なんか楽しい事ない?。」

別に深い意味がある訳でも無いし、今現在、楽しくない訳でも無い。

私にとって楽しい事は、「仕事です」と胸を張って言いたいところだが、楽しめるほど余裕が無いし、楽しんで仕事をしている人がいればお目にかかりたい。(楽しく思っている方はすみません)

心身が安らかで、好み、愛しているのは、やはり家族であり家族との時間である。家では怒ってばかりと前述したが、私は、家にいる時非常にリラックスするし、家族という時間を楽しく思う。妻と息子も同じ事を思ってくれるように努めていきたい。

あと、単純に楽しい事は趣味の園芸である。あえてガーデニングと言わないのは深い意味は無いが、

私の場合気に入った花や木があるとスペースが許す限り植えてしまう。もう少し庭全体の調和を考えれば良いのだが、気に入ったら無性に植えたくなり、その発育していく過程が非常に楽しみである。

また、気分がむしろしゃした時に庭に出て草むしりするだけで、気分が落ち着く。

ストレス発散の為、非常に良い趣味だと思うが、庭の花・木の本数がストレスに比例して増えていくのではと多少は心配している。

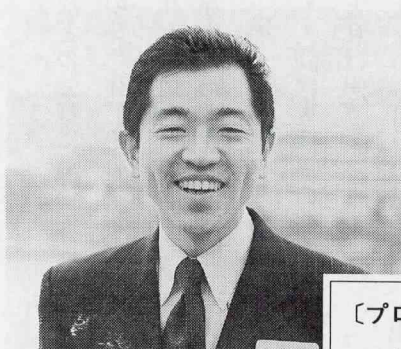
以上、「喜怒哀楽」についての私の体験と勝手な考えを書かせて頂いたが、取り止めの無い話になり恐縮している。

今回このテーマで考えて改めて思った事は、「喜怒哀楽」という人間の「感情」の部分は生まれながらそれぞれが持ち合わせるものであり、その感情をコントロールする「理性」については、生まれた後の環境、教育（親・学校）、経験で身につくものだと思う。その感情と理性のバランスが大事であるが、現在の環境変化、時代の変化によってその微妙なバランスを崩している人が、昨今の様々な社会問題を引き起こしているのではないかと思っている。

【最後 に】

最後になりましたが、この産政塾での体験は他社・他労組の方々と交流ができ非常に有意義なものでありました。講師、事務局、産政塾の皆様、本当にありがとうございました。

「D N A」



全ユニー労働組合

板倉智宏

〔プロフィール〕

- いたくら ともひろ (33歳)
- 1967年 4月 愛知県瀬戸市生まれ
 - 1989年 3月 ユニー株式会社 入社
経理管理統括部 (現 経理財務部) に配属
 - 1996年 9月 労働組合専従
現在に至る
- 〈家族〉 妻、長男 (8歳)、長女 (5歳)
- 〈趣味〉 ドライブ、ネットサーフィン

はじめに

世間では食料品や医療などの分野において「ゲノム科学」が注目されていると聞く。特に「ヒトゲノム」人間に必要な最小の染色体、その情報を全て解読する作業が現在世界的規模で行われており、大枠の解読はすでに完了し、現在はタンパク質の解読が行われているそうだ。そして遺伝子情報は過去様々な発見から産業が芽生えたように、今回も莫大な規模の産業を創造することになるし実際遺伝子産業は花盛りである。その一方で遺伝子情報による人間の選別が始まる、といった報道も聞いたことがある。いずれにしても人間は人間そのものを解き明かさなくてはならない、人はそこに重要性を求めているのではないかと私は思う。

いや、もっと簡単に考えたい。自分の息子や娘を覗いていると、つくづく親のDNAは引き継がれるということを感じる。私の八歳の息子にしても顔の形はおろか性格まで私とそっくりで、おかげで息子が妻に怒られる内容は、私が妻に怒られる内容とそっくりである。もし遺伝子情報が全て明らかになりそっくりとなる理由が科学的に分かるとしたら、神秘的な側面を残したい気持ちもあるがやはり知りたい。

私のまわりのDNA

最近私の周りで「遺伝子」「DNA」といった言葉を聞く。いずれも科学的側面ではなく、これまで築き上げた歴史に対してであり、脈々と流れている風土や習慣や精神に対してである。そして私は

「遺伝子」「DNA」という言葉を非常に重いものを感じる。例えば労働組合の活動。過去組合員から選ばれた非常に多くの中央執行委員諸先輩方によって支えられてきたこの活動も、発足当時から携わっている方は一人もいないのに、活動の中身は変われども活動の根底にあるモノは一分の狂いもなく伝承されている。それは「労働組合」という一種独特な組織ではあるものの真に凄くすばらしいことであり、現在自分もその中に身を置いてしていると改めて思うと身が引き締まると同時に「次世代にこのDNAをどう伝え伝承させていくか」を考えてしまう。ただし保守的ではなく、革新的に考えているのではあるが。

しかし、企業の内部で「遺伝子」「DNA」という言葉があまり聞こえないのは何故だろう。私はこれを「コミュニケーション」という言葉に強引に置き換えて考えた。確かにコミュニケーションは会社内でも薄れてきているように感じる。例えば、以前は駅の近くに本社があり、また店舗も駅前立地型が多かったので、通勤手段は必然的に公共交通機関となる。仕事が終わると、誰彼ともなく誘いの声がかかり、居酒屋などで「ノミネーション」が始まり、上司の悪口や仕事の悩みなどを和気あいあいと話しストレスを発散していた。しかし、店舗も郊外立地型が多くなり、本社も郊外に移ると、仕事の帰りに飲みに行くこともだんだん無くなり回数が減ってくる。たまに誘われても車をおいていくことになり面倒になる。またあらかじめ飲むことが分かっていると公共交通機関で勤務先に向かうことになるが、妙に気合いが入って、結局コミュニケーションということではなく飲むこと食べることに集中するくらいがあり逆にストレスがたまってしまふ、ということもある。環境だけではないと思うが、こういった一面を捉えてもコミュニケーション、人とのつきあい方が薄れていると感じられ

る。また、夜だけに限らず昼間も社員と接する機会が減っているし、労働環境も大きく変化した。流通業はパートタイマー比率が他の産業に比べて高い労働集約型産業である。一つは店舗・部門内に占める正社員が少ないということと、もう一つは女性を中心とするパートタイマーが非常に多いことである。以前は社員も多く、OJT（業務内での教育）もスムーズに行え、ある意味社員とパートタイマーの役割が大きく異なる「わかりやすい」職場になっていた。つまり仕事の話は業務中の指示命令でしっかり出来たので、コミュニケーションは仕事よりも家庭の話や世間話など普段の会話で十分だったし時間も多くあった。しかし現在は社員も少なく、仕事の内容において「社員」「パートタイマー」そのような分けは薄らいできた。業務中も全員対応で作業に追われ、社員もあまりにも多くなったパートタイマーに対し指示も明確には出来づらく、頼れる先輩社員もなく悩んでいる方もいるであろう。コミュニケーションをしよう、と思わなければ出来ない環境、そんなところも社内で「DNA」が聞こえてこない要因の一つとして考えている。

企業内におけるDNAの伝達を阻害しているのはコミュニケーションの希薄さであるといえるだろう。良い理念や環境、仕組みは意識して伝えなければ残ってはいかない。また悪い理念や環境、仕組みほど意識しなくとも残る。で、どうしたらよいかである。私はこの時代だからこそ「話し合い」、出来れば「十分な話し合い」が重要と考える。家庭の話で申し訳ないが私は妻とけんかが絶えない。妻は言う、「どうして私の思った通りの答えが返らないのか」「なぜ今言ったことをすぐに忘れるのか」「返事ばかりですぐに実行しないのは何故か」と（ちなみに学生時代からそうだったようだ）。しかし、けんかの中から自分を発見することは非常に多く、それが仕事や社会で大いに役立っている（忘

れていることも多い)。つまり、人と接するということは真剣勝負であり、自分が気を抜いた時（私は家庭内ではいつもこれだ）相手はすぐさま鋭く突いてくる。しかしこちらが真摯な態度で接すれば、たいがいうまくいく。コミュニケーションというのは本当に難しい。ここに至ってようやく気がつき、よく今までやってきたな、と今更ながら考えている。会社でもそうだ。十分な話し合いをする時間がない、と言われるかもしれないがそれは方便である。どこかで時間はある。例えば、たばこ休憩やお茶を飲む時間はあるだろう。トイレに行く時間もあるだろう。ちょっとした時間を見つけて会話する。相手を限定する必要はない、誰とでも会話する。仕事以外でも気付いたことやばか話でもいい、とにかく雑談をすることによって何か一つでも相手に伝わることもあるだろう。その一つひとつの積み重ねが次世代の企業像へと伝わっていくに違いない。企業にとっても、そういった精神の元になる良いDNAを伝承し続けることが、これからの時代に大変重要と考える。また、そうやって伝えていくことも実はその中にある真実を常に見つめていかないと言葉の上滑りになる。一例で「掃除をして店を綺麗にしよう」という行動がある。大変良いことであるが、そのまま実践してもそこに「何故掃除をするのか」・・・お客様に気持ちよく買い物をしていただくため、売場で危険なところがないかチェックするため、建物外装や駐車場・設備の傷みを確認して修理補修を行うため、などそういった背景を考えていかないと掃除をするという作業だけで満足してしまふ。言葉の背景を考えること、そして伝えること。ぜひ実践して行かなくてはいけない。

「血」で伝わるDNAと、「精神」で伝わるDNA。伝わり方は異なるが、絶えず脈々と流れる本質は変わらないと確信している。とても重いが、大切に伝えていきたい。

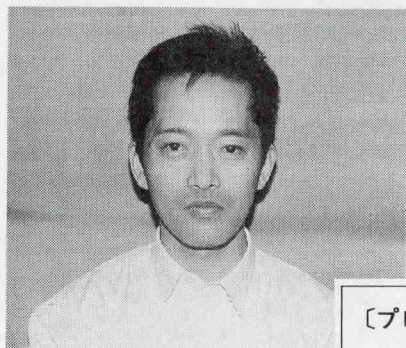
最後 に

この産政塾に参加して私自身が「殻の外に飛び出せたか」であるが、改めて自分の殻の小ささに目覚めさせてくれたのが産政塾であった。そして様々な出会いの中で小さな殻が少し大きくなったように感じている。でも殻から出るきっかけはあったものの、まだ殻からは飛び出せてはいない。これがこれからの私の課題で、とても大きな課題をいただいたように思う。いつになるかは分からないが、殻の外の広大なる世界へ飛び立てるよう、自分自身を磨いていきたい。

そして産政塾で培った精神を忘れず、ぜひ今後参加するであろう仲間たちにもこの体験を伝え、引き継いでいくよう努力していきたい。そしてそれがまさしくDNAといえるのではないだろうか。

(了)

最近思うこと



アイシン労組

上別府 伸 一

〔プロフィール〕

うえんびゅう しんいち (36歳)

- 1964年1月 鹿児島県生まれ
- 1982年4月 アイシン精機㈱ 入社
- 1991年7月 アイシン・エーアイ㈱へ転籍
- 1995年9月 労働組合専従執行委員
- 2000年9月 アイシン・エーアイ㈱製造4課
へ配属 現在に至る

〈家族〉 妻、長女 (8歳)

〈趣味〉 楽器 (ギター)、競馬

〈はじめに〉

月日が経つのは早いもので、私も社会人として、サラリーマンとして、十八年目になる。つまり高校を卒業するまでの十八年間と、同じ長さだけサラリーマンとして生きたことになるわけだが、何となくサラリーマン時代の十八年間の方があつという間だったような気がする。

どうしてだろう・・・。

答はすぐに見つかった。なぜなら私は、勉強が嫌いで学校に行くのが毎日億劫だったからで、週末までの一週間をどれだけ長く感じてきたことか・・・。

自慢ではないが、小学校時代から月の約半分は遅刻して登校していた。決して遅刻する事が好きなわけではない。むしろ、遅刻するたびに先生に叱られる訳で、その瞬間だけは明日こそ早く家を出ようと、何度、心に決めたことか。一〇分、いや、もう五分早く家を出れば遅刻はしないわけだが、なぜか、毎日のように、半分泣きそうな顔をして、汗だくになりながら毎朝、学校に通っていたことを覚えている。ただし、不思議と社会人として、サラリーマン時代での遅刻は無くなった。あたりまえと言えばあたりまえなことである。自分が遅刻することで、みんなに大きな迷惑を掛けてしまうからである。

ただし、その頃と何も変わらないのは、切羽詰まらないうと行動に移さないことである。この原稿も、何度となく催促され、督促状が来てからやっと書いている始末で、大幅に期限を過ぎてしまい、大変申し訳なく思いながらこの原稿を書いている。

今回、産政塾の卒業にあたり、「最近思うこと」というテーマで、書かせて頂くと思う。

〈日進月歩〉

「パソコンは、とても便利だ」と、多少、使えるようになった今だから言える事だが、六年前、私は組合専従役員になる前は、油工職場で油まみれになりながら自動車のミッショングヤアの加工をやっていた。そこからいきなり、ホワイトカラーと称される仲間と一緒に仕事をさせてもらったわけだが、まず最初に苦労したのは、ワープロも触った事も無い自分にとって、「ワープロを使えないと仕事にならない」と言われて、当時、一二万円も投資して買ったワープロではあるが、わずか2年で無用の長物と化してしまった。多分、同じような思いをされた方も少なくは無いと思う。原因は、言わずと知れたパソコンの急速な普及である。当時、苦勞して作ったワープロ資料も全てパソコン資料に変換して、ワープロはお払い箱である。四年程前、業務用で机に置かれたノートパソコンは、ハードディスクの容量が1Gバイトで三〇万もする高価なものだったため、ワープロを仕事のためと割り切って買った時のようにはいかない。

仕事では、その業務用のノートパソコンを三年以上使わせて頂いたおかげで、必要最低限の事は行えるようになった。時々、自宅にパソコンを持ち帰り作業していると、妻から「今年の年賀状くらいパソコンで写真も撮り込んでセンス良く作ってよ」とせがまれる。

確かに昨年、妻宛の年賀状を見るとパソコンを使った自作の、「既製品とは一味違う？」カラフルなものが多い……。私自身、仕事に自分用のパソコンが欲しかったこともあり、年賀状を作ることと

引き合いに半年程前、約三〇万円もするノートパソコンを買った。驚いたのは、四年前1Gバイトのハードディスクの容量しかないノートパソコンが四年後の私の買ったパソコンは、同じくらいの値段で12Gバイトにも容量が増えマシンの性能も格段にアップしている。「買い急がなくてラッキー！」と思いきや、半年経った今では20Gバイトにも容量が増えているではないか。

ノートパソコンは、四ヶ月位で新機種のものに変わるらしく、まさに「日進月歩」の際たる象徴的製品と言えると思う。私は、自分で「本当に欲しい時に」「欲しいものを買えた」という自己満足感から、この後、短期間にどれだけ機能が向上し安く出回ったとしても、たぶん後悔はしない、と今は信じている。

今の私から見れば、四年前にノートパソコンを買った人は可愛そうに・・・と、正直思うところもあるが、四年後、同じようにノートパソコンの機能・性能の格段に上のものを買う人から見れば、今の私と同じ事をきつと思うのだろう。

どんな物をいくらで買おうと、物の価値観は千差万別・十人十色である。

いい物をいくら安くで買っても、使われなければ高い買い物となってしまうし、高くで買ったにせよ、永く効果的に使えれば、結果、その人にとっては満足のいく買い物だったことになる。ただ、最近感じる事として、大量生産・大量消費の日本の現代社会では、物を大事にしない。大事に使わないと、囁かれることが多い。確かに、パソコンはさておき携帯電話などは、新機種が出る度にショップへ行き電話を替える友人もいる。「何でそんなにころころ電話を替えるんだ？」と尋ねると、外観もあがるが着メロ機能がなんだかんだといい年こいた中年男が楽しそうにはなしてくれる。別に、他人が何

を貰おうが替えようが大きなお世話だから何も言うつもりは無いが、真剣な会議中に鳴る、酔った着メロだけは止めて欲しいものである。

マナーも無視の常識の無い大人は、若い人たちだけの問題ではなく、むしろそれに汚染されつつある大人たちも多くなりつつあることの方が、むしろ大きな社会問題なのではと感ずるのは、私だけだろうか。

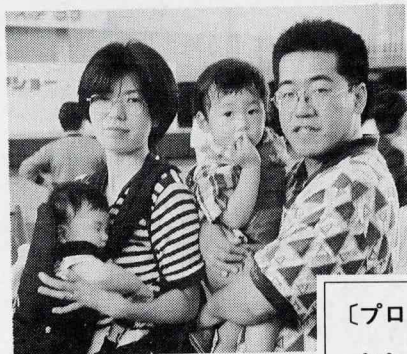
〈さいごに〉

最後まで取り留めの無いことをズラズラ書いてしまった。

産政塾で、いろいろお世話になった事務局の丹羽さんに感謝するとともに、さまざまな人生を歩んでみえる方々とお会い出来たことは、私にとって大変大きな刺激になりました。

本当にありがとうございました。

まあいいじゃないか！



(株) 豊田自動織機製作所

大 嵐 隆 之

〔プロフィール〕

おおしま たかゆき (33歳)

- 1967年 愛知県生まれ
- 1991年 (株)豊田自動織機製作所入社
エンジン事業部営業部配属
- 1997年 人事部へ異動
現在に至る

〈家族〉 若妻 (1人)、長男 (3.6歳)、
次男 (1.9歳)、胎児 (-0.1歳)

〈趣味〉 利那主義的思想と行動

〈興味〉 不思議なこと・素朴なことについて考えること

平凡な一日のはじまり

久しぶりにゆっくりとした午後だった。近所の公園へ散歩にいくと、そこでは雲の流れと遠くを歩いている子供の動きが、(気忙しい私に) ゆっくりとした時間の流れを感じさせてくれた。通りの反対側のベンチに座り、いつものように胸ポケットからセブンスターを取り出して、(普段は使っていないが) Zippo のライターで火をつける。(そういえば「セブンスター」とはもう十年以上も付き合っている・・・)。

いつもとは違ってタバコの味を深く味わうかのように静かに吸い込んで、優しく吐いてみる。形の決まらない「自由な」煙が数十センチもあがると、風に飛ばされ形が消えていった。さっきまで見えていた「煙」は実在なのか？ 実在だとすればどこへ消えたのか？ (物理学上は分子同士のゆるやかな結合が崩れたにすぎないのだが・・・)。そんな素朴なことを考える時間である。

本棚から引っ張り出してきた古い詩集 (特にお気に入りというわけではないのだが) を読み始める。

一本の樹は歴史ではなくて 思い出である

一羽の鳥は記憶ではなくて 愛である

一人の誕生は経験ではなくて 物語である

私はそれらのあいだを旅しながら 大人になってゆくのだろう

(世界の一ばん遠い土地へ)

少年の頃、「おとなになる意味」を考えていたことを思い出した（そんなことをみんなで話していたような気がする・・・）。もう随分と昔のことにように思われるが・・・、確か若き日のニーチェのように「老いることは悪」であるかのようなことを知見や超（友人達）と話しあっていたと思う。そのころは、「意味のないものなど存在しない。全ての物事には確定的かつ限定的な意味がある」と信じていた。「存在している意味」を考えるよりも「存在しているというエネルギー」を信じていたような気がする。あの頃の自分は、今の自分をどう思うだろうか・・・。

ムーミン谷の彗星

二本目のタバコに火をつける頃には、（必死になって）言い訳をしている自分に気が付いていた。

「全ての物事に意味があるわけではない。意味のないことだってあるさ」

「無邪気さと経験は反比例するのさ」

「自分は成長しているじゃないか」・・・。

疑いと言いつの間にギャップをどうやって埋めればいいのか？「ムーミン谷の彗星」に描かれているムーミン谷の住民のように、自分自身の中では俄かに騒ぎ始めた。こうなるとタバコの本数も自然に増えてくる。三本目、四本目・・・。

「若い時は守るべきものが何もないんだ。年とともに有形無形の財産を保有すれば考え方も変わってくるのは当然」（当たり前前のことである）

「あの頃の自分は無知だったんだ」（当たり前前のことである）

「そもそもキース・リチャーズも言っていたじゃないか『とりとめのない夢を描いたっていいじゃないか。問題は夢がかなった時には、夢じゃなくなるってことさ』と。全てのひとが同じ問題を抱えているじゃないか」（そういう問題ではない）

落ち着きを取り戻すために、公園の中を散歩することにした。

猿田彦の苦悩

歩きながら、産政塾開塾式の時のことを思い出していた。「夢」はなんですか？ 素朴な質問である。塾生が、各々の夢について話し始める。みんな立派な夢を語っていた。もちろん自分も立派な夢を話した（少なくとも自分では立派だと思っている）。そもそも「今の人達には夢がない」という無責任な風潮が、どれだけの人達を無意味な焦りへと導いているだろうか。「火の鳥」に描かれていた猿田彦の苦悩―生死に対する偏った思い込み―に似て、周りからの一方的な弾圧に思えてくる。

子供の頃に描いていた夢。学生時代に描いていた夢。今描いている夢。時系列で並べてみると、なるほどと思った。子供の頃は、「○○になりたい（実は私はサッカー選手になりたかったのだが）」というように、目的ではなく状態を夢見ていた。学生のころは、その状態でいることで己の満足を夢見ていた（実は私はブルースマンになって、朝から酔っ払っていたかったのだが）。そして今は、（結局はマスターベーションに終わるかもしれないが）周りの状況への影響のようなことを夢見ている（内緒です）。私の夢は、年とともにゆっくりと「成長」しているんだと思った。まあ、いいじゃないかこのままで……。

夕飯の時間

最後に、ひとつだけ詩を読んでから帰ることにした。

ぼくに

さよならを下さい

そうしたらボール箱へつめて

紙ひもでくくって

ハドソン川へ捨ててきてあげよう

(一番短い抒情詩)

いつかきつとそんな強さ(優しさ)を持てる時がくる(と信じたい)。なにもそんなに肩に力を入れるようなことでもない。自然にそんな時がくる(はずである)。そんな強さ(優しさ)をもてた時、その時こそ自分自身の殻が少しだけ広がった(生まれようとする雛鳥のように、少しだけ殻を打ち破った)時だと思う。

ある物理学者は言った「我々全て——哲学者も科学者もただの人達も——が宇宙と存在しているのはなぜか、という問題の議論に参加し(各人の殻を広げ)、もし答えが見いだせれば(殻を打ち破れば)、それは人間の理性の究極的な勝利となるだろう。」

思い返せば、随分と平和な一日である。夕飯の味噌煮込みうどんは美味しかった。

パラダイムチェンジ



アスモ労働組合

岡 本 雅 典

〔プロフィール〕

おかもと まさのり（32歳）

- 1991年 アスモ[㈱]入社
業務改革推進室に配属
- 1992年 購買部に転部
- 1998年 アスモ労働組合専従役員となる
- 2000年 全トヨタ労働組合連合会に派遣
現在に至る

〈家族〉 妻・子2人

〈趣味〉 ベース・サックス

二〇〇〇年一月某日、当時、単組で書記次長をやっていた私に突然、書記長から

「中部産政研で産政塾の塾生を募集しとるけど岡本やってみるか？」

と言われ一冊のパンフレットを渡された。そのパンフレットを読んではみたものの、「産政塾って何？」「何をするところ？」という感じで正直いつてピン／＼とくるものが全くなかったし、しかも、これから春の取り組みが始まるのに産政塾に参加する暇なんかあるか／＼と思ったことも事実である。しかし、反面、愛知県内の組合および企業から大勢の方が参加されているという過去の実績から、幅広く異なる業界の方々の考え方に触れることができたらいなあ／＼という気持ちがあったことと「自分のカラを破ろう!!」というキャッチコピーに興味をわいたことも事実であり、考えに考え抜いたあぐく参加してみることにした。

それ以来、「自分のカラ」について自問自答を何度も行ってみた。言葉でいうとたったの五文字であるが、狭いようで非常に広い意味合いがあることに気付いたものの、これだという答えを出せずじまいにモンモンとした日々を送っていた。いつしか、そのキャッチコピーに対する興味も、産政塾に参加することによりその答えを自分なりに見つけてやろう／＼という目的意識に変わるとともに、産政塾が始まるのを心待ちにして日々を送っている自分がいた。

実際に、産政塾が始まると全てに出席することはできなかったが、都合がつけば必ず出席をした。そこでは、さまざまな業界で情熱を持って自分なりの生き方を貫き通している多くの人と出会うことができた。その人達の生き方は、けっしてスマートなものではなく、むしろ不器用であるといえる。しかし、話を聞いていて全ての人に共通していえることは、ただ単に自分の生きたいように生きている

ことではなく、自分なりの価値観・理念そして信念を持っていることではないだろうか。そのことに気が付いた時、「幅広く異なる業界の方々の考え方に触れることができたらいいなあ」という安易な気持ちを持って参加した自分が恥ずかしくなるとともに、今までの自分自身の生き方について今一度振り返ってみた。

自分自身、これまで生きてきた道程はたいしたものではないが、節目フシメにおいて自らの信念を持って人生の選択を行ってきたことはきいている。しかし、一歩ひいたところで第三者的に自分の人生を思い直してみると、本当に自分自身の価値観や信念で全ての物事を決定していたかという疑問が沸いてくる。その部分をさらに深く掘り下げていくと一つの事に気付くことができた。

それは、自分の価値観や信念の根本（源泉というべきかわからないが）は、親の価値観や信念をベースに構築されているということだ。一つ例をあげると、自分は、大学を卒業し社会に出たわけだが、大学に行くという選択をしたのは自分自身であり、これはまぎれもない事実である。しかし、根底には、幼い頃に両親から、「これからの時代は、社会に出てから出世するには、大学くらい卒業しとかなとなあ」ということを何度も言われた結果、このような選択する方向付けを無意識のうちにしてしまっているという可能性もなくはない。このようなことが、自分自身のこれまでの人生を振り返ると数多く思いあたる。

もちろん、全ての人が親に育てられてきたわけであるから、その価値観あるいは信念をある種受け継ぐとともに、それをベースに個人として考え方が加わることによって、一人ひとりの価値観や理念そして信念が構築されるということは当然のことであるし、そのことを否定しようとは思っていない。

ただ、今回の産政塾で出会った自分なりの生き方を貫き通している多くの人達の価値観・理念そして信念は、自分自身のそれと比較しても、何かしら違和感を覚えてしかたがなかった。

なぜ、違和感を覚えるのだろうか？ 自分なりに検証してみることにした。その結果、次のような結論にいたった。

人は皆、親の価値観・理念そして信念を何らかの形で引き継ぎベースにしていることは否定することはできないと思う。なぜなら、それを否定するということは、自分自身の存在価値を否定してしまうことになるからだ。また人は、そのベースに自分自身の経験をプラスアルファして自分なりのそれを構築していくことも事実であると言える。しかし、今回出会った人達は、その自分自身がプラスアルファとして構築してきた部分を、ある種否定しているのではないのだろうか。否定は言い過ぎかもしれないが、それを判断基準としながらも、物事を見る視点あるいは考えるポイントを変え、自分の存在価値について限りなく追求をしているのではないかと思えてしかたがない。そして、そのことが現状を良しとしている自分と比較して、一番大きな違和感を覚える部分ではないかと気付くこととともに一つの言葉が頭の中にうかんだ。

「パラダイムチェンジ」

これは、人々のものの見方・考え方の基本的な枠組み、ないし思考モデルと言うものは、各々の時代の価値観によって、常に変化をしていくという意味でよく使われることがある。このことは、人もあてはまるのではないだろうか？

今の時代を生きている人、一人ひとりが現在置かれている状況や立場によって、ものの見方や考え

方を常に変化させているからこそ、新しい発想や新しい商品が常に生まれていると言っても過言ではないはずである。

今、産政塾を終えて、「自分のカラ」について自分なりの答えが見つかったと思っている。

「自分のカラ」とは、ものの見方や考え方を変化させないことではないだろうか。言い換えると、自分の生まれてから構築した価値観の枠の外には出ようとせず、常に自分とは異なる価値観から自分を守っていくということであり、そこから出てくる行動や発想は、ネガティブなものであるといえる。

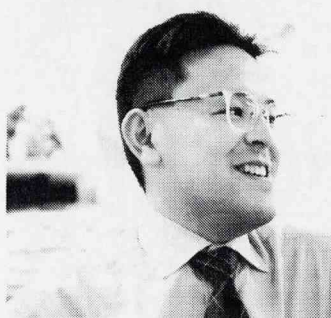
そして「自分のカラを破る」ということは、ものの見方や考え方を変化させること、言い換えると、自分とは異なる価値観を受け入れるとともに、よい部分は自分の価値観に取り入れて、常に進化させることであり、そこから出てくる行動や発想は、ポジティブなものであるといえる。

これを踏まえ、自分の過去の行動や発想を思い返すと、人間誰しも自分自身はかわいいもので、全ての行動や発想に自分を守る部分があり「自分のカラ」を破ることができていないことに気が付く。保身的になること自体否定するものではないが、「自分のカラを破る」ために、この保身的考え方を捨て去ることは、非常に勇気のいるものではないかと改めて感じる。そして、「カラを破る」よう勇氣を持って行動をしていきたいと考えている。

最後に、今回の産政塾を通じ、さまざまな業界で情熱を持って自分なりの生き方を貫き通している多くの人の話を通じ、いろいろなものの見方・考え方に接し、人間的にも一回り大きくなることのできたと思っている。また、「自分のカラ」について、自分なりに結論が出せたことや「自分のカラを破

る」ことの難しさなど多くのことを学ぶことができた。そして、このような機会をつくってくれた中部産政研の丹羽主任研究員に心からお礼を言いたい。

式阡年的情報化社会雜感



丸栄労働組合

小野田 和 広

〔プロフィール〕

おのだ かずひろ（35歳）

- 1965年 9 月 愛知県岡崎市生まれ
- 1989年 4 月 ㈱豊橋丸栄入社 学生服売場に
配属 その後、販売促進部を経て
- 1998年 3 月 丸栄労働組合専従
現在に至る

〈家族〉 妻、息子（小学3年生）

〈趣味〉 音楽

【はじめに】

世は正に情報化社会。流行語大賞にも「IT革命」が選ばれ、某国の首相は講演会や記者会見でIT、ITと連呼している（もっとも、首相自身はeメールすらできないらしいが……）。では、「IT—Information Technology—情報技術—とは何なのか」、「情報化社会とはどのようなものなのか」を正確に把握している人は、一体どれだけの人が。もちろん、私も全てを正確に把握するなどということはできるわけもなく、物の本や新聞、雑誌などでの情報を元に、「こういったものだろうな」といった程度の理解をしているに過ぎない。しかし、朝出社したら、まずパソコンの電源を入れ、メールチェックを行い、会議資料を作成したり、ニュースを作ったり。多分、事務所にいる時間のほとんどはパソコンの前に座っているような気がする。家では、妻はインターネットで情報を検索したり、友達にメールを送ったり、息子は絵を描いたり。私と妻との連絡もお互いに携帯電話で行っている。「便利な世の中になったなあ」というのが一般社会に生活する者としての実感である。

一九八〇年代に「ウォーゲーム」という映画があった。これは、アメリカの小学生が国防総省の対戦シミュレーション用スーパー・コンピュータに間違ってアクセスし、戦争ゲームと勘違いして対戦していた結果、今度はそのスーパー・コンピュータが世界大戦を行っていると勘違いして、ソ連（当時）に核弾頭ミサイルを発射しそうになるというもの。最後には、三目並べ（引き分けになるパターンが決まっている）で対戦しながら、聞いちゃ勝ち負けだけではなく、引き分けもあったことをコンピュータに認識させたのだが、アメリカでは二十年も前から、コンピュータ全盛の時代を予想し

ていたのである。

また、一九九九年にニューヨークに行ったときの機内で「エネミー・オブ・アメリカ」という映画を見た。これは、ふとしたことから弁護士がアメリカ国家安全保障局に狙われ、盗聴や発信機、人工衛星による尾行など、最先端技術で追い込まれていくといった内容。この映画を見たとき、情報化社会の怖さ、個人情報を守ることの難しさを改めて感じた。情報化社会には功罪があるということも認識しなければならない。

【小が大を呑む】

二〇〇〇年はいわゆる「二〇〇〇年問題」で幕を開けた。心配された社会の大きな混乱は、さほどなかったような気がするが、一月には全世界の経済界、特にメディア業界では大きな出来事があった。AOLとタイム・ワーナーの合併である。ご存知の方も多いと思うが、AOL (America On Line) は全世界に約二、〇〇〇万人の会員を持つアメリカ最大のインターネット・プロバイダであり、一方、タイム・ワーナーは世界トップレベルの総合的メディア企業であり、出版大手のタイム (「Time」 「People」誌などを発行) とワーナー・ブラザース (映画、音楽など) が合併して発足したもので、AOLとの合併前にケーブルテレビ局のCNNを含むターナー・ブロードキャストینگ・システム (TBS) を買収するなどアメリカのメディア業界の紛れもない大手企業の一つである。

この二企業が合併することで、何が大きな衝撃となったのか。それは、この合併が事実上「AOLによるタイム・ワーナーの買収」であったことである。売上高、従業員数など企業の規模を示す指標

では、明らかにタイム・ワナーの方が大企業である。にもかかわらず、なぜ買収することが可能であったかという点、株式の時価総額（発行済株式数×株価）を背景とした株式交換制度があったからである。つまり、AOLの方が時価総額でタイム・ワナーを大きく上回っていたのである。だから、「小が大を呑む」合併を可能としたのである。もはや、長い歴史を持つ伝統企業であろうとも、IT革命の時代には単独では生き残れないことが明らかになったのである。

【非常識が常識に】

六月にはマイクロソフトに対し、OS部門とソフト・インターネット部門とに会社を二分割するよう命じる判決が下された。もちろん、マイクロソフトは控訴しており、同社が分割されることが確定したわけではないが、情報化社会の中では大きなインパクトを与えた事例として捉えることができる。マイクロソフトはWindows 98やExcel、Wordでお馴染みの世界最大のソフト開発企業であり、IT革命時代の寵児であることは間違いない。かつて、Windows 3.1が開発された当初、この画期的なシステムに対し市場はもろ手をあげて歓迎し、第一次パソコンブームが到来した。私が就職活動を行っている時期（昭和と平成の狭間）にも、ソフト、ハードを含めたコンピュータ関連企業の求人が数多く出されており、友人や親戚もそういった企業に就職していったが、その後、「資産なし倒産」などに象徴されるように、「ブーム」で終わった感がある。

第二次パソコンブームは、Windows 95が発表された一九九五年頃であり、パソコンが家電化していった時期である（もっとも、98でお馴染みのNEC関口会長は、パソコンが家電であることを否定

し続けたが……。この時期、猫も杓子もパソコンを購入し、クリックするだけでウィンドウが開いていくシステムに驚愕した。秋葉原で真夜中に発売を開始したときは、まるでお祭り騒ぎであったことを覚えていて。この頃からパソコンは一般家庭の生活に深く関わっていくようになり、現在の情報化社会の基礎を作ってきた。

このように、IT革命の最先端を突き進み、時代の大きなエポックを次々と発表していったマイクロソフトに対し、司法（市場）はその独占的状态を拒否したのである。そして、マイクロソフトの創業者であるビル・ゲイツ氏は同社CEO兼社長の職を辞し、新たなインターネット関連事業に専念するそうである。パソコンの主役とした二十世紀のIT革命が大きな転換期を向かえている象徴であると言える。

マイクロソフトがその技術を極秘事項として全く公開しなかったことに対し、オープンソースのOS、Linuxがその勢力を拡大しつつある。Linuxはフィンランドの学生が開発したOSであり、ソフトの核となる部分がインターネットで公開されており、世界中のコンピュータ・プログラマーや研究者が、自分で使いやすいように改良を進めている。今までの常識では、コンピュータ・ソフトの基礎部分が一般に公開され、誰もが簡単にアクセスし、改良部分のやり取りを無償で行うことなど考えられなかった。

「十年一昔」と言っていた時代は、とうの昔に過ぎ、「五年一昔」でも追いつかない「激変の時代」に突入している。コンピュータの性能だけを捉えてみても、月に着陸したアポロで使用されていたコンピュータの性能は、今の激安パソコンよりもレベルが低い。Windows 95のブームに流され

て購入したパソコンでは、Windows 98 の性能を一〇〇%発揮することはできない（ただの机上のオブリジェ？）。情報社会の激変では、平成大不況真っ只中の日本経済の中にあつて、日本の情報ネットワークを握り、唯一成長企業として捉えることのできる N T T に対抗するため、D D I、K D D、I D O が合併し、K D D I が誕生した。今後の社会を考える中では、デジタル・ネットワークを握った企業のみが生き残ることができるのである。

【バーチャルとリアル】

ここで、われらが流通業界について。R E I (Recreational Equipment Incorporated) という企業がある。R E I はアウトドア用品のネット販売ではアメリカ最大規模の企業である。しかし、同社はネット販売だけではなく、全米に一〇〇店舗の店舗を構えている。ネット販売で全米最大であるなら、店舗などを作らず、それだけに特化すれば、もっと効率的な経営ができるという考え方もある。しかし、同社はバーチャル（仮想）とリアル（現実）の補完関係に注目しており、商品の簡単な説明はホームページで行い、店頭には高度な専門知識をもった係員を配置するとともに、室内試乗・練習施設を充実させ、マウンテンバイクの試乗やフリークライミングの練習から、実際に土砂降りの雨の中でパーカーの防水状態を確認することができるなどユニークな「お試し体験」のコーナーもある。つまり、オンラインと店舗のシナジー（相乗）効果を維持することで、顧客に役立つサービスを提供するのである。その R E I の日本出店第一号店が、東京都町田市に四月オープンした。「click & mortar」という言葉がある。オンラインとオフラインの両面を組み合わせた形態のことである。R E I は、正

にそういった形態の代表であり、今後流通業界が進むべき方向性の一つを示していると思う。

投資信託や株式も、今やインターネットや携帯電話でもできる。それでは、信託会社や証券会社が全てなくなるかといえば、そうはならない。オンラインのバーチャルな面であっても、オフラインのリアルな面であっても、顧客に最大の満足を与えたものが勝者となるのである。情報化社会では、ネット能力が生きる分野を特定し、そこでは徹底的にITを活用してコストを削減するとともに、人間が介在する分野を残すことで、人間の手触りの効果を最大限引き出すこと、つまり、「High-tech & High-touch」の発想が必要なのである。

【最後 二】

BSデジタル放送がスタートし、私たちの生活にも本格的なデジタル化の波が押し寄せている。今後のデジタル化の主役は、次世代端末であり、白物家電であるといわれている。JR東日本は携帯電話に定期券の機能を持たせるシステムを開発し、実際に運用を始めることとしている。否が応でも、私たちの生活はデジタル化、情報化が進んでいくのである。

そういった環境で、何が重要となってくるかといえば、そういった「モノ」に使われるのではなく、「モノ」を使いこなしていかなければならないということであり、人と人との繋がり的手段として、IT技術を上手に活用していくことであると思う。

そのためには、今までの考え方から転換していかなければならない。今までは何の疑いもなく常識であると考えていたことが通用しなくなる社会はもう始まっているのである。

個人も、企業も、社会も、今までの既成概念にこだわることなく、自ら「殻を破っていくこと」こそが必要であると思う。

《追記》

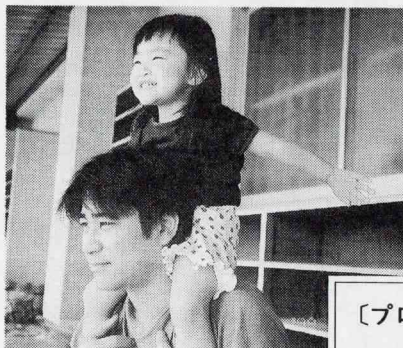
「はじめに」の中で、二〇〇〇年の流行語大賞の記述があるが、そこからもお察しの通り、今はいくつ走も半ばである。産政塾の事務局からは、三度程出稿の督促を頂いた。二〇〇〇年に発行したいとおっしゃっていた前事務局の丹羽さんには合わす顔がない（といっても、どちらにいらっしゃるのかは存じあげないが）。

第十一期産政塾には、第二回を除いて参加させていただいた。スキーをやったことのない私が、無謀にも上着もなく、トレーナーにジーンズでグレンデに立った第三回、「足助の小椋桂」のコンサートを満喫した第四回、会場がせっかくの「錦三」だったのに、結局どこへも行かなかった第五回、設案の山道で迷い、現地に着するまでに精も根も尽き果てた第六回、第一回のシーンとした雰囲気から僅か八ヶ月でこうも変わるかといった感じの最終回。どれも楽しい思い出である。

いろいろな社会で活躍されている講師や塾生の皆さんとの交流は非常に有意義であり、何物にも代えがたい財産であると思う。皆さんには、「口の悪いやつがいたな」とだけ覚えていただければ幸いである。

記念写真

—自分を振り返る—



フタバ産業株式会社

柴田 博

〔プロフィール〕

しばた ひろし（33歳）

- 1967年 愛知県豊田市生まれ
- 1986年 フタバ産業株式会社入社
現在に至る

〈家族〉 妻、長女、次女、三女の5人家族

〈趣味〉 野球、アウトドア

〈はじめに〉

第一期産政塾が終了し、最期に提出すべきレポートが提出期限に対し大幅遅れ。関係者のみなさまに大変ご迷惑をおかけしました事に対し深くお詫び申し上げます。

テーマは「自由」。一番難しい……とふとアルバムを手にし、自分を振り返ってみることにしました。

〈幼少時代〉

私はとにかくおとなしい性格で近所の人からは「良い子供」と言われていると母親からもよく聞きました。それは単に兄が暴れん坊であった事のギャップでしかなかった様に思えます。写真を見ても、照れくさそうな表情のポーズでVサインといったごく普通なスタイルの記念写真。兄の影響か、トラック（トラック野郎）に興味があり、よくトラックの絵を書いたり、兄の作ったプラモデルで遊んだ（壊した）記憶がよみがえります。

今振り返ると幼稚園時代は、兄の背中をみて、同じ事をしてきたような気がする。その結果、遊びについては、友達をリードするそんな片鱗を見せだしてきたのであった。

〈少年時代・小学校編〉

私が、小学校に入學し、六年間という学校生活を送ってきた時のアルバムを見る。そこには、たく

さんの写真があった。幼少のころとは違った、目立ちたがりなポーズの数々がずらりと並ぶ、クラスでの全員写真でよく一人だけ違ったポーズをとる光景を目にするが、それが自分であったという事に目を覆った。この写真を見れば、学校の成績はクラスでトップという言葉は無縁であった事は言うまでもない。しかし、ひとたび学校（勉強）から離れると、かばんを置き、友人との約束の場所へと向かった。あの頃は、野球やサッカーといったスポーツに興味があり、夜遅く日が暮れるまで遊びをエンジョイしたものだ。今でも覚えている事は、学校でキャンプをした時のこと、自分たちが初めて自炊し、テントを張り、夜遅くまでテント中で過ごした日の事が思い出される。

こんな小学校生活を送っていた私が、卒業間近に担任の先生から、ある言葉をもらった。「言動一致」・・・言った事を必ず実行し行動しなさい。自分の中で足りない何かを教えてもらった事を・・・「ツキッ」思い出す、あの先生の顔はマジだった。

〈少年時代・中学校編〉

私を通った中学校は、小学校から持ち上がった数名の友人と、他の中学校に行った友人と別れることとなったが、入学し今までの出会いを体験する事となった。

特にクラブ活動では、バスケット部へ入部することになり、厳しさを学ぶ三年間となった。

早朝からの練習では、眠い目をこすりながらのドリブル・パス、練習後の授業では、あくびをしながらの勉強といった毎日を送ることとなった。

クラスの仲間や先輩といった人から、いじめられない程度に付き合い、上下関係の大切さを知るこ

ととなった。

中学時代の中で一番仲の良かった友人は、バスケット部で苦楽を共にしたチームメイトでもあった鈴木君（通称ヨックン）であった。自分とは違い背が高く大人びた風格を持ち合わせ、クラスでも人氣者であった。そんな二人が、なぜか気が合いチビとノッポのコンビが誕生したのであった。いつも二人でどこでも一緒、バスケット部でも一年生でユニホームを受け取ったのも二人だった。そんな中、我らバスケット部は、二年の夏、県大会出場を果たしたのだ。市内大会一位、西三河地区二位を勝ち進み、バスケット部創立初めての快挙であった。市内大会、西三河大会と二人は共に一年生ではあったが、適材適所で起用され、活躍をみせた。そして二年の夏の県大会出場、その日はなんと二年生は野外学習（キャンプ）開催日でもあった。二人はこのイベントに参加することができず、思い出の記念写真とすることができなかった。しかし、県大会出場を果たし大会へ・・・敗退、二人の夏の思い出が終わってしまったが、来期への期待を誓ったのであった。

その後、二人でリードしたバスケット部も、三年の夏、市内大会では惜しくも一点差の二位だったが、西三河大会へと進み、「県大会」へと進む事ができず、二人が共に情熱を燃やした夏が終わり、幕を閉じた。

三年生の二学期からは、受験勉強となった。いつも二人でいたヨックンは、家業が大工（工務店）であった為、進学せず専門学校へ、私は親の勧めで進学する事となった。

今まで、クラブ活動しか「がむしゃら」「必死」という言葉に全く無縁であった私だが、クラブ活動中心であった数年を埋めようと「がむしゃら」「必死」に勉強したものだ。その間、二人の間を埋

める出来事は何もなく、距離を感じたものだった。

二人は別々の道を選択し、進む事になったが、今でも付き合っている友人のひとりでもある。

〈少年時代・高校編〉

高校時代は私にとって、最も思い出深く、楽しかった時代の一つである。今でも付き合っている友人も多く、卒業後十五年という月日もいつも共にし、現在でも家族ともども付き合っている仲間です。そんな関係になれたのはなぜだろうと考えてみると、高校時代のグループ化であると思う。とかくグループを作り集団で行動する。時には、道からそれたりしたこともあったが、帰ってくる道もあった。そんなグループであったことが今でも続いている要因だと思う。その要因の一つとして、あるときS先生から「悩みを聞いて欲しい」と言われ、仲間とビールやウイスキーなど買い込み、先生のアパートで大宴会という出来事もあった。(先生ゴメン!) S先生にはいろいろと社会勉強を教えてもらった(パチンコも)。S先生は学生時代に、学生運動をしていたといい、グループの素晴らしさ、大切さを教えてもらった。

そんなことから、グループで夏休みに工場へアルバイトに行った。その工場から学校へ連絡があり、「おたくの学校の生徒さんはいへんよく仕事をやって頂いております」と感謝され学校にばれた事もあり、私たちは学校でたいへんな目にあった事など、グループで悪い事もしましたが良い事もたくさんしてきた結果だと思い、アルバムを開いてみると個性的な友人や先生たちであったことを思い出します。ある公立高校時代の出来事です。そして私たちは就職戦線へと向かうことになったのです。

〈青年時代・社会人編〉

高校を卒業し、フタバ産業という企業に入社し、多くの人と接し、多くの事を学んだ。そして入社二年目に、青婦人部選ばれることになり、産政塾のテーマでもある「殻を破ろう」という感じで、自分の殻を破らざるを得ないこととなった。

ある時、全ト労連の「夢マインド」という催しをする事となり、私たちの労組から私が選出された。他の労組の方も含め約三〇名ほどが集まり、企画運営するものであった。皆さん個性派揃いで、約六ヶ月間を共にすることとなった。船上二泊三日の旅となり、企画運営も無事に終わり、自分自身すばらしい体験をさせてもらうこととなった。

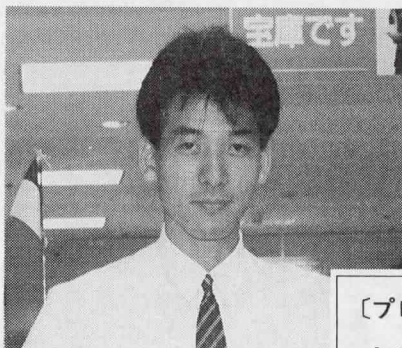
こんな楽しかった思い出のアルバムから、以後、記念写真が減少していったのであった。

そんな中で、私は家族といっしょにできる趣味を見つけ出した。それは「オートキャンプ」。なぜか自分自身がはまってしまったのである。あの少年時代の記憶でもある、秘密基地が思い出されるのだ。私は家族といっしょに、こんな形で記念写真を続けていこうと思います。

〈さいごに〉

今回、参加させていただいた産政塾で、お世話になった皆様に感謝を申し上げます。そして、中部産政研の丹羽さん、ありがとうございます。また、皆さんとお会いする日を楽しみにしています。

ジャパニーズ・ビジネスマン



㈱松坂屋 法人外商部

締 次 顕 治

〔プロフィール〕

しめつぐ けんじ (35歳)

- 1965年 8月28日 岡山県真庭郡出生
(福井県敦賀市出身)
- 1988年 4月 ㈱松坂屋 入社
食品売場に配属
- 1991年 3月 法人外商部に配属
現在も奮闘中

〈家族〉 妻、長男(8才)、長女(4才)、
父、母の6人

〈趣味〉 野球・スキー等スポーツ全般
子供とのサイクリング.....

「ゴッソ」目も開けられないし息をするのも苦しい。あたり一面真っ白な雪の世界。せめて地面に足でもついていけばましなのだが、あいにく宙に浮かんだ状態で、自力で何かアクションを起こすこともできない。「何で自分はこんなところにいるのだろう。このままどうなってしまうのだろう。ここまで来てしまったことが間違いだったのだろうか。」後悔したところで今の状況がどう変わるわけでもない。「いったいこのまま何分・何十分この状態が続くのだろうか。京子（妻）、優人（長男）、清花（長女）と順番に家族の名前をつぶやいたり、ひょっとするとこのまま……。」そんな縁起でもないことを考えながら緊急停止してしまった雪山のリフトにのったまま呆然としていた。

幸い一〇分ほど（の様に感じた）で再稼働し、何とかレストハウスまで無事にたどり着くことが出来た。髪の毛は凍り付き、口がこわばったままで言葉を発するにも苦労する。忘れる事もないであろう平成十二年四月二十四日。角皆優人氏を迎えての第三回産政塾。ゴールドenウィークを間近に控えた五輪後の長野で、自分という人間の弱さと、忘れかけていた自然の強大な力、そして何よりも家族の大切さを思い出させてくれた。

「ああ、産政塾。」第八回の開催を楽しみにしている今日この頃である。

月日のたつのは本当に早いもので、一月二十日に開塾した産政塾も八月二十八日の第七回をもって終了となった。それから一ヶ月以上がすぎ、今では私の勤める松坂屋の店頭もすっかり秋の様相だ。ちまたでは連日、シドニーオリンピックでの日本選手の活躍が伝えられ、中でも特に岐阜県出身高橋尚子選手の子女子マラソン金メダル獲得のニュースにわきかえっている。

ふりかえってみると、皆勤賞を目指していたのだが、第四、六回に出席できず残念だった。それらの回の内容を出席した塾生に聞いてみると、予想通り大変有意義だったそうで、今もって悔しい思いだ。どの回の講師も独特の人生観・価値観をもっておられ、出席したどの回も大変印象深いものだった。何故、その仕事を選んだのか、また、それを仕事として生きていくことに対してどう考えているのか。講師それぞれに動機こそ違いはあれ、現状に決して満足せず、目標を持って地に足をつけて前向きに生きていく。そんな力強さを持ったジャパニーズ・ビジネスマン（仕事人）だと感じさせられた。「そこで自分はどうか?」「これで良かったのか?」「入社してもうすでに十数年を経ており、今さら迷っているわけではないが、二十世紀の終わりに際して、自分の今までの人生について仕事を軸にして振り返ってみたいと思う。

私の出身は福井県敦賀市。若狭湾の東に位置しており、交通の面から言っても他府県からの北陸の玄関口だ。季節のメリハリは太平洋側と比べてはっきりしており、海を中心として夏のイメージが強いだろうが豪雪地帯で、一晩で一メートル近く降る事もざらである。

どちらかというと生活と自然が密着していて、早い話が田舎の地方都市だ。

私の父は繊維会社の技術系の職業であり、出張・夜勤・緊急出勤・単身赴任と、大変忙しく仕事をしていたようだが、週末は必ず家にいて家族とふれあうことを楽しんでいた。私はそんな父が大好きで、大きくなったら父のようになりたいと常々思っていた。

私の学生時代はツッパリがかっこいいと一様に思われており、ご多分に漏れずその軍団の中で大き

な顔をしていた。とにかく目立つことが大好きでバンドを結成してボーカルをやったり、生徒会の役員に立候補したりとアグレッシブに毎日を過ごしたが、親には弱く、勉強しろと怒られれば素直にそれに従うような子供だった。

そんな私が一番はじめに経験した仕事は中学二年生からの新聞配達だった。当時母が、集金のパートをやっていた関係で、私の住んでいた町内一帯の一〇〇世帯ほどの配達を任されることになった。中学生のアルバイトは禁止されているのだが、親の手伝いと言う名目で許されたらしい。もっとも給料は母のパート代金と一緒に支給されたため、実際自分がいくら稼いだのかわからなかったし、私としては部活のトレーニングの一環だと思って何のわだかまりもなかった。新聞屋の配慮で当日配る分は自宅の前まで届けてもらえるので朝五時に起床し、自転車に乗せて配り回るパターンの繰り返しなのだが、冬場はそうはいかない。豪雪のため道路の雪かきが出来ていない中をプラスチック製のソリ（通称スノーボード）に新聞を乗せて道なき路をつきすすむ。吹雪の中で胸まで浸かった雪の中を進んだことが何回もあった。辛くてやめたいと思ったこともあったが、自分を鍛えるためと我慢し、代わりの人が見つかるまでということと結局高校二年まで続けた。職業という意識はなかったものの、新聞を配り終えなければいけないという責任感と使命感は感じており、そのころの体験は今の自分の人生観に大きな影響を及ぼしている。

次のアルバイトは高校二年の冬からだった。敦賀酒販という酒の間屋で、酒屋や旅館等に各種飲料を卸し売る仕事であった。そこで私は運命的な出会いをすることになる。そこにいたのは南海ホークス（現ダイエーホークス）で活躍しているはずの刀根先輩であった。先輩は三学年以上一緒にプレイ

したことはなかったが、俊足・強肩・強打の外野手で私が中学三年時のドラフトで下位指名ながら見事ホークスに入団を決めたスーパースターなのだ。水島新司の「あぶさん」にも代走・刀根として登場した彼が何故そこにいるのか？ 最初は理解できなかった。が、一緒に配達を続けて様々な話をすると、プロ野球という世界・仕事の厳しさを感じざるを得なかった。つまり誰もが努力しないと上にならなくていけない世界で周りと同じ努力をしてはいけないということであった。シーズンオフで帰省しているときも体を動かし、それが少しでも収入につながれば（バットの一本でも買えれば）一石二鳥だと考えて働いていたのだ。実際彼の仕事は常に本業を意識していて、ビールならば三ケース（六〇本）日本酒なら二ケース（一升瓶二〇本）を軽々と持ち上げしかも小走りに届けるので、私には到底真似できなかった。プロ野球選手としての彼の寿命はそれから数年後に尽きてしまったが、その当時彼にもらったサインは私の宝物である。時は過ぎ高校卒業を意識し始めた頃、進学か就職かで悩んだ時期があった。地元には原子力発電所が幾つかあり、地元での求人は引く手あまたである。

実際、就職する卒業生の大半が原発関連の仕事に従事している。しかしこの敦賀からほとんど出た事のない私にとって、このままそこに住み続けることに大きな抵抗を感じたので、結局進学に絞って遅れていた勉強にがむしゃらに打ち込んだ。敦賀から他府県に出ていく際、その大半が大阪・京都を中心とした関西圏である。方言も関西弁であり、情報・文化の発信も関西からが多いのがその理由かと思う。それ以外のごく一部は東京に進み、名古屋を中心とした中部圏はほとんどその対象にはならなかった。しかしその当時、私の父は三重県四日市市に単身赴任中であり、私の高校卒業と同時にそこに引っ越す予定になっていた。生活の拠点が中部に移ることで、自宅から通学を条件に進学先を考え

たが、通学圏外ではあるが偶然豊橋市にある大学が目に残った。小学生時代に海洋少年団に所属していた私が、親元を離れて初めて全国大会に参加したのが四日市でその翌年が豊橋だった。なにか運命的な（というよりもこじつけで）ものを感じたと親を説得して、受験し、なんとか晴れて遠い豊橋での下宿生活をスタートさせることが出来た。そして風呂なし炊事場共同の家賃六千円の下宿生活が始まり、その中で私が選んだアルバイトがホテルのボーイであった。なんと言っても食事付きで、場合によっては宴会料理の残り物にもありつける。また、宿直者用の風呂があったため銭湯に行かずとも済むとあっては、のめり込まないはずもなく、昼夜問わずその仕事に打ち込んだ。エスカルゴや極上ステーキ・世界の三代珍味など、今より当時の方が豊かな食生活であった？。ホテルでは主に結婚披露宴の接客が多かったのだが、仕事を忘れてもらい泣きすることが多く、「人情の機微に触れる」接客という仕事のおもしろさを感じ始めるようになったのはこの頃であったと思う。

資格が身を助けると言われるが、珠算八級、習字四級の私が唯一胸を張れるのが、教員免許である。就職を意識し始める頃になって、今まで一番近くにあってそれでいてよくわからなかったのが教師という仕事であり、私として一番迷惑をかけたであろう人がどういう立場の人であったのか、それを知りたくて教職課程をとった。そして教育実習にいき、当時末弟の通っていた中学校で教鞭をとらせていただいた。中学校は言わずとした義務教育であり、誰も等しく教育が受けられる。私は一年生の教室に配属されたがそこに一人の障害を持った長谷川君という少年がいた。彼は勉強熱心だが字を書けるほどの器用な手がなかった。教材づくりやプリントの作成のために夜中の一二時をまわる事もしばしばで、夏休みのある教師は楽だと思っていたが何のその。周りの眼もあるので二四時間気の抜け

ない大変な仕事だと実感した。二週間の実習はあまりにも短く、ついにお別れの時が来た。最後に私に對する一言を書いてもらったのだが、長谷川君はふるえる字で「ありがとう」と書いてくれた。そのプリントがまたしても私の宝物であることは言うまでもない。

大学四年になり狭き門の教員を目指すことは至難だと悟っていた自分にとって、教職はもはや仕事の対象からはずれていた。あきらめから時間的なゆとりを得た私は、自宅から通学し、父の勤める出向先のコンピュータ関連の会社でアルバイトをしていた。それは流れ作業でマイクロチップを機械につける工程なのだが、父の方がだいぶん意識したように理由を付けては現場に顔を出し、こちらの様子をうかがっていたようだった。たまに昼の食事時などは決しておいしいとはいえない食事を一緒にとったりして、今まで對話の少なかった時間を取り戻すのにお互いに一生懸命になった。父には、今まで家族に言えなかった苦労が息子には何となくわかってもらえる事や、私が一生懸命働くことによつて遠回しに父に伝わっていく評判が嬉しかったようで、多少なりとも親孝行につながったのかと思う。定年を迎えこれからゆくり出来ると思った矢先に胃癌が発覚し、現在は自宅でリハビリ中の運のない現在の父であるが、わたしにとってその当時は、父と同じ職場の方々とふれあうにつれ、その苦労や仕事の重みを知ることが出来て大変有意義であった。たった二ヶ月であったが、そのときの給与明細が私の三つめの宝物である。

さて、時は過ぎ昭和六十二年某月二十八日、私は晴れて念願の松坂屋への入社内定を果たした。何故そこを選んだのかは産政塾第一回でも話したので割愛させていただくが、売場から外商を通じて、

多くのお客様との接客の中で様々なことを学ばせていただいた。また、その仕事と平行して恋愛し、結果その相手と結婚し、二人の子供をもうけ、来年の二月にはいよいよ十周年を迎える事となった。公私ともに二十年前・十年前でも想像もつかなかった現在。いつの間にか百貨店を取り巻く環境は厳しいものとなった。消費に対するお客様の支出が減ったのかと言えばそうではなく、ユニクロ・しまむらを代表とする専門店の躍進や、情報ステーションとなったコンビニエンスストアなどの小売業のチャネルの拡大と、携帯電話をはじめとする情報端末への支出の増加が、今日の苦境を演出している様に思える。それは反面、世の中の変化を敏感に察知出来ず、百貨店は時代に取り残されてしまったかのように思われるかもしれないが、現状に手をこまねいていたわけではない。百貨店の前身の多くは江戸時代に創業した呉服店だ。当社もその流れをくみ慶長十六年（一六一一年）に創業したので来年は創業三九〇年を迎える。それだけ長く続いている理由はおお客様の支持に他ならないが、幾たびの政変・不幸な戦争を乗り越えてきた先輩諸氏のがんばりは筆舌に尽きない。百貨店の原点は接客。「人情の機微に触れる」接客という仕事。その最高峰が百貨店のあるべき姿では・・・二十一世紀はきっと百貨店復権の時代にしたいものだ。

最後になったが今回の産政塾では、業種の垣根を越えた様々なメンバーが集い、その交流を通じて多くの事を吸収し、自分の現状を見つめ直すことが出来たと思う。講師・塾生・そして事務局の方々には本当に感謝しています。ありがとうございました。

日本人と英語、中国人と英語



名古屋大学国際開発研究科

常 兆

〔プロフィール〕

じょう ちょう (27歳)

- 1972年 中国天津市生まれ
- 1995年 中国北京国際関係学院卒業
(日本語専攻)
- 中国天津本田モーター有限公司 入社
- 1998年 中国北京電通广告有限公司 入社
- 同 年 南山大学外国人留学生別科 入学
- 1999年 名古屋大学国際開発研究科 入学
- 現在に至る
- 〈家族〉 独身
- 〈趣味〉 チャット(人間と)、旅行、助手席
でのドライブ

日本人と英語、中国人と英語

来日してからよく、日本人の英語学習意欲に感動したものである。町中に溢れる英会話教室、目玉が飛び出るほど高価なネイティブ英語教師による教室と語学研修ツアー、書店の店内を埋めつくすほどのTOEIC攻略本等々、さらに英語を公用語にしようとの発言まで出たというのだから、この英語ブームの凄まじさに、われわれ在日外国人はただただ驚くばかりである。

産政塾でも英語が話題になった。海外の経験がある方をはじめ、英語をもっと勉強したい、英語がもっと上手になりたい、と真摯な口調で語られる人々が少なくない。その熱意に私はただ敬服するばかりで、専業学生である自分が恥ずかしくなるくらいであった。

現在私が所属する名古屋大学の国際開発研究科においても、英語が大変重要視されている。入学試験から半分以上の授業までが英語によって行なわれ、先生も学生も英語ができる人ほど鼻が高い。それに、英語能力が卒業後の進路を左右する大きな要素の一つでもある。まるで英語さえこなせば、明るい人生が待っているぞと言っても言っているかのような雰囲気である。

ところが、この英語学習の波は、日本人は格段に英語が苦手だということを背景にしているようだ。戦後における長い間、英語教育廃止や漢字廃止に対する賛否両論の争いが繰り広げられてきたが、グローバル化が進むにつれ、国際社会とリンクするために否応なしに、世界共通のコミュニケーション・ツールとしての英語を認めざるを得ない日本である。ところが、何十年英語を習っても全く喋れないという人がいる。しかもそれは一人、二人ではなく、むしろ学習者の大多数であるらしい。日本人

は皆生まれつき英語がだめだとは到底思えないので、問題はやはり教育にあるのではなからうかとされている。

日本の英語教育について、これまで数々の研究がなされてきたが、日本語と英語の構造が根本的に異なるので、欧米産の英語教授法では効果が上がらないという結論に止まるものが多い。また、日本人に話を聞いてみても、それは両言語の発音と文法の差に原因があるという。しかし、そのような説明に私はどうしても納得がいかない。ついには、“何でもあり”という産政塾の貴重な場を借りて、自分の考えを述べ、皆さんと意見交換をしたいと決心したのである。

まず、もしそうだとすれば、英語圏の人にとって、日本語もまた難しくてたまらないと感じるはずである。発音が簡単なかわりに漢字という壁があり、それと相殺する。ところが、日本語を自由自在に駆使するアメリカ人やオーストラリア人は少なくない。日本に何年いても日本語が一向に身に付かない人もいるが、どうもそれは勉強が難しいというより、日本人が進んで英語を喋ってくれるので、日本語が話せなくても困らないからといったケースが多いようである。

次に、実際にアジア諸国を見渡しただけでも、日本語が決して特殊なケースではないことがわかる。アジアの中で、発音から文法まで日本語と最も似通うのは韓国語であろう。また、中国語の場合は、音素がより複雑で英語の発音に適応しやすい一方、日本語のカタカナ語のような音訳外来語が殆どなく、すべての単語を一から覚えなくてはならない。それに文法上では、完了形ばかりか、過去形や進行形すらない言語であるため、英語における時制の概念を掴むことはきわめて困難だと思われる。ところが、韓国における英語教育の高水準はよく知られるところである。日本と中国との TOEFL の成

績を比べても、“これだけはできる”と思われる日本人の文法能力もけっして十分なものではないことが分かる。ちなみに、中国の学校では、『英語が世界共通語になったのは、最も易しい言葉だからだ』と教えられる。

英語コンプレックス症に悩まされる日本人は、あの手この手で問題解決の糸口を探している。しかし、ネイティブに苦情を訴えることはあっても、似たような立場にある漢字文化圏の人々の経験に耳を貸そうとはしないようである。この点においては中国人も同様である。自国の英語教育に限界を感じても、学習者個人のせいにしがちで、英語の学習に関する国際交流活動など殆ど聞かない。ネイティブに限りなく近いレベルを目指しているせいか、わざわざ横へ目を向ける必要がないとも思っているのであらうか。

私自身の経験でいえば、外国語学習の効果は、個人の適性よりも、教育制度や教授法にかかっているように思う。『言葉は生きものだ』とよく言われるように、教える内容が常に柔軟に変化しなければならないし、また、グローバル化がどんどん進展するなか、目指す目標を時代の要請に合わせて常に更新しなければならぬ。従って、あらゆる方法を講じ、教育制度と教授法を徹底的に見直し、ますます完璧なものにしていかなければならないと思う。

そこで、私は中国の英語教育制度を日本の皆さんに紹介しておきたいと思うようになった。但し、誤解されたくないのは、私はけっして中国の方法がすべて妥当だとは言わないし、日本より上だとも思っていない。お互いの参考材料となつて、相手の経験を生かし、教訓を戒めることにより、各自の教育システムを改善していったらいいと願うばかりである。

特別に深く調査・研究もしないまま、勝手な発言をするようで大変恐縮だが、以下は、私が知るところの中国における英語教育の現状について、ご紹介させていただきたいと思う。

中国における英語教育の現状

1 学 校

・小中高生向けの学習塾が禁止されている（余計な経済的負担が親たちを圧迫したり、先生や学生がこれに頼り、本業を疎かにしたりする恐れがあるからという）。これは、教育現場が学校に一本化されるため、系統的な教育が可能になり、生徒は英語が嫌になるまで勉強させられずに済む、という利点がある。

・大学生や社会人向けの特訓クラスや英会話教室も多いが、その殆どは外国語教育の名門大学が経営しており、担当の先生は大学の教授または講師である。留学或いは資格試験を目指す人を対象としていることから、ペースが速くてテストも厳しい。それにもかかわらずいつも満員状態だから、お金があっても通えないことがある。これを“修行の道場”に譬えるなら、“遊びながら英語を学ぶ”といった日本の英会話教室など、まるで幼稚園のようなものである。

2 授業時間

・全体として英語授業の時間数が日本を大幅に上回っている。小学校三年から英語教育を始めることになっているが、小学校においては週平均四時間であり、中学校と高校の場合は、学年が上がるにつれ英語の時間が徐々に増やされ、高三では週八時間になる。

・大学の英米科では特に勉強が忙しく、週に一五コマ以上のところが多い。日本人学生のカリキュラムを中国の学生に見せたら、『暇すぎる』と言われても仕方がないだろう。

3 教師

・大学によってネイティブ外国人教師を雇うところもある（その場合は資格が必要で、通常語学の専門家かアナウンサーが多い）が、小中高校では、中国人教師が教えることになっている。中国人先生の癖が生徒に移ってしまうケースもあるが、発音記号とテープによる矯正のおかげで、それほど問題になっていないようである。当初は経済的な理由からそうなったわけであるが、十数年継続してきた結果、『中国人教師が鍛えられる』という予想外の効果が得られたようである。

・大学および一部の高校においては、難しい文法の説明を除いて、授業は英語で行われるのが一般的である。日本なら、先生が喋れても学生には分からないというところだが、実際には習慣になっってしまったているせいか、学生は聞きなれているようである。

4 教材

・初めは、かなりの時間をかけて発音記号を学習する。中国語にも音訳の外来語がいくつかあり、例えばコーヒーのことを珈琲（発音「カフエ」）と言うが、誰しも「カフエ」と発音すれば外人に通じるなどとは思っていない。ちなみに日本人には、カタカナ語をそのまま英語だと思い込んでいる人が多いらしい。中国の学生は、知らない単語に出くわすと辞書をひく、そこで辞書にある発音記号をチェックすれば、ほぼ正確な発音ができるようになる。癖こそあるものの、日本人の英語より中国人の英語のほうがアメリカ人に通じるのは、実はこの発音記号で学習することに原

因があるように思う。

- 大学以上になると、テキストはすべて英語で書かれている。辞書に関しても、英英辞典が広く使われ、英語の単語は英語で説明する、英語の文章は別の英語表現で言い換えるという習慣は、日頃の授業で徹底されている。何でも日本語に訳してしまう訳読式の日本型教育法とは違って、翻訳の能力よりも、英語式思考で考えることが求められているのである。

5

試験

- 小学校の段階から入試で英語が必須とされ、国語と数学に次いで三番目に重要な科目とされている。また、大学入試には簡単な英会話による面接がある。大学レベルでは、英語以外の外国語専攻を除いて、国家英語検定を受けることが学生に義務づけられている。大学英米科では二年目に試験を受け、合格しないと短大レベルまで落とす大学もある。

- 試験問題として、翻訳の出題が少なく、リスニングとリーディング重視の傾向がある。それに、中国語にない冠詞、前置詞、時制などに関する文法練習の比重も大きい。大学の場合、英米科にしても、そうでないにしても、試験内容が非常に厳しい。リスニングでは、普通の速さで高度な内容を聞かされるので、外国人と直接練習するチャンスに恵まれない中国の学生たちは、毎朝VOAやBBCヒヤースを聞いて耳を馴染ませている。リーディングではTOEFLが常に意識にあり、そこでは自然科学の論文がよく出題されるため、膨大な数の語彙が必要とされる。私の出身校の英米科では、国家試験を控えた学生たちは、『vocabulary 10,000』という本を手にして必死に覚えている。

・この道の達人があまりにも多すぎるので、その競争ぶりには想像を絶するものがある。トップにたつことができた少数のエリートのみがアメリカ留学の夢を実現できるのである。中国では、TOEICがあまり知られていないのに対し、TOEFLやGREなら毎年何万人という人が受けている。経済的理由から全額奨学金をもらうためにもTOEFL 600点以上、GRE 2000点以上をとらねばならず、“アメリカに行ってしまうえば、英語ができるようになる”のではなく、“英語が完璧にできなければ、アメリカにいけない”というのが常識である。日常生活では殆ど実用性がないのに、英語を“道”のように重々しく受け止める中国の学生にとって、苦勞を惜しまないそのエネルギーの秘密は、正にこの“アメリカ中毒”にあると言っても過言ではない。

・受験勉強に集中するため会話能力は軽視されてきた。それに、実践の場が少ない故、ごく一部少数派の恵まれた人を除いて、読書ができてても喋れないという問題は幅広く存在する。これは正に中国の英語教育におけるアキレス腱といえるのであろう。簡単に海外に行くことができ、はじめから外国人教師がついてくれる日本人学生のことを、中国の学生たちはただただ羨ましく思うばかりである。近年オーラル重視の動きもあったが、時間とお金が限られているなか、事実上ほぼ諦めてしまっているのである。唯一の救いは、間違いを恐れない性格と長年にわたった音読訓練のおかげで、多少なりともそれがカバーされているようである。

英語教育における中国と日本との主な共通・相違点をまとめると、以下の通りである。

共通点

- ・ 社会全体として英語偏重の傾向がある。
- ・ 文法重視、会話軽視の傾向がある。
- ・ 実務上の必要性がないのにも関わらず、受験または就職・出世のために英語を学ぶ。
- ・ 受験テクニックが鍛えられてきた結果、試験の成績は必ずしも実力を反映しない。

相違点

- ・ 日本人の多くは英語を単なるファッション感覚で捉え、どこまでできるようになりたいかもはっきりしないままだが、中国人は明確な目標にむけて、地道な努力を重ねる。
- ・ 日本人は楽をして英語が上手になれるものかということをいつも考えているようだが、中国人は、中途半端にできてもどうにもならないからと、苦労を覚悟する。おかげで、上のレベルへいけばいくほど、自信がつき更にやる気も出てくるのである。
- ・ どちらかといえば、中国は母国語と切れた教育方式をとるのに対し、日本は日本語と繋がった教育である。言い換えれば、英語を学習する過程において、母国語を導入させるか否かの違いである。その結果、日本人は自国語への翻訳（英文和訳）に長け、中国人は英文の英語での言い換え（英文英訳）に比較的強い。
- ・ 英語に関する受験の競争率についていえば、中国は日本より何十倍も激しいということになる。それだけに、中国人は日本人より何十倍も努力をしているのである。一言でいうと、英語を習うのに、日本人はお金をかけ、中国人は人生をかけるのである。

もちろん、環境整備や経済条件の異なる日中両国において、教育システムはそれぞれの実情に合うものでなければならない。しかし、大きな枠組みの中で、小さなことでもいいから、少しずつ改善していこうという気持を持たねばならず、その努力の積み重ねだけでも、教育効果が十分違ってくるのかもしれない。その意味では、たまには隣の生徒の勉強ぶりを見てみても、損にはならないのである。

日本人は「いくら勉強しても英語が上達しない」と頭を痛めているが、実はそれは努力が足りないからなのである。具体的な目標もなく、ただ漠然と「一日も早く上手になりたい」との焦りとは裏腹に、計画性がない故に非現実的である。そこで、「これではうまくいくまい」と分かると、たちまちお金で問題を片付けようとし、世の中の受験産業や英会話教室たるものは、さらにこの風潮を助長している。日本人は「英語ができないと困る」と口では言いながらも、実は「まわりもみんなそうだ」とわかると現状に満足してしまうのである。日本人をそのように思わせたのは、文部省の教育制度であり、マスコミの宣伝である。経済面で一時はアメリカをも追い越した日本なのに、「なぜ苦労してまでわざわざ英語を勉強せねばならぬのか」と、英語に対する屈折した心情が潜んでいないものだろうか。産政塾では、「日本人の耳に痛いことを話してくれ」とよく言われてきたが、この文章を皆さんは、いかがな思いで読まれただろうか。むろん、ただ悪口を言うつもりだけで書いたのではなく、いつも自分の中にある疑問を投げかけ、それを皆さんに教えていただきたいのだという気持ちだけは分かっていただきたいのである。

思 い



東邦ガス労働組合

杉 下 昌 明

〔プロフィール〕

すぎした まさあき (35歳)

- 1965年4月 愛知県名古屋市生まれ
- 1984年4月 東邦ガス株式会社 入社
供給部 導管検査課配属
- 1991年10月 導管技術センターへ異動
- 1990年8月 保安センター 保安指令課へ異動
- 1997年7月 東邦ガス労働組合へ
- 2000年7月 導管工事センター 占用課へ異動
現在に至る

〈家族〉 妻、長女 (10歳)

〈趣味〉 ドライブ、バイク、旅行

《はじめに》

産政塾の話しを聞いた時に、「産政塾」？、いったいどんな塾なんだろう？、会社に入社してまでも塾通いするの？、何を勉強するんだろう？ と、頭の中を色々なことが駆け巡った。

あれよ、これよと考えている間に、第一回産政塾の案内がきて、緊張の中での参加、周りを見回してみるとほぼ同年代の人達がいてちょっと安心。しかし、産政塾のテーマ「殻の外へ踏み出そう」、産政塾運営精神「（犯罪以外なら）何でもあり？」という資料を見て、「なんだこりゃあ」というのが第一印象で、今でも頭の中に残っている。

今期のテーマ（キーワード）は、「人」・「生きざま」ということで、これから計七回開催の産政塾でどんなテーマでどんな事をやっていくのだろうと期待や不安が入り交じった複雑な思いでいっぱいだった。

そんな気持ちで始まった産政塾塾生として、今期参加した数々の産政塾で学び、将来の夢について考えたことを思いのままに書いていきたい。

《殻（会社）の中の自分》

学校を卒業してから会社に入社してサラリーマンになって、結婚して、子供が産まれて定年退職するまでの一連の道が会社へ入社することで決まってしまう、大きな殻の中に自分が入ってしまったことに気がついた。

その殻の中の道を毎日一步一步進んでいくことが自分の生涯の人生なのだと思ひ込んでいたが、今回の産政塾の参加が自分にとっての大きなターニングポイントになって自分の人生（大袈裟ですが）をもう一度考え直すいい機会になったと思っています。誰しも人生を歩んでいく中でいくつかのターニングポイントがあると思います。それは、受験だったり、就職だったり、結婚だったり、ギャンブルで当たったりした時だったり、自分の興味のある物と出会った時などと考えてみれば、小さな出来事から大きな出来事まで多種多様ないろいろなパターンで現れると思います。

そこで、自分がただ一つの出来事として見過ごしてしまふのか、それともそれを一つの転機として前向きに受け止めて考え新しい目標なりに向って方向転換していくのかで自分の人生が大きく変わってくると思う。

《思い（夢）》

第三回産政塾の中で自分の思い（夢）は何ですかという講師の質問があつた事を思い出す。

講師の聞いている事はすごく単純で簡単に返答できる内容なのに、あらためて急に聞かれると「自分の思い（夢）何なんだろう」と考えてしまった。幼い時には、パイロットになりたいとか、レーサーになりたいとかいろんな夢があつたが、会社に入社して社会人になってからは、そんな事を考えても見なかった事なのだ。色々と考えてみると自分の趣味をいかしたことが現時点での「自分の思い（夢）」なのかなと思ひ趣味のバイクでの全国一周旅行と答えていた。

講師の方が言うには、その思いが本当ならば、自分だけでなく他の人にも伝わって、その思いは必

ず実現すると言う。

産政塾で出会った講師は、それぞれ分野は違いが目標（思い）を強く持っていて、その実現のために努力をしている人達ばかりである。自分の好きな事を職業に持って、これまでの職業を捨てて困難に立ち向かっていき、それを維持していく事が非常に大変なのに貫き通していることは本当に素晴らしい事だと思う。

自分に置換えて考えてみると、思っているよりも収入面や家族の事などが頭の中をよぎり実行に移す事はできないと思う。サラリーマンの宿命なのか、今のそれなりに安定した生活を捨ててまでも自分の「思い」のために人生の大きな選択をする勇気がないのが本心である。殻の外へはなかなか飛び出せないとあらためて考えてしまう。

《私の思い》

会社に入社してから、実行している事が一つあるのでここで触れてみたい。それは、「今しかできない事、今しか経験できない事」は、思い立ったら実行に移すことです。

例えば、旅行は、海外・国内問わずに行ける時に行ってしまう事です。我が家では、年間に何回も家族旅行（車で）へ行きますが、周りの人達から見ると我が家は、異常だと言います。どうしてそんなに旅行に行けるのか？とか、疲れるのによく行くなとか、旅行なんてものは老後に行けるから今無理していく必要はないとかいろいろな理由を言われます。そこで私が答えるのは、確かに年をとれば、子供も独立して手が離れるし、お金と暇があるから行けると思うけど、今を考えてみれば、若い時に

行く旅行と年をとってから行く旅行では、見るものや価値観も違うし、もし、何年か先に事故で大きな怪我をしてしまえば行けなくなるかもしれない。今しか楽しめない事もたくさんあるということを強く言います。特に海外旅行は、自分の考えを考え直すいい機会であると思います。文化、習慣の違い、外国へ行って特に思うのが日本は本当に平和で裕福な国だと言う事を痛感します。そんな体験も行ってみなければわからないことばかりです。無理をしない範囲で、若い時にいろいろな経験・体験を一つでも多くして自分の考え方を見直す機会を数多く持つことも人生勉強の一つだと思います。また、自分が欲しい（行きたい）と思ったら、後々に後悔しないためにも手に入れるための努力をして、欲しいものは必ず手に入れるようにしています。これも一つの「思い」の実現だと思います。

《おわりに》

二〇〇〇年一月二〇日に第一回産政塾（開塾式）に始まって、最終回の第七回産政塾までの八カ月間には、普通の会社生活の中では、知合うことのできない仲間や塾を通して様々な行き方をしている方の生きざまなどを肌感じて知ることができ、また、自分の人生と比較してサラリーマンの宿命の殻の中に閉じこもって日々目の前の業務だけをこなしていくという世界のつまらなさや学生時代に見ていた自分の夢、目標をあらためて思い出すことができ、これからの会社生活や休日の過ごし方も考え直すいい機会になったと思う。

私の産政塾は、終わってしまいましたが、第十一期の塾生の多くのみなさんや講師の方の貴重なお話を聞くことができたことは大変有意義なことであり、今回の体験を後輩たちにも聞かせることに

よって自分を振り返り、まだまだ「殻の中」から飛び出してはいないかもしれませんが「夢、目標に向ってアクション」を起こしていきたいと思えます。

最後に、中部産政研の皆様、講師の皆様、産政塾の塾生の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございます。

「急がば回れ」を思い出して・・



㈱東海銀行

大 東 輝 彦

〔プロフィール〕

だいとう あきひこ（34歳）

- 1966年1月 岐阜県土岐市生まれ
- 1990年4月 ㈱東海銀行入社
- 1996年11月 本店営業部に配属
現在に至る

〈家族〉 妻、長男、次男

〈趣味〉

私が中学生の時だったと思う。父に言われた事を今でもつくづく身にしみて感じている事がある。家族全員で外出するときの事だった。私は靴の紐を縛り終えて玄関に出たが、ふと忘れ物をしたことに気付いた。面倒くさがり屋の私は（今でもその性格を治せないのが悲しいが）、せっかく結んだ靴紐を再び解くのが嫌だったので靴を履いたまま四つん這いになって（もちろん靴が床に触れないように気をつけて）、家の奥の居間まで這って行って、忘れ物をとって玄関先まで戻ってきた。（得意気に・・、そのように這って歩く歩き方では当然、膝は痛くなるうえに時間もかかった）

忘れ物が何であったかは全く覚えていないが、その時父が「輝彦、急がば回れという言葉覚えておけ。本当に急ぐときは回り道をした方が早いものだ。靴の紐を解いてすぐに忘れ物を取りに行って、再び靴の紐を結んだ方がよっぽど早かったはずだ。」とさりげなく言われた事が今現在に至っても、事ある毎に思い出すものである。

「急がば回れ」というのは、単なる物理的な事柄に限らず、あらゆる事に応用が効く表現だと思われる。ことさらに知識を身につける必要性が重要な社会人になってからは、身につけるために基本に立ち返り、回り道をして初めてその意味を理解できることが多分にあると思う。

あえて回り道を選択することが出来るか否かというのは、本人の意識の問題ではあるが、なかなか勇気のいることだと考える。

人はえてして、要領よく物事を処理し、こなしていく事が評価される事が多いが、確実に要領よくこなしていく人はどこかで回り道を経験してその実力を身につけていくのかなと思う。

個人的には、思えば、社会人となるまでは、またはまだなつて間もない頃は、「急がば回れ」を実践するために面倒くさがり屋の自分との格闘であった。そしてここ最近の何年間は、時間の無い自分との格闘であるように思う。

とかく会社に入り十年も経過すれば、中堅社員などと呼ばれ、新しい仕事もどんどん任されてくる人も多からう。

そのような環境の中で、自分を成長させるのは、節目・節目で「急がば回れ」をいかに実践できるかではないか？ と最近考えたりする。

「急がば回れ」とは、経験することを惜しむな、とか経験することに費やす時間を惜しむな、などという意味にも解釈している。

〈時間のあつた学生時代に・・・〉

私はこれまでの人生において、様々な経験をしてきたつもりではあるが、逆に様々な経験をするチャンスも逃してきた。

先日、家族でリトルワールドへ遊びに行った時のことである。外国人のカップルが旅行に来ており、写真を誰かに撮って欲しそうな様子で辺りを見回していたところへ私と目があつた。男性が写真を撮って下さい、とお願ひしてきたので、二人の写真を撮ってあげたが、残念なことに気の利いた英語で話を弾ませることも出来ず、一言二言挨拶を交わして終わってしまった。

このような経験は、英語に堪能でない人なら誰でも一度は経験し、「英語が堪能だったらなあ、しば

らく一緒に会話しながら見物でもしたのに・・」と感じたことがあるのではなからうか？

私は、学生時代に友人から数ヶ月かけて海外旅行へいかないか、と誘われた事があったが、時間を惜しんだ自分は、あっさり断ってしまった。数ヶ月で英語が堪能になったわけではなからうが、英語に対する意識の持ち方は大きく変わっていたことだろう。

今よりはるかにたくさんさんの時間があつた頃に目一杯回り道をして、もっと経験を積んでおけばよかったなあ、と些細なきっかけで感じることもある。

〈社会人になって、よくある回り道〉

さて、経験といえ、社会人によくある「一杯行こうか」と言って、飲みに行くことであるが、入社して三年目頃のことだったと思う。上司から言われたことがある。「会社で覚える仕事より、先輩や上司と一緒に飲みに行くことで覚える仕事の方が多い」と。

業種にもよるのであるが、確かに仕事を終えて飲んでいる間は仕事の話も当然ながら出てくるもので、得意気に自慢話のように聞かされる話もかなり役に立つことが多く、またそこでの情報というのは、そういう場でしか得ることが出来ないようなものも多い。

仕事が終わってまっすぐ家へ帰り、家族サービスすることも大切であるが、たまには息抜きも兼ねて少々回り道をしてみることもやはり必要ではなからうかと思う。もう一つ重要なことは、情報の他にも人間関係が成立するということだと思う。社会の組織は結局人と人の結びつきであり、人に頼られたり、人を頼りにせざるを得ないことばかりであり、少々の回り道をして築きあげた人間関係と情

報が、これから先の圧倒的な「近道」へと導いてくれる筈である。

〈回り道をする時間を作る難しさ〉

とりとめもない例え話をしてきたが、回り道をするためにはその時間と余裕が必要である。

現在私は、妻と五歳の長男、一歳になったばかりの次男に囲まれて生活をしている。

生まれつき要領の良くない私は、仕事も遅い日が続いていた時期もあり、最近はず日・休日は家族サービ스에徹底すべく心掛けています。

年齢と共に自分の時間が狭まっていくのを感じながらも、できるだけ効率の良い回り道の仕方を考えて行動しなければならないことを痛感している。

くだらない話に戻るが、中学生の頃の忘れ物を取りに靴をはいたまま四つん這いで家の中を這っていったことの話に立ち返れば、居間までの距離を推し量って判断する様な要領も身につけていかねばならないと思っている。

〈殻の外へ踏み出すというとは・・・〉

今回、産政塾という多くの人と接するチャンスをもたらったわけであったが、産政塾は、今まで接することのなかった人達と接することを通して、一定の枠（殻）の中で考えがちであった思考回路に新しい道筋を与えてくれる、新しい発見を与えてくれる、新しい行動を与えてくれる、そういう経験を積むことができる場であり、また新しい人間関係を作る場であったのかなと思う。

普段は出来ない経験をするためにちょっと回り道をしてみる、そういうことの繰り返しで殻の外に踏み出していくということなのかなあ、と勝手に想像しています。

尚、私にはちょっと回り道をする好奇心と余裕をもう少し持つていく必要があるでしょう。

『自己観照』



名古屋鉄道株式会社

高木 敏 光

〔プロフィール〕

たかぎ としみつ (33歳)

- 1967年10月 愛知県尾張旭市生まれ
- 1986年4月 名古屋鉄道株式会社入社
神宮前幹事駅金山橋駅（現：金山総合駅）配属
- 1988年7月 喜多山乗務区 車掌
- 1991年7月 同 運転士
現在に至る

〈家族〉 妻、長男（5歳）、長女（2歳）、
金魚2匹（ペコ、ポコ）

〈趣味〉 釣り（なんでも）、スポーツ観戦（野球「ドラファン」、サッカー「グランパス」、相撲「貴闘力」、ゴルフ「坂上晴美選手」）、etc…

(はじめに)

第七回産政塾(閉塾式)を終了してはや一カ月、第八回をいつ開催しよう…などと考えていたころ、一本の電話がかかってきました。デンソーの横井さんからでした。電話では近況報告や、たわいもないジョークなど、一時間くらい話し込んでしまいました。その中で「第八回をいつごろしよう」という話をして「じゃあ今度、フタバ産業の柴田さんも誘って打ち合わせ(とりあえず飲みに行こう、という表現の方が正しい気もする)をしよう」ということになりました。じつは、私を含めて横井さん、柴田さんは第一回から第七回までの産政塾の全行程を皆勤した『飲みすけ三人トリオ』(勝手にネーミング)だったのです。今振り返ると、第一回から第七回まで常に一緒にいたような気がします。第一回の時は緊張もあり「誰とどんな話をすればいいんだろう」なんて思っていました。回を重ねていくうちに親しくなり、第三回の「角皆氏を訪ねて」では、白馬村へ一泊二日の合宿研修に参加しましたが、その時は夜おそく(寝たのは午前三時くらい)まで語り合い、一番印象深かったように思います。異業種交流ということで各企業の二五名(うち女性二名)の方々が集まり、様々な講師を訪ね、あらゆる事柄について討論できたことは、私にとって貴重な体験になりました。今後、様々な局面でこの経験を活かし、頑張りたいと思います。事務局の丹羽さんをはじめスタッフの方々、塾生の皆さんに感謝しています。ありがとうございました。

（好きなこと）

D党の私にとって、残念な結果になってしまった今年のプロ野球：　そう、私はドラゴンズの大ファンである。ドラゴンズが勝った夜は、TVのスポーツニュースを全て見るのは当然、翌朝のTVのスポーツニュースをチェックし、その後コンビニに買って中日スポーツを買い隅々まで読む。嫁さんいわく「なんで同じような内容なのにいくつも見るの。変わらんでしょ。」あーこれだから素人は困る。各局全て、解説者も違えばアナウンサーも違う。となれば同じ試合でも、人によってコメントや映像シーンも変わってくる。そこが楽しいのである。わが家はドラゴンズの勝敗によって大きく左右され、『勝てば天国、負ければ地獄』とはおおげさかもしれないが、そんな感じである。しかし、今年にはジャイアンツの胴上げを、目の前で見なくてはいけなかった星野監督、コーチ、選手、そして私たちドラファン、皆同様の思いだったにちがいありません。昨年の今ごろは、職場のドラファン二人ほどが日本シリーズのプラチナチケットを購入すべく、ナゴヤドームに二週間、泊まり込みで並んだのを思い出しました。あーあのころはわくわくして楽しかったなー（結果は惨敗）今年のセ・リーグは前半、完全に団子レースでした。どの球団が抜け出すかがわからず、毎日順位が変わり面白かった。その中でもジャイアンツは多額の金をつぎ込み、良い選手をかき集めたにもかかわらず、歯車がかみ合わず低迷していました。しかし後半戦は、力の差を見せつけるかのように勝ち、ぶっちぎりで優勝しました。タイガースの野村監督が優勝したジャイアンツへ「今年の巨人に素直に」おめでとう「と言えない」とコメントしていたのが印象的でしたが、来年こそ、わがドラゴンズが優勝するこ

とを信じて、応援したいと思う。

また私は、だいの“釣りファン”である。あえて“釣りキチ”という言い方はやめておきます。先日家族を引き連れて名港に出掛け、ハゼ、アナゴ、カサゴ等を釣って来ました。そして家に持ち帰り、天ぷ羅にして食べました。長男（五歳）が最近“生き物”に興味をもち始め、この夏は、セミ採り、ザリガニ採り、カエル採り、に挑戦しました。セミやカエルも生き物で命があり、その命の大切さを教えていきたいと思います。私自身は、海、川問わず“広く浅く”タイプで、手軽さをポイントにおいて遊んでいます。その中でも、溪流釣りは大変面白いです。年に一回ですが、二月一日のアマゴの解禁日には会社の仲間と有給休暇を取って出掛けます。岐阜県郡上八幡の吉田川に朝五時に到着しポイント探しをします。この日は解禁日ですので、大変釣り人も多く、いいポイントはすぐに取られてしまうので、日の昇っていない暗い時間に場所取りをします。毎年思うのですが、真冬のこの時間、この場所、想像を絶する寒さなのです。釣り竿についた水滴が数分で凍ってしまいうほどで大変つらいです。でもこの“つらさ”を乗り越え、最初の一匹を釣り上げた瞬間、この“つらい”激寒も忘れてしまいます。昼ごろまで釣りをして、この釣れたばかりのアマゴを、その場で塩焼きにして食べるのですが、山にかこまれた大自然の中で食すこの“美味”は格別で経験した人でなければ味わえません。“釣り”というものは、ただ魚を釣り上げるだけでなく、その釣り上げた魚を料理して食べる。そうしてこそ釣られた魚に対して供養になりますし、釣りの本当の楽しさはわからないと思います。釣りは一人でもできる趣味です。これから先、年を取っても釣りをやり続けたいと考えています。

(自己観照)

“我執”ということばがありますが、お互い人間は、意識しないまでも、つい自分自身にとらわれるというか、自分で自分がしていることを正しく評価できないことが多いのではないのでしょうか。もちろん、わたし自身を含めてですが、人はよく「自分のことは自分が一番知っている」といいます。たしかに自分の思いは、他人には、うかがいしれない場合が多いので、他人よりも自分のほうがよく知っているはずです。しかし自分の考えや行動が果たして社会的に正しいかどうか、道理にかなっているかどうか、身勝手になっていないか、などを判断するのは別問題だと思う。むしろその点については、他人のほうがよく知っている場合が少なくないでしょう。“自分がどう思われているのだろうか？”と不安になることが時々ありませんか？ それはやはり、人間というものは、どうしても知らず知らずのうちに自分中心に、あるいは自分本位にものごとを考えがちになって、他人からみたらずいぶんおかしいことでも、一生懸命に考え、それを正しいと信じている場合が多いからではないでしょうか。もしそのように、自分自身にとらわれた自己本位の考え方を押し通そうとしたら、やはり物事が円滑に運ばないでしょう。他人が傷つくか、あるいは自分が傷つくかするでしょうし、ましてその考えが社会正義なり、共同の幸せに反することならば、やがて自分の身を滅ぼしてしまうことにもなりかねません。もしそんな人が、社会の指導的な地位に立っていたならば、単に自分を滅ぼすだけでなく、指導される人々全体を誤った方向へ導いてしまうことになります。かつての独裁者といわれたヒットラーやムッソリーニ、あるいは日本の軍部指導者の考え方のなかにも、こうした傾向が一

部あったことは否定できないと思います。つまりそういう人たちは、自分の考えを絶対に正しいと信じこんで、知らず知らずのうちに自己本位の勝手な考えなり、行動に陥っていることに気づかなかつた。それが自分だけでなく周囲の人々、あるいは、国全体を迷わせ、そこに多大の損失と不幸を招くことになったと思います。こうした経験は、お互いに多少はもっていると思いますが、どうすれば自分自身にとらわれないようにできるのか。その一つとして“自己観照”を自分は心掛けたいと思います。これは、いわば自分の心をいったん外に出して、その出した心で自分自身を見つめ返してみる、つまり客観的に自分で自分を観察するように心がけるといふことです。

昔から“山に入る者は山を見ず”とか言いますが、山の本当の姿は、あまり山の中に入りすぎるとわからなくなってしまう。山の中にはいろいろな草木もあれば、石ころもある。それらも山の一部ですが、しかしそれだけが山の姿ではありません。山の全体を正しく知るには、やはりいったん山から離れて、外から山を見るということもしなければならぬと思います。お互い人間の心についても、これと同じことが言えると思います。また実際に、お互いがそういったことを、ある程度はやっているのではないのでしょうか。例えば何かをになつてやっているときに、ハッと我に返るといふか、自分は何をやっていたのだろうと、冷静に思い返してみるといふようなこともあると思います。それをいつも冷静にできるように心がけたいですし、実際にやっていくわけです。もちろん自分の心を内から外へ出し、そして外から内を観照する、というように心を去来させることは、ほんとうはなかなか難しいと思います。しかしそれを心がけ、みずから訓練していくことによって、次第にできるようになると思います。かなり偉そうなこといってしまいましたが、自分ができたら……と思っていること

を書かさせて頂きましたのであしからず。

0.25 g の球を追いかけて、 ここまで生きてきた！



アイシン精機株式会社
人材・安全衛生部

高 田 学

〔プロフィール〕

たかた まなぶ (30歳)

- 1970年 埼玉県生まれ
- 1983年 大阪府の中学卒業
- 1985年 愛知県の高校入学
- 1988年 東京の大学に入学
- 1993年 アイシン精機入社

全国を転々として現在に至る

〈家族〉 妻、長男（2歳）次男（1歳）

〈趣味〉 ゴルフ・ショッピング（見るだけ）

●はじめに

小さい頃私は、塾や習い事（英語、数学、習字、水泳、野球）など多くの事を親に強制されしづぶ通っておりましたが、ひとつも長続きすることはありませんでした。ちょうど小学五年生の夏休み
に町の卓球場に遊びに行ったとき、この〇・二五gの球（ピンポン球）と出会い月日の流れるのは早いもので、今年で二十年目を迎え、今思えば、どんな習い事よりもつらくて大変だったけど、なぜか続いた卓球の「汗と感動の物語？」について紹介いたします。

●この球に秘められた「たまたま」

はじめたきっかけは、たまたま母親がママさん卓球教室に通っていたのがきっかけで週一〜二回通うようになり、たまたまそこにいた指導者が全日本の監督でした。それから二年たった時、市の大会に出たらたまたま優勝し、それから監督にピンポン（遊び）から競技の卓球を取り組んで見ないかといわれ、安易に「はい」と答えたのが地獄の始まりでした。

●監督の目標

この監督がはじめに自分と私に立てた目標は全国大会で優勝する事でした。この目標は、期間として二年しかなくどう考えても私は無理だと思っていました。なぜならば皆さんもご存知だと思いますが卓球界には天才少女 愛ちゃんみたいに幼稚園ぐらいから始めたものすごい上手な子が山ほどこい

す。単純に考えて六年の経験差を二年＋αで取り戻すというのですから……。それからの練習ですが、町の卓球場まで約一時間（片道）かけて通い、平日が四時間、土日は一二時間というハードな練習で、形にとらわれず「とにかくミスをしてはいけない」、ミスをするとう然のように毎回ビンタが飛んできて、口を切って血を流す、涙と鼻水が止まらない、そんな事を日常茶飯事でした。こんな練習のせいか、始めて出た全国大会で緊張もせずにベスト八まで順当に勝ち進みました。（普通なら結婚式で挨拶を頼まれてしまったぐらい緊張するのでは……）そして、ベスト四決定のとき一八対七という点数で大量リードしながら逆転負けを喫し勝負の厳しさを知りました。（卓球は二一本勝負）この瞬間、目標は目標となってしまう、やはり監督の右手が私に炸裂しました。苦しかった練習からか、中学生の私が全日本の監督に向かって「精一杯やったのだから仕方がないじゃないですか」といってしまう、残念な事にこの日を境に監督と決別してしまいました。残念ですがこの六年後に監督は死去されました。

正直言って、今考えてもあのビンタの意味はわかりません。でも、あのビンタは試合に負けた事に對するものではなかったと信じたいです。

●過去の栄光

高校進学の年となり学校の成績があまりよくなかった私は、中学の担任の先生に呼ばれこのままでは進学が……といわれ、私はスポーツの特待生で進学するといったら大笑いされました。（実は学校に卓球をしている事を内緒にしていた）その後、全国からうれしい事に八校から推薦されました。皆さんがもし高校の監督だったとして考えてみてください。どこの高校もいい選手が欲しくて必死なの

に、始めて出て全国大会ベスト八の無名選手がほしいと思いませんか？　もう、お分かりですね（この影に全日本の監督の偉大さが伺えます。）

こんな裏事情に助けられ愛知県の某卓球の有名な高校に入学し、毎日、朝から晩まで練習に励んでいました。そんなある日、大阪の某高校の監督に私が教えてもらった監督が就任し私の高校とライバルとなりました。その高校の選手に私の知り合いがいたのでいろいろ話を聞くと「高田（私）に負けたら……」「打倒高田」とよく練習で選手に言っていたようですし、事実試合会場でも直接監督に脅かされたことも、いやみをいわれた事もあります。しかし、私も負けん気が強いのかそれをばねに、あの監督には絶対負けない、あの高校の選手には絶対負けない、そんな事を考えながら練習した結果、インターハイ団体優勝、ダブルス優勝、シングルス二位の栄光に輝く事ができました。今思えば目標の設定がよかったと感じています。（事実、全国大会の上位はこの監督のいる高校の選手ばかりですから、その上に行くには優勝しか残されていませんでした。）

●表彰台の感想と取材

やはりうれしいです。特にダブルスで優勝したときは誰よりも先に名前をよばれ、一段高いひな壇に上がり報道関係の方がすいませんこちらを向いてください。カメラがパシャ／＼パシャ／＼と最高です。特に感じたのがテレビのインタビューでありきたりの答えをしている選手がいますが、事実わたしもこんな風に答えました。

Q　今の感想は……うれしいです。

Q どうして優勝できたと思いますか。……良いパートナーに恵まれました。

Q どこで優勝できると思いましたか。……いえ最後までとても苦しかったです。

どうですこの模範的な回答、私はたまたま優勝する事ができたので考えていませんでしたがこれから本当に優勝を目指している選手はこれも練習しておく必要がありますね。

● 楽しかった大学時代、結果はおのずと……

高校時代の実績がかわれ某東京の卓球の強い大学に特待生で進学した私に待っていたのは、都会の誘惑でした。小さい頃からしばらく生活してきたせいか、大学では、「自由にやってください」そんな印象を受けました。そんな波に思う存分のまれてしまった私は、大学のリーグ戦で一勝九敗（一年の時の成績でそれ以後補欠）で次第にこんな風にみんなに言われるようになってきました。「昔はめちゃめちゃ強かったのに…、あの頃はすごかった、」全部過去形です。スポーツの世界にこんな選手結構いますよ。

● ひろう神あり

バブルがはじけて社会全体が苦しい状況で、卓球では会社に入る事はできないし、こんなに落ちぶれた自分を取ってくれるところはないだろうと思っておりましたが、自分の全盛期を過ごした愛知県に「是非、わが社に来てくれないか」そんな物好きな会社が私が勤めている今の会社です。多分、過去のイメージが良すぎて推薦してくれたのでしょう。間違いないと思います。こんなことで入社でき

ましたが、勝てない私は、やはり仕事が忙しい、環境が良くないなどと言いつてをし、勝てない自分と現実から逃げていました。

●平成十一年に卓球部がなくなる

残念な事に会社から廃部を通告された。なんとなく卓球を続けて来た私でも無くなるとなると最後まで頑張りつてみようかなと思って平成十年に日本リーグに臨んだ。結果からいうと八試合で七勝一負で最優秀選手賞を授賞。こんな賞をもらうのは久しぶりで正直うれしかった。試合が終わってから、何が変わったのか自分なりに分析してみた。結構単純なものだった。まず、単純に勝ちたいという気持ちが高めたら、自分のやらなければ成らないというもの（弱点）が見えてきて、それを練習する事によりおのずと自信が戻ってきた。

次に、これまで一番かけていた相手の事を考えてみた。（次の三点）

- ① 時間に関する事……………同じ社会人だからそんなに練習しているわけがない。
 - ② 相手の調子と弱点……………自分の調子が悪くても相手のほうがもっと悪いかも知れない。
 - ③ 相手の気持ち……………自分が苦しい（逃げたい）時は相手も苦しい。
- こんなことを考えて試合に臨みました。

お分かりのようにほとんどのものがメンタル（心）に関するものです。このメンタルの部分を私は、自分の勝手（自分のいいように）すべてプラス思考した結果、試合に勝つ事ができましたが、真の勝因はこれだと思います。相手は多分、一番考えてはならないことを考えたと思います。それが、この

言葉「昔はめっちゃめっちゃ強かった」。

これを、考えた事により私の何でもないプレーをすごいと感じ、逆に相手は無理をしなくていいプレーを無理してミスしたり、こんな原因を生んだのだと思います。

●私が考える卓球がうまくなる条件？（これであなたも優勝）

- ① いいコーチとの出会い（熱意のある指導者）
- ② 二四時間頭のどこかでそのスポーツの事を考えている
- ③ 人の見ていないところで努力している（人の三倍努力）
- ④ 自分の気持ちに素直（自分にうそはつかない）
- ⑤ 自分の気持ちを押さえられる（顔に出さない）
- ⑥ 自己中心的（B型？ いい意味で）
- ⑦ 胃が丈夫（好き嫌いがなく、海外でも平気）etc.

●終わりに

以上のように二〇年間いろいろありましたが、最後にいい結果が残せスッとなりましたので平成十一年に引退しました。これまで、卓球をやってきましたが自分自身、本当は卓球をやっている事が一番のコンプレックスでした。それは、暗い、ダサい、そんなイメージがあるからです。（いつも、テニスかバトミントンだったらよかったと感じます。）しかし、卓球をやっていて初めてよかったと感じた

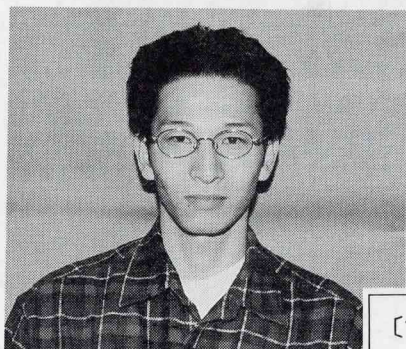
事がありました。それは、結婚させてくださいと嫁さんの実家にあいさつに行ったとき、自己PRする事がなく困ったときに、卓球のインターハイで優勝した事があると言ったら、スポーツ選手なら……と了解をもらったとき、ほんとううれしかったです。今までの自分の人生、卓球にささえられてきました。

最後になりますが、私も年をとったせいか、よくいろんな方から自分の息子には卓球をやらせるのと聞かれますが、正直言って強制するのは嫌です。だって私がそうだったからです。でも、もし息子がやりたいといったら大歓迎ですし、強くする自身もあります。（この原稿にヒントがいっぱい隠されているから）。そのときは、息子にこう言われたいです。

僕のおとうさんは、「昔はめっちゃめっちゃ強かった（笑）……………」

以上

最近、思うこと



日本特殊陶業株 本社製造部管理課

滝 野 仁

〔プロフィール〕

たきの ひとし (29歳)

- 1971年 愛知県名古屋市出身
- 1990年 日本特殊陶業株式会社 入社
本社製造部管理課 配属
現在に至る

〈家族〉 妻

〈趣味〉 サッカー、ドライブ

〈はじめに〉

もうそろそろ書かなければと思いつつ、納期ぎりぎりにならないとなかなか書き出すことが出来なかった自分に喝。又、事務局の皆様にも多大なご迷惑をお掛けしたことに對しまして深くお詫び申し上げます。

最近、自分が氣になって思っていることを書かせて頂きました。

1 世の中の事

私が子供のころは、外で野球やサッカーなどをして泥まみれになりながら遊ぶ事が多かったが、現在の子供たちは家の中でテレビを観たり、テレビゲーム、あるいはパソコンでインターネットなどをして一人で遊ぶ事が多いようである。外で遊ぶ子供たちを見れば、深夜路上やコンビニの前で座り込んでたむろする状態。十数年前にはこの様な光景は無かったと思います。少子化や競争社会、それらのもたらすいくつもの掛け持ちの塾通いによって、子供同士の遊びは少なくなり、遊びを通じた人間関係・心のふれあいを経験しないまま、自立ができず大人になってしまっている。

この所、学級崩壊がたまにニュース等で取り上げられていることがある。学級崩壊は、児童の立ち歩きや私語などで授業が成り立たなくなる現象で、落ち着きの無い子（私もそうであった）は以前からいたが、特に、注意欠陥多動症候群（不注意・すぐに気が散る・衝動性・教室内で席に座っていない・手足を忙しく動かし他人の邪魔をする）の子供が立ち歩き始めた時、教師がこれを制止しな

ければ、他の子供たちもつられて同じ行動をしてしまう。

体罰反対・管理教育反対という事で教師の手が縛られ、教育の場で甘やかすと個性尊重の放任的子育てが蔓延するようになった。一方家庭内では、父親は、“しつけと教育は母親と行い、仕事と家庭は両立させる”という理想像は有るものの母親任せの育児になり、又母親は、過保護になりすぎであったり、育児ノイローゼの為、育児放棄をしてしまい、お互いの気持ちにゆとりが無い為に幼児期からの基本的しつけが出来ていない状態である。

更に保育園、幼稚園では自由保育と呼ばれる“しつけをしない教育”が流行っているらしい。その為か、ちょっとした事で“いじめ”にあったと受け取り、不登校になり、家庭内暴力が起こっている。最近では、閉じ込めりが深刻視され、学校に行けず、自分の部屋に閉じこもったまま、親とも接せず、ようやく治療の場に出てきた時は、三十歳を超えている事も珍しくない。(男性が多い)

このような“しつけ”が、すぐキレる・残虐な通り魔殺人・オヤジ狩り・引ったくりを行う子供を造りだしている。昔のような、悪い事をしたらゲンコツを落とす様な厳格な父親は減り、子供中心に物事を考え、子供の要求に直ちに応じる友達みたいな優しい父親が、私の周りにも増えてきている。家族の経済的基盤を支え、子供の社会化を支援するのが父親の役割とされてきたが、家族のあり方が多様化してきた現在、家庭内の父親の精神的不在は、子離れ・親離れ出来ない母子癒着や育児ノイローゼ、又は、いじめ・家庭内暴力といった問題行動を発生させる要因になると思います。また、女性の就業の多い現在、父親の積極的な育児参加が必要なのかもしれません。まだ、私には子供はいませんが、生まれてくる子供たちの為にも、家族の絆を大切にし、何か出来る事があれば積極的に行動

したいと思っています。

2 会社の事

(1) 自分の職場について

入社して配属された職場が現在勤務している、自動車用スパークプラグを生産する工場の製造管理部門である。そこでは主に、生産工程の生産計画の立案と生産進捗管理を担当しております。自動車のスパークプラグも顧客の要求により、エンジン型式にあわせて、一品一仕様化になってきている為、生産・管理しなければならぬ品点数がものすごく多くなってきました。

生産管理者として生産する製品や部品の内容を熟知していなければなりません、さらにそれらを製造する工程の細かな知識も重要になってきます。そのベースの上で生産計画立案や部品の手配、生産進捗管理の技術が必要になってきます。特に最近の生産管理では、コンピュータの利用が不可欠になってきています。

このようにして、日々仕事をこなしている訳ですが、質・量ともに高度化する一方で、昔は一人前になるには五、六年くらいかかるといわれてきた現在の業務も、今日ではもっと時間がかかるようになってきておりこの先、あと何年働けることが出来るかわかりませんが、時代の流れについて行けるか考えたりします。

(2) 顧客の満足について

一九八〇年代初め迄は、メーカー主導の時代と呼ばれ、この時代の考えは、"品質の良い品物を安

く期日通りに供給しさえすれば、ユーザーに納得して買ってもらえる”ということでした。しかし、家庭や市場にモノがあふれるようになった現在では、“安くて品質が良い”というだけでは不十分になってしまい、モノがあり余っているわけですから、製品によほどの魅力がないと、購買意欲をそそる事が出来ません。つまり、市場（顧客）からの声に耳を傾け、その要求に合わせて生産することが重要になってきております。

自社の事業部品質方針も“お客様第一の精神を基に、品質システムの充実をはかる”になっています。私の職場でもQ・C・Dの話をしたりする事があります。Qはクオリティー（品質）・Cはコスト（原価）・Dはデリバリー（納期）の事です。Qについては、顧客ニーズに基づいて、企画・設定された品質をいかにロスなく生産するかが目的で、Cについては、競合する製品の機能や品質が同じであれば、ユーザーは当然のことながら、安い方を買うので、市場で競争をする限り、製品の価格は決められない為、価格を上げるよりはコストを下げ、利益を出す試みをしています。そのため、原料の仕入れ価格・工場内のエネルギーの節約・人材派遣の採用等、多岐にわたる活動が必要になっていますが、コストダウンのやり過ぎで、製品の性能や品質の悪化・人材派遣に頼りすぎた事による、正社員の作業レベル低下が起こってしまつては、まったく意味が無くなつてしまうので、顧客と自社の両方に利益をもたらす、合理的なコストダウンを実行するのが目的になってきています。Dは、顧客納期を正確に守る事と製造リードタイムの短縮（C/D：サイクルタイムリダクション）の実現です。最近の企業間競争はますます、激しくなつてきているので、勝敗の決め手はビジネススピードだと言われています。多くの企業がコンピューターによって、経営のデジタル化を急

いでいるのは、それによって、意思決定や情報処理の速度を高めようとしているからです。しかし情報処理だけ早くしても、顧客の所に品物が届かなければ、意味がなくなってしまうので、納期を守れるよう生産立案・管理する事は、生産管理課のメンバーとして責任重大だと思っています。

3 体力の限界の事

内容はがらりと変わりますが、つい最近の自分の出来事について話をします。健康には、結構自信があった私も、二ヶ月ほど前に“ぎっくり腰”という病氣？に初めてなってしまった。生まれて此の方、こんなに痛くて、苦しい目にあった事は無い。もう二度と会いたくない病氣である。カゼを引いたり、体調が悪くても、少々の事では会社を休む事など無かった私ですが、朝、布団から出ようとしても腰が上がらない状態で、氣力と根性で何回も立ち上がろうとチャレンジしたが、どうにもならない。まさか!! この症状は、会社のおじさんたちから聞いたことのある、あの“ぎっくり腰”というやつか。冗談じゃないよ。もう、立てなくなるかと思ったくらい心底参りました。あれから二ヶ月、整体・つぼ押し・足圧（足の裏で全身を踏んづける）と、色々と自分の身体に合った治療法を試して、ある意味で、つぼ押しの不思議な力や整体での骨ならし等、何でもあり?の産政塾でも体験することが出来ない、自分にとって良い経験になったような気がします。

よくよく考えてみれば、自分の体力は、二十五歳をピークに急降下したように思います。その頃カゼをひいて熱なんか小学生以来出たことが無かった自分が、今でも良く覚えている三八・九度まで上がった。それ以来、持久力の衰退・一日空いた筋肉痛・椅子に座る時に“どっこいしょ”と声を出し

てしまう等々、限界の兆しが見え始めたことを思い出します。

スポーツは何もやっていないわけではなかったが、入社当時から行っている、名古屋市の社会人サッカーリーグ戦もレギュラーから若い世代に譲り、現在は、刈谷市で定期的に行われる、年齢層の高いリーグで趣味と健康の為にがんばってやっています。(私たちのチームの中には、四十四歳の人もいます)

これとは別で、ぎっくり腰の予防と体力の回復を行う為に、妻と一緒にウォーキングをはじめました。私の近所では、結構たくさんの方々の幅広い年代の方々(若い女性から老夫婦まで)が、歩いています。まだ、はじめたばかりで、逆に疲れてしまうこともありますが、四〇分くらい掛けて、近所を散策しながら早足で歩いています。

自分も二〇〇一年には、三十歳になります。体が資本。健康で丈夫な体であってこそだと、つくづく思う様になりましたので、気力・体力共に、充実した形で、新しい年を迎えることが出来れば幸いです。(文章の内容が、年寄り臭くなってしまうました。)

4 産政塾へ参加して

産政塾では、色々な方面でご活躍されている塾生の皆さんや講師の方々と交流する事ができ、本当に良かったと思う。経験にかなう説得性はないと感じた。回を増すに連れ、会社の中では知る事の出ない様々な体験や塾生との討論やちょっとした会話の中で、自分には無い“考え方”や“思い”を知る事が出来て、毎回とても新鮮で、自分の物事に対する視野が広がった様思う。

この事は、今回“殻の外へ踏み出そう”で参加した産政塾のテーマにつながる事で、その殻とは、自分の思想や生き方で有ると思います。それは、多くの色々な経験を持った素晴らしい人たちと、交流する事で『殻の外へ踏み出し、自分と向き合い、足りないものを吸収して、自分の殻を大きく広げよう』と言う意味で理解しました。自分には、理想像（人と人との交流が深い人）があって、それは自分に敵しく、周りの人には思いやりのある人であったりします。そういう人の周りには、人が集まったり、同じ価値観を持った人たちが集まってきます。こうした人たちは、自分を持っていて輝いて見えます。自分もそうした人たちのようになれる様、人と人との交流を大切し、努力して行きたいと思っています。

〈最後 に〉

纏まりの無い文章になってしまい、申し訳なく思っている。だが、こうして今思っていることを文章に書いてみて、頭の中で多少ではあるが、何かが整理されたように思う。本当は家族（両親・妻）の事も書いてみたかったが、恥ずかしいので止めておく。それはさておき、講師の先生方・丹羽様はじめ、塾生の皆様には大変感謝致しております。産政塾運営方針の（犯罪以外なら何でもあり？）の精神で、何事にも積極的にチャレンジして行きたいと思えます。

一年間お世話になった方々へ
本当に有り難うございました。

以 上

多様な価値観について



中部電力労働組合

武田 和 則

〔プロフィール〕

ただ たけだ かずのり（33歳）

- 1967年 2月 長野県長野市生まれ
- 1990年 4月 中部電力株式会社入社
（港営業所、津営業所、岐阜支店、名古屋支店）
- 1997年 5月 中部電力労働組合本部執行委員
（専従）

現在に至る

〈家族〉 妻、長女（0歳）

〈趣味〉 パチンコ、麻雀、お酒、愛娘

1 はじめに

「殻の外へ踏み出そう」のテーマで始まった産政塾もあつという間に半年の活動を終えたが、毎回、出張という名の下に白銀の白馬をはじめ様々な場所に連れ出され、意見交換（宴会）といった楽しい活動をさせていただいたことに對して先ず事務局に感謝申し上げます。

活動においては、通常では出会うことのない様々な仕事・生活をされている講師の先生、他産業から参加している塾生の方々との対話を通じて、世の中にはいろいろな生き方、考え方、そして幸せがあるということを感じた活動であつたし、良い経験ができたのではないかと思う。

一方、私自身としては、産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出す」までには至らなかったのではないかと反省する反面、そうは言っても自分の「殻」は自分が自分自身であるために三十数年もかけて大切に少しずつ築き上げてきたものであり、そう簡単に殻を破ることはできないのであるが、産政塾に参加することによってこれまで知らなかった価値観、考え方に触れ、若干、自分の殻（人間としての器：若干大袈裟かも）を大きくする（判断基準の選択肢の幅を広くする）きっかけにはなったのではないかと思う。

2 産政塾の活動を振り返って

生きがい・働きたいとは何か。

産政塾の開校式で先ず問われたことだが、若干戸惑ってしまった。と言うのも結婚する以前の私は、

これといった目標もなく漠然とした将来のために一生懸命働くこと以外には何も考えていなかったため、あまり触れたくない話題であり考えようとしなかった。

三十路過ぎまで独身生活を謳歌してきた私は、必然的に生活は乱れ、食生活も偏っていた（カップラーメン中心）が、当時、現代の男性の精子が減少しており、その原因が環境ホルモンにあるという報道がされた時には、さすがに自分は子供ができないのではないかと恐怖感すら感じていた。そういう意味では今は幸せであり、娘が幸せに成長できるように頑張って働かなければならないと思う。

したがって、今は家族、とりわけ娘の存在そのものが生きがいと言えることを嬉しく思う。

活動の中で暁学園の祖父江文宏氏を訪ね、幼児虐待の現状について伺うことができたが、私はドラマやニュース以外に幼児虐待が現実の数多く存在しているとは考えていなかったため大きな衝撃を受けた。確かに子供の世話は大変であり（ほとんど妻が世話をしているが、私も家にいる時にはできる限りしているつもり）、子供が言うことを聞かないと（まだ言うことがわかるはずがない）、血管が切れそうになることもあるが、やはり自分の子供は世界一かわいい（親ばかか）と思う。

俗に言う「目の中に入れても痛くない」という言葉や、子を持つ親の気持ちというものがやっとなるようになったが、虐待にまでおよぶ親の気持ちは分かり得ぬものがあるし、なりたくないものである。

3 労働組合の専従役員となつて

現在、私は労働組合の専従役員をしている。

それまでは中部電力という会社に入り、会社における常識（世間においては非常識なのかもしれないが、常識と思っていた）と、ごく僅かな職場における価値観（価値観が違っても問題ない）の中で、自分にとっては当たり前の世界で精一杯仕事してきたつもりであった。また、そういう状況においては「労働運動」には特に関心を持つことはなかったのも事実である。

幸か不幸か労働組合の専従となったが、だからこそ産政塾に参加する機会も得られ、組合という繋がりの中で職場にいる時とは到底考えられない他部門や他産業に働く方々との出会い、組合の仕事をすればこそ組合員の多様な価値観に触れることができる。

しかしながら、このような価値観の中には自分の価値観との違いから若干理解しがたいものもあり、仕事上、大きなプレッシャーになることもあるが、相手の考え方を聞き、議論をし、理解することによって、新たな自分の価値観へと変化していくものも多い。

労働組合の仕事に携わらなければ、それはそれで過ぎていくわけであり、どうってことのないものなのかもしれないが、会社の仕事では得られえない「人間らしさ」というものが労働組合の仕事には感じられるのではないかと思う。

4 多様化する価値観へ

経済の成熟化、生活水準の高まり、国際化や情報化の進展を背景として、ライフスタイルについての価値観や生活ニーズが多様化している中、労働組合はこの多様化した価値観にどう対応していけば良いのか考えてみたい。

本来、労働組合は雇用や賃金など基本的労働条件の向上を目指して労働者の必要性のもと結成したものであるが、戦後の高度成長下で労働組合としては良質な労働力を社会に提供し、生産性向上運動のもと国民全体が物質的な豊かさが得られるようになったことは、労働組合が社会に果たした役割は非常に大きく、かつ全ての組合員のニーズに応えたものであった。

しかしながら、日本経済が低成長時代に入り、各企業は国際的な競争時代の中で生き残りをかけて合理化や効率化の取り組みを行っており、また、少子高齢化の一層の進展に伴い厚生年金をはじめ社会保障制度について将来への不安が強まる中、春闘では過去のような労働条件の向上が難しい状況にある。一方で、今後も生活における多様化は一層進んでいくものと予想されるが、全ての組合員の価値観を満足させる活動というものが非常に難しい時代になったのではないか。

時代の流れが個人の自由な選択を重視する自己責任社会に向かいつつある中で、労働組合の存在そのものが問われようとしているが、労働組合の本質が相互扶助の精神に基づく集団としての組織の団結であり、先に述べたようにこれまで時代が大きく変わる過程において労働組合の果たしてきた成果を鑑みれば、今後もいかなる時代になろうとも労働組合としての果たすべき役割はあるはずであり、その時代にあった活動を求めていかなければならない。

ただし、そこには常に組合員の意思が反映されたものでなくてはならず、組合員の理解と納得がなければならぬ。このことは過去から不変のものであると考えるが、現在の組合員のニーズを生活水準の向上という形で応えることが難しい時代背景だからこそ、ますます重要なものであると思う。

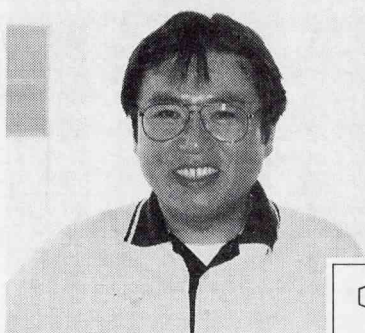
したがって、絶えず組合員の意見を吸収し、その意見を大事にし、論議を重ね、より良い方向性を

見出していくこと、組合員の参加と理解が得られる活動を行っていくことが大切であり、そのために私としては、より多くの価値観に触れ、より幅の広い視野を持ちつつ、より良い選択肢を組合員に提供していくことを心掛けていかなければならないと考える。

5 おわりに

最後に、第十一期産政塾に参加された同期の皆様、ならびに取り留めのない話に最後までにつきあっていたいただいた読者の皆様に感謝申し上げます、第十一期産政塾の最終レポートとさせていただきます。

「ホールドアップ」



トヨタ自動車労働組合

鶴岡 光行

〔プロフィール〕

つるおか みつゆき（38歳）

- 1961年 千葉県生まれ
- 1980年 トヨタ自動車株式会社
高岡工場 組立部 第1組立課配属
- 1999年 労働組合専従
現在に至る

〈家族〉 妻、長女（高1）、長男（中2）、
二女（小6）

〈趣味〉 旅行、キャンプ等

1 思わず「ホールドアップ」

九七年秋、上司から海外支援の通達を受けました。予てから希望していた海外支援、やっこの思いでつかんだチャンス、精一杯頑張ろうと、心に誓いました。

それから、約三ヶ月、すでに二年前より立ちあがっているプロジェクトに合流し、生産準備や渡航準備を進めました。プロジェクトメンバーは、ほとんどが海外支援の経験者で、初めて支援に行くのは私ぐらいでした。問題は、英会話、私の英語レベルは中学校一年程度、先輩からは

「仕事の合間に、単語を少しでも多く覚えておいたほうがいいぞ。」

とのアドバイスもあり、やらなければいけないあとを思いつつも、

「明日から頑張ろう、職場では通訳さんもいるのでナントカなるぞ。」

そうしているうちに年が明け、九八年一月カナダのケンブリッジ市にある「MMC」へ出張。飛行機には乗ったものの、英会話の不安はつのるばかりでしたが、「でも、いざとなればプロジェクトメンバーの中には、英会話が達者な技術員もいるので助けてもらおう」と、半分開き直っていました。

カナダのトロント空港に到着し入国審査では、作戦どおり、英会話が達者な技術員の後ろに付き、「SAME (同じ) SAME」の繰り返しで問題なく通過し、就労ビザの申請でも、技術員の後ろに付き順番待ちをしていると、

「Next Please」

申請カウンターの横から口ひげを蓄えた白人の男性が私の方を指差して、再度、

「Next Please」

私は、「どうなるんだらう、約束と違うヨ」と心の中で叫びながら、白人の男性に案内され、奥の小部屋に連れて行かれました。

心臓が口から飛び出そうとは、まさしくこの事、不安が絶頂期を迎えました。

案内された小部屋は、中央に机が有り、数席の椅子が用意されており

「ABCDEFG????」

白人の男性が話し掛けてくるのですが、気が動転しているのでさっぱり分からずボーッとしていると、今度は身振りを交えて再度話し掛けてきました。

「どうも、椅子に座れと言っているようだ。」

私は、身振りから解釈し三人掛け椅子の端に座ると、

「No. / No. / ABCDEFG????」

もうだめだ、私は思わず立ち上がり両手を天高く上げホールドアップしました。そんな姿を見た白人の男性は、

「OK OK Please relax」

と言いながら白人の男性は、ホールドアップしている私の両手をやさしく下に降ろし、椅子の中央まで連れて行き、やさしく座らせたのです。

「このおじさん悪い人でないみたい。」

そう思った瞬間、心臓は高鳴っていれど、やっと我に返り、なんとなく言葉の理解もでき、真冬の

カナダで大汗をかきながら、就労ビザを取得したのでした。

こうして初めての海外出張はトラブルで始まり、他にも言葉でのトラブルがあるたびに、「帰国したら英会話教室に通おう」と、強く心に誓うのでした。

2 自己満足の世界

初めての海外生活も、あっという間に一ヶ月が過ぎ、めでたく帰国、次の出張まで約一ヶ月間「帰国したら英会話教室に通うぞ。」の意気込みも、帰国した安堵感や日本国内での（言葉の弊害が無い）生活で、どこかに飛んでいってしまった。確かに、苦い経験から、「何かの対策を打たなければいけないあ」との思いと、「簡単に、安く上げる方法はないかなあ」の思いで、本屋に行き旅行ガイドブックを買い込み、気休めの為に入国審査の英会話を勉強しました。

あるTV番組の中で、「経済観念のある人、無い人は、日頃の買い物で分かる。経済観念のある人は、洗剤一つでも無くなる前に特売品を購入し備えているが、経済観念の無い人は、無くなって初めて購入している。」と、言っていた。確かに、定期的に消化している物は、あらかじめ特売品を購入し備えていれば、安価で済む。しかし、今回のように、常時使う英語を勉強する方法として、英会話教室に通うか、旅行ガイドブックで勉強するかを選択において、旅行ガイドブックを選んだことは、その時点では事前に準備する経済観念のある安価な投資、また、失敗に対する適切な改善として、自身として満足していた。

その後、二回目の出張では、入国審査でのトラブルはなく入国したが、日常業務の中では、現地の

メンバーと少しでも多くのコミュニケーションを図りたいという思いと、自分の勉強のためにできるだけ通訳さんは頼まないぞ、との思いから、相変わらず挨拶程度の英会話だけで、身振り、手振り、ノートで絵を描いて説明すると言った悪戦苦闘の中で日々の仕事を乗り切っていました。

そんなある日、現地のエンジニアと仕事の調整ができず、身振り、手振りでも、絵を描いても分かってもらえず、相手は、

「No No…」

と、訳の分からぬ英語が続き、通訳さんと呼ぶまもなく、ノートを地面に叩き付け、日本語で怒鳴ってしまいました。

「しまった！」

と、思っても後の祭り。コミュニケーションを大事にしなければならないのに、まずい雰囲気を作ってしまったのは言うまでもありません。

結局今回の英会話の勉強は経済観念のある投資では無く、ほんの一部分だけにしぼった投資であり、まったくの無駄ではなかったものの、自己満足に過ぎなかった。

3 発生後の対策か、予測予防の投資か。

今回、産政塾に参加し、とても貴重な経験をさせて頂きました。中でも、第二回会合で東海市の養護施設「暁学園」をお訪ねし、祖父江園長の講話で、

「発生してから対策するのか、予防を考えて行動するかを考えると、二十年間では、予測して予防

対策をする方が安い。」

との話を聞き、改めて、予防の大切さを感じた。自分の英会話の未熟さを、今更補おうとすると、大変な予算も労力も必要とする、自分が海外支援を希望するのであれば、可能な限りの投資（英会話の勉強）をした方が、トラブルも最小限におさえれたと思う。

現在、自分の周りを見回せば、発生後の対策に力を注ぐ場面が多く見当たる。自分の目では、まだまだ、二十年後を見据えての、予測予防の投資は難しいと思うが、最大限の努力をしていきたい。そのためには、自分自身の知識も磨かなければならないし、今回の、産政塾のテーマ「殻の外へ踏み出そう」を心に書き留めて置かなければならないと思う。最低限、発生後の対策にしろ、予測予防の投資にしろ、旅行ガイドブックといったような、その場限りの自己満足の投資は避けていきたい。また、妥協しない強い信念を身に付けていきたい。

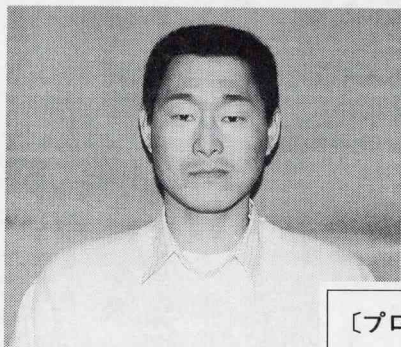
4 追 伸

自分の苦い経験から、子供たちに対し、これからの世の中には、英会話が大切だと思い、五年、十後を見据えて久しぶりに親らしい発言をした。

「しっかりと英語だけは勉強しろよ。そのためには留学しても良いぞ。」

子供たちからの反応は、今一步であった。しかし、少しづつでも明日への投資に走りはじめました。産政塾十一期生の皆さん、短い間でしたがどうもありがとうございました。今後よろしく願っています。

これぞ私の生きる道



アラコ株式会社 試作部

中 村 英 行

〔プロフィール〕

なかむら ひでゆき (32歳)

- 1967年 愛知県豊田市生まれ
- 1986年 荒川車体工業㈱入社
(現アラコ㈱) 試作部所属
現在に至る

〈家族〉 妻、父、母

〈趣味〉 バイクいじり、ボウリング

【活発な意見】

討論会のテーマである「変わる日本人、変わらぬ日本人。」の講演を今回の講師であり、我ら第十一期産政塾塾生でもある、常兆さんが講演を終えた後、事務局の丹羽さんより「それでは今の講演を聞いて何か反論、共感する事があれば、活発な意見の交換をお願いします。」と言われました。当然というか、そりゃそうでしょうというか、場内は「シーン」。いきなり全然知らない中で「はい。」という人はおらず「どなたかございませんか。どんな些細な事でもかまいません。」と静まりかえった場内に響きわたりました。とりあえず、どんな事でもいいから、口火を切れば必ず続いて意見をだしてくれると思ひ、「お風呂の入り方」という、とんでもない事を言い出してしまいました。そのような内容でも、ポツリ、ポツリと続いて意見を出してもらえた。誰しも意見を持っているはずなのに、初対面の者同志、しかも大勢の前だと緊張してしまい、とんでもない事を口走ってしまった。今思い出しても恥ずかしい。それが始まりでした。

【生活の安定】

生活の安定の為に生きる私達と、自分の夢に向かって生きている彼らとの考え方の違い、価値観の違いを講演会、討論会で学び何かを感じ取ってほしい。そんな言葉を産政塾で耳にしました。

そのような区分けをした事がなかったし、自分が生活の安定の為に会社勤めをしているという意識がなかった上、その言葉自体を聞くと、イメージとして前者は悪い、後者は良い。というように聞こ

えてしまい、大変なショックを覚えました。

【講 師】

名匠と呼ばれる方々の仕事を実演会や展示会、発表会で見させて頂く事はあっても、その人と対話し、生き方や考え方を討論しあう事など今までなかったので、職人や先生という人達は、寺内貫太郎一家の寺内貫太郎のような、頑固一徹の人ばかりと思っていたと、意外や意外、実は物腰が柔らかく、非常に繊細な感覚の持ち主が多く驚かされました。そのような数々の講師達には、自分の夢を追って生きてもらいました。

—その陰で家族が犠牲になり—

生活の安定の為に生きる私達は、大袈裟に言えば自分を犠牲にし、家族の為に生きてきました。自分のやりたい夢があるから家族に苦勞をかけるのか。家族に苦勞をかけたくないから自分のやりたい夢をあきらめるのか。

産政塾の講師達は圧倒的に夢をもち、その夢を追って生きている人達です。講師のお話を聞いている時は、講師の考えや生き方に感情移入し、『やはり人間は夢を追いかけて生きていかなければならない』と思うのだが、果たしてその背景を知り得た上でも、『夢に向かって生きている素晴らしい人達だといえるのであろうか。』

『自己満足の為に誰かを犠牲にして夢を追っていく事が、そんなに大事な事なのであろうか。』と帰りの電車の中で考えていました。『その時にこれが殻を破りきれない自分なのか。』と思っていました。

又、講師の方々の中には、二足のわらじを履いている方がみえました。あのような御多忙の中、全てに全力をこめる事が出来るのでしょうか。お話を聞いていて片方はうまくいっていても、もう片方は必ずしもうまくいっているとは思えませんでした。やはりその道一筋でやっている人にはかなわないのでは、と私は思いました。

私は生活の安定の為に生きる道を歩いていますが、今の道をつきつめて歩いていければ、職人のような、その筋で一流と呼ばれるような熟練工になれるのではないかと、思うようになりました。もちろん日々鍛錬しなければなりません。そういった意味では、会社の規模や知名度、職種が違って、目指し進むべき所は同じだと思いました。

【殻の外へ踏み出す】

「殻の外へ踏み出そう」とのテーマで産政塾に出席してきましたが、自分の思っている事が半分も討論会には言えず、頭の中ではこう思っているのに、自分の気持ちを表現する言葉を知らずに思ってもいないような事を口走ってしまい、『なぜだ。違うんだ。僕の言いたい事はこんな事ではないのに。』と何度言い終えた後に思った事だろうか。己の未熟さに落胆しつつも、全ての講義に参加し終了してみると、何か自分に対して生活の変化を起こすとか、目に見えて成長するのではなく、自分の意識改革、変化、固定観念から踏み出すことが「殻の外へ踏み出す」事ではなかったのか。

ある問題や悩みにぶつかり考えている時、「そういうえば産政塾に参加した時、こういう意見もあったよな。こういう考えもあるんだよな。」と自分の考えている中で、対比するような考えが生まれてく

れば、産政塾に参加した意義があるのではないかと、確信しています。

【自分を信じる】

講師の方々のように、大きな夢や想いを持つ事も生きる道ですが、常日頃の生活の中でも目標や生きがい、やりがい、想いはあるはずです。

余談ですが、私には小さな想いがあります。それは戦争の悲惨さを後世に伝えたいと思っています。むろん私は戦争を知らない世代です。だからこそ、戦争を知らない私が戦争の事を知り、後世へ伝えていく役目をしなければならないと思います。昔からこう思っていたのではなく、ごく最近こう思ってきました。

私は今年広島へいきました。ここはもう日本人なら誰もが知っているところ、原爆が落とされた都市です。テレビや教科書で原爆ドームを見た事はありませんが、実物を見るのは初めてでした。ボロボロに破壊された建物でしたが、そこにあるだけでもすごく威圧感があり、暑い時期なのに背筋がぞっとするような気持ちになりました。その辺り一帯は平和公園となっており、その中の建物、平和記念館で戦争が引き起こす悲しさを訴えていました。

しょう集令状がきた青年と家族。特政に志願した青年の家族に宛てた手紙、その手紙を受け取った母親の苦悩、死に行く息子をお国のためだと、自分を無理やり納得させてもとめどなくあふれる涙、原爆による人的被害、物的被害、後世への被害、被爆した人間が先祖にいたとわかると結婚を断る人、原爆は地上に落下して爆発するのではなく、空中で爆発させて風と熱と放射線で被害を与えるもの、

爆弾を作ったノーベル博士が戦争に使われる事の後悔の念でノーベル平和賞を設立した事、原爆の威力を確かめる為に広島市は無傷で残っていた事、『原爆を投下した事により戦争を終わらせる事が出来た。いや、原爆を投下しなくてもすでに戦争は終わる寸前だった』という議論が今でも行われている事など、数々の実話が公開されておりました。会場内では子供からお年寄りまで様々な年齢層があり、色々な国の方々がおられ、熱心にメモをとっておられました。その光景を見た時に、「この人は自分の国に帰っていった時に、家族や友人、親類に戦争の悲しさを伝えていくんだ。」と思い、その時から私も草の根的な行動でもいいから伝えていこうと思いました。

今後は沖繩にいいこうと考えています。なぜ沖繩か。それは日本では唯一地上戦が行われた所だと聞いています。それはもう凄惨を極めた、想像するに絶え難い戦いだったと。そんな沖繩に一度足を運び、戦争の悲しさを伝えていこうと思っています。

願わくば第十二期産政塾で、杉原千畝記念館へ行き、杉原さんの奥様を講師にお招きし、『戦時中の自由と現代の自由』というテーマで活発な意見の交換を行って頂きたいと願ってやみません。

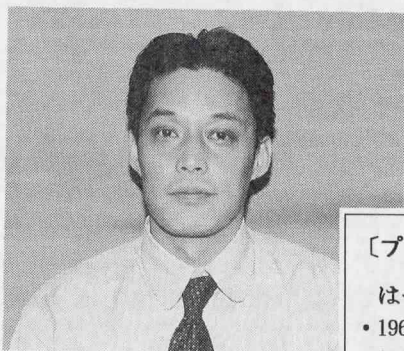
余談が長くなりましたが、産政塾に参加したことにより、今までの自分が進んできた道に、間違いはなかったと思えるようになってきました。更に産政塾で飛び出してきた様々な意見や考え方、生き方をこれからの自分の進むべき道に照らし合わせて、生きていきたいと思っています。

このような素晴らしい企画に私を送り出してくれた戦場や人事部の皆様、中部産政研の皆様、事務局の丹羽さん、各回の講師の方々、そして、第十一期産政塾塾生総勢二十五名ありがとうございました。

突如襲った、 第2の殻の外へ踏み出す未体験ゾーン

豊田合成（株）内外装部品事業部 製造部 樹脂射出 2 課

林 賢 士



〔プロフィール〕

はやし けんじ（33歳）

- 1967年 3月19日 岐阜県生まれ
- 1985年 豊田合成株式会社
樹脂射出 1 課に配属
現在に至る

〈家族〉 妻と長女（1歳8ヵ月）

〈趣味〉 海釣り…黒鯛一筋
家族と出かけること

この文集が第十一回産政塾のメンバーの手元に届く頃には、私は海の向こうのアメリカ大陸で奮闘しているだろう。

唐突なはじめ方をしてしまったが、まずは事務局の皆様とメンバーの皆さんに今回の産政塾で出会えた事といういろいろとお世話になったことに御礼申し上げます。

文頭上げましたように私二〇〇一年よりアメリカにありますが我が社の子会社に向向になりました。昨年までは国内の協力会社に向向しており、復帰をしたと思いきや、産政塾に参加させて頂き、それが終了したと思いきや今度は海外に向向と言った具合で、今回の産政塾のテーマでもあった「自分の殻を破ろう」と言う試みをあらゆる場面で頂いており喜んでいいのかどうか良く判らなくなっている状態です。しかし、そうは言っても後ろ向きに考えていては自分の性格に逆行するし、ましてや、産政塾卒業生としては前向きに考えなくては恥ずかしいし。と自分との葛藤の毎日です。

前置きはこれくらいにして、自由テーマと言うことなので海外での自分の仕事ぶり和生活振りを想像してみようと思う。まず絶対に戸惑うのが言葉の壁だと思う。恥ずかしながら英語がぺらぺら状態とは程遠い。なにを隠そう社会人になって以来ほとんどと言って良いほど英語とは無関係である。だからと言って今回の現実から逃げられるわけでもなく苦し紛れで現在は車の中でCDを聴いて少しでも耳を馴らしておこうと必死の状態である。こんな時、「もう少し学生の時に勉学に励んでおけばよかった」と思うのだがときすでに遅し。昔の人は良く言ったもので、後悔先に立たずとはまさにこのことだと痛感している。ドラエモンがこの世に存在するのなら、私の微々たるこづかいで、どら焼きを精一杯買いこんでドラエモンを手なずけてどこでもドアを出してもらいたいくらいだ。またもや愚

痴っぽくなってしまったが、とにかくナニクソ根性で頑張つて行こうと思つてゐる今日この頃です。米人にも、俺が英語を覚えるのだから君たちも日本語を覚えなさいといった具合に、スムーズにコミュニケーションが取れるようになる自分を夢見ています。

次に食生活と文化の違いに戸惑うのではないかと思つています。当然の事ながら外食しに出かけても中華や寿司や手輕に食べれるラーメンなどはほとんど無いに等しいらしく、この話を聞いた時点ですでにストレスと肥満との戦いが容赦無く訪れるのだらうと言う予測ができる。車で何時間もかけ日本食材を片言の英語で喋りながら何とか買いつけ、ワイフと子供とわいわいやりながら食卓で戦争をすることだらう。不安で一杯のはずが、自分で想像しながら書いてみると何だか楽しい生活が待つていそうになってきたが……。世の中、そんなに甘いはずがない。やばいやばい、危うくいつもの癖で樂觀的になりかけてしまった。そこがあなたの長所でもあり、短所なのよいつもワイフに言われているのに。話を戻して、次の心配は車の運転？だらう。いきなり左側通行から右側通行に変わり右折・左折の感覚が全く逆となり、想像しただけでも恐怖を感じてしまうのは私だけだろうか？ 今とはとにかく国際免許を取得して向こうの道路交通状況を早く把握して行くしかないと思つてゐるが、唯一の楽しみは広大な道をあまり渋滞等を考えず運転ができることと、向こうでしか行く事の出来ない場所へ家族と一緒に出かけることだらうか。そのような行動をすることにより、必然的に文化・生活環境へも慣れ、あらゆる面で有意義となることと自分では思つてゐます。

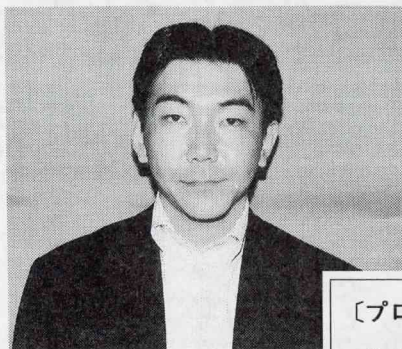
最後はやはり仕事の面での不安が大きい。現在は今までに築き上げてきたものと、言葉でのコミュニケーションによつて難関を潜り抜けてきたが、アメリカではそれが通用しないのが常である。自分

の手でやって見せ、納得させてからでないかと相手にしてもらえないらしく、とにかく一からスタート状態である。やはりここでも心配ばかりしていても始まらないので、進んで職場の環境に飛び込んで行き、前へ前への精神で頑張って行こうと考えている。そしてもう一つ大切なことは、現地の社員で全てができるようにする、即ち、本社から派遣されてくる人材の数を少しでも減らすことも大きな課題と認識して業務に当たることと必要だと考えている。なかなか困難であることは経験者から聞いているがチャレンジ精神で実行していくしかないと思っています。（偉そうなことばかり言っているが心の中は不安ばかりが本音ですが…）

支離滅裂な文章になってしまったが、これも学生時代に勉強を怠ったつけとしてあきらめるとして、とにかく本心を言えば滅茶苦茶に不安は家族も含めあるが、全員が前向きに考え仕事でも良い結果を出し、生活の面でも来てよかったと家族全員が思える様な長い人生の一部になればいいかなと考えています。

今度、日本に帰ってきて、今回の産政塾で知り合うことの出来た皆さんとお会いする機会があれば、心身ともにビックになった私を見て頂きたいと思うと共に、そうなって帰ってこれる様にがんばってきたいと思っています。最後になりましたが第十一期産政塾生の皆様の益々のご活躍をお祈りして締めとさせていただきます。

あら！ ヨット？



中部電力株式会社
営業部大口営業グループ

三 谷 建 介

〔プロフィール〕

みたに けんすけ (30歳)

- 1970年12月 三重県四日市市生まれ
- 1993年 4 月 中部電力株式会社入社
岐阜支店高山営業所配属
- 1995年 8 月 名古屋支店中営業所配属
- 1997年 2 月 本店営業部配属
現在に至る

〈家族〉 妻のみ

〈趣味〉 ヨット

1 言い出しにくい私の趣味

私の趣味は「ヨット」です。学生時代からもうかれこれ十二年もヨットに乗っているのです、これはもう趣味と呼んでも差し支えないでしょう。

しかし、「趣味は何ですか?」とか「何かスポーツしてますか?」と聞かれると、素直に「ヨット」と答えられないのです。その理由は、考えるに二つあります。

一つは「ヨット」そのものが正しく理解されないであろうという勝手な思い込みです。「ヨット」と言うと、よく「あーっ、みんなで漕ぐやつね」(そりゃボートだ)とか「立って棒を持ってやるやつ?」(それはウインドサーフィンって言うの、)などの反応が返ってきます。そのたびに船に帆(セール)が立ってて、舵を動かして……などといちいち説明しなければならず、面倒なのです。

もう一つは、「ヨット」という言葉の持つ響きが、ヨットを知らない人に、ほぼ間違いなく誤った認識を与えるということです。「ヨットやってるなんて、もしかしてお金持ち?」とか、「あら、素敵!」(こういう誤解は大歓迎なのですが……もちろん女性からに限って。)とか「けっ、スカしてんじゃねーよ。」(少々、被害妄想的?)とか思われちゃうんじゃないかと考えると、サラッと「ヨットやってます。」と言えないのです。

さらに「スポーツしてますか?」の問いに対して、「ヨットってスポーツか?」と思われそうので、つい言いそびれてしまうのです。

2 ヨットとは？

そこで、「ヨット」とは何か、どのようなスポーツなのかについて、しばしお話ししたいと思います。まず、ヨットとは、さまざまな艇種（大きさや形）によって乗る人数の違いはあるものの、共通しているのは、風を動力源として、艇に立てられたマストに展開する帆（セール）の推進力を利用して走る船のことを言います。飛行機が空を飛ぶのも、翼を流れる風によって揚力が発生するからであり、ヨットでは翼がセールに置き換わったものだと考えてください。

次に、「ヨットはスポーツか。」ということについてですが、ヨット（正確にはヨット競技）は正真正銘のスポーツです。おそらく今回のシドニーオリンピックで最も報道されなかった競技の一つだと思いますが、れっきとしたオリンピック競技であります。

また、最近ではヨットレースの最高峰「アメリカズカップ」がメディアに取り上げられ、日本も「ニッポンチャレンジ」なるチームで出場（過去三回挑戦しましたが、予選で敗退。次回出場は見送られることとなりました。：残念。）したことから、少しは認知度が高まったのではないでしょうか。

では、どのような競技かというと、いたってシンプル、F1同様、「用意ドン！」で一斉にスタートし、海の上に設置されたブイを回って、もしくは決められた地点を通して、早く帰ってきた人の勝ちというレースなのです。F1と違うところは、ガソリンではなく、風だけを動力源としていているところです。したがって、風が無ければヨットは走りません。

風・波・潮を読み、少しでも強い風の中を走り、他艇の風を自艇のセールで遮り、自艇の有利な位置に艇を操る。ヨットレースは、自然の常に変化する条件の中、他艇との駆け引きを行いながら、いかに早く有利に自艇を走らせるかという頭脳ゲームでもあります。もちろん、セールを操るのはすべて人力で行わなければならない、荒天下においても適切に操船することの出来る体力、精神力、判断力などが必要です。

実際によほどのこと（明らかに台風が接近しているなど）がない限り、ヨットレースは開催されますし、自艇と乗員（クルー）の安全は、そのヨットに乗るすべてのクルーの責任のもと、レースに出るか出ないか、レースを続行するか否かは、レースの主催者ではなく、各艇に判断が求められます。このことはヨットレースの大原則であり、国際ヨット競技規則（というルールブックがあるのです。）の冒頭に記載されている項目です。

いかがでしょう。何となく、ヨットレースについてイメージをご理解頂けたでしょうか？

3 ヨットを始めたきっかけ

では次に、私がヨットを始めたきっかけと現在までの経緯についてお話したいと思います。

大学入学当時まで遡ります。第一希望ではなかったものの、合格した大学の先輩からクラブ勧誘の電話がありました。入学するか、浪人するか迷っていた私はその旨を話したところ、「どこの大学に入るかよりも、大学生活で何をするかの方が大事じゃないのか。」という言葉が返ってきたのです。ただ漠然と大学生活に憧れていた私には、考えさせられる言葉でした。さらにその先輩は「俺たちと一緒

にヨットをやらないか？ ヨットなら大学時代から始めても全日本を狙えるぞ」と畳みかけてきたのです。受験にことごとく失敗していた私は、この言葉にグラツときてしまったのです。その先輩に会って話を聞くことになり、結局、私はその大学に入ることとヨット部に入ることを決めてしまいました。

いやー若かったんでしょ。バカでしたね。夏はテニス・冬はスキー的なサークルにでも入ったほうが学生生活は楽しかったに違いありません。

でも、もちろん後悔はしていません。確かに大学の四年間は平日は学校、週末はヨット部での練習で、年に数ヶ月は合宿、男ばかりの所帯の中、夏休みなど毎日朝から夕方まで海の上という生活でした。

しかし、今から振り返ると、先述の「大学生活で何をするかの方が大事」ということが身に沁みつつくづく実感できます。

私の四年間のヨット部での生活は、私に一つのことをトコトンやり抜いたという充実感とかけがえない仲間を与えてくれました。

ちなみに、学生時代は、ディンギー（スナイプクラス）と呼ばれる全長五メートル弱の二人乗りのヨットでレースをしておりました。

4 新しいヨットとの出会い

就職後は、最初の配属先が岐阜県高山市と海から遠く離れた場所であり、たまに大学の後輩の練習

を見に行く位で、次第にヨットから遠ざかっていたのですが、その後の転勤で名古屋に配属となった時に、新たなヨットとの出会いがあったのです。

それは、学生時代の二人乗りディンギーとは違い、一〇人前後が乗りこんでレースを行う、クルーザーと呼ばれる全長一二メートル弱の艇でした。

大学時代の同級生が先輩のツテで乗っており、そこへ誘われたのがきっかけです。

基本的な原理や構造は二人乗りの艇と同じであるものの、そんな大きい艇に乗るのは初めてであり、そこで行われるレースは迫力満点でした。学生時代のヨットの世界とは別に、こういう世界もあるんだなという非常に新鮮な気持ちで、ヨットの新たな世界を知ったのです。それからというもの、基本的には毎週末ヨットハーバーに通い、春にはエリカカップ（蒲郡で開催される全国でも有数の出場艇数を誇るレース）、夏には鳥羽パールレース（鳥羽から熱海沖まで夜通し走りつづけるレース）などといったレースに参加し、一昨年には念願のハワイでのレースも経験することができました。

5 新たな人とのつながり

私が所属するヨットチーム「パラフレニアン」は、そのヨットのオーナー（ヨットの所有者）のもとに、様々な年齢層の人達（上は四十代から下は学生まで）がクルー（ヨットの所有者ではない。私もその一人。）として集まって活動しています。

新たなヨットとの出会いはもちろんのこと、私が現在もヨットに乗っていて一番良かったなと思うことは、このような自分の会社以外の人達とヨットを通じて深く関わりを持つことができたというこ

とです。

ヨットの世界は閉鎖的な面がある（と私は思っているのですが……）ものの、その分、狭い世界であり、一度ドップリ浸かってしまうと自分のチーム以外の様々な人との出会いもあります。ヨット一筋の人の中には結構変わった人が多く？ とても会社の中ではお目にかかれなような人から、とても面白く話聞いてたりします。『ニッポンチャレンジ』に参加したので会社に長期休暇を申し出たら断られたので、会社辞めちゃいました。」という人の話や、日本からハワイへヨットを回航した人の体験談などを聞いていると夜が更けるのを忘れてしまいます。

このような人脈が出来たことは私の財産だと思っています。
これって、何か産政塾に似てゐない？

『パソコンなんて大嫌いだ』



トヨタ車体労働組合

武 藤 俊 和

〔プロフィール〕

むとう としかず (40歳)

- 1960年 愛知県名古屋市生まれ
- 1978年 トヨタ車体株式会社 入社
富士松工場トラック製造部に配属
- 1998年 労働組合専従
現在に至る

〈家族〉 妻、長女 (9歳)、長男 (6歳)

〈趣味〉 パソコン (実は大嫌い)
車いじり (いじってるだけ)

はじめに

「まったく、この忙しいのに四千文字も書かすなっつーの」。「ほう、忙しいほど仕事してんのか？ お前は」「何をおっしゃいますやら、産政塾に参加できたのは二回ですよ。たった二回。これで何書けっつーんですか？」「ぐたぐた言っでないで、はよ書いて仕事せいノ」……などと独り言を言ってる場合じゃない。読んでももらえるように、面白く、知的に、ジョークを交えて書かなくては。

産政塾って産業と政治の勉強会？

産政塾という組織（集団？）の存在をこれまで全く知らなかった。いったい何をするところ？ 多分、産業に関わる？ 人が政治について勉強する塾じゃないの？ が、何も考えてない僕の率直な考え。ちゃんとした組織の内容を知ったのは、第一回の顔合わせの時だった。『中部産業・労働政策研究会』しかも財団法人なのだ。財団法人は何？ まあ、それはいいとして（良くないか）事務局の丹羽さん（お世話になりました。全労済へ派遣されたんですね）の説明でやっとわかった。いろいろな産業に携わる人が集まって、労働政策について勉強する塾なんだ。（これだけじゃ無いと思うけど）ともかく、さまざまな業種の人達が集まっている。うーん、他社の労働条件や会社の実状が聞けて、いいかもしれない。大企業の「ここだけの話だよ」が聞けたりして。おおっ、中国からの研修生『常兆さん』もいるじゃないの。二十一世紀のビックマーケットといわれる中国の経済事情や中国から見た日本人の話が聞けるゾ。などと勝手に思いながら第一回目での顔合わせは、期待がいっぱいだった。

丹羽さんは面白い人だ

産政塾での貴重な経験を書く前に、事務局の『丹羽さん』について語らせていただきたい。事前に配布される案内状の文章には、「堅苦しいものではありません」「勝手に判断して下さい」「気楽にやりましょう」「嫌われものの産政塾誌」「犯罪以外は何でもあり？」等々の気の効いた文章が掲載されていて、なんて面白い人だろうと思っていた。面白いというのは、漫才やコントで笑いを誘う人のことでは無く、「ほーう、なるほど」と感動するような、他人に影響を与えるような人のことだと思っている。実際に会ってみるとやはりそうで、普通の人じゃない（誉め言葉ですよ丹羽さん）。産政塾のテーマ「殻の外へ踏み出そう」を絵にかいたような「殻の外にはみ出した」人（誉め言葉のつもりですよ丹羽さん）。千利休の茶道の精神に似た、『何事にもとらわれない自由な心を持った人』という感じで、なんというか、常人の域を超えている。凡人の僕は、変わった人（誉め言葉ですって丹羽さん）に影響を受けやすいので、凄人だなあと思った。

暁学園で知った優しさの意味

唯一、産政塾で出席したのが、第二回の養護施設『暁学園』への訪問。園長を務められている祖父江さんとの出会いは、このうえない貴重な経験だった。施設はその名のとおり、さまざまな事情で家族の養育を受けられない子供達の、自律を援護する施設である。施設へ訪問する前に、どんな心構えで子供達と接したらいいのだろうか？と、僕なりに考えていた。「きつと心に大きな傷を負った子

供達が暮らしているのだろう。親のいない子供、愛情に餓えた子供、寂しさをどうやってまぎらわしているのだろう。学園の職員の人達はどうやって子供と接しているのだろう。子供達は優しさを求めているに違いない。笑顔で子供たちと接して、心を通わせよう」と考えていた。今思えば、単に感傷的な優しさに身をゆだねて、自己満足してただけなのだ。自己満足と述べたのは、僕の思う優しさが「よしよし、大変だね、がんばってね」などの上っ面だけのなぐさめだからだ。いや、なぐさめにもならないかもしれない。その甘い考えを一刀両断したのが、祖父江さんだった。祖父江さんが言われることを僕なりに解釈すると、確かに施設の子供は心も体も深い傷を負っている。親がいないつらさ、親から肉体的虐待、性的虐待を受ける。親が我が子をしつける事と勘違いして、虐待を認識していない場合もあるという。力では絶対に勝てない大人の暴力によって悲しい思いを強いられた子供たち。わらをもつかむ気持ちで親の愛情を求める子供の心情はあまりにも切ない。その状況を充分認識したうえで、子供たちと体当たりで付き合い、子供達を一人の人間として、真っ向から祖父江さんは接している。祖父江さんの講演や、懇親会で個別に聞かせていただいた内容（多重人格の子供の話）はとても衝撃的で、優しさと思いやりなどという言葉を表面的に理解して、奥深さや意味も判っていない自分を恥ずかしく思った。かといって、優しさや思いやりが理解できた訳ではない。家に返って、ことこまかに妻に話をした。祖父江さんの人柄そのものである人としての優しさ、子供を育てる厳しさが生半可なことではないのだと二人で語り合った。自分たちは人間（子供）を育てる人間（親）でなければならぬのだ。責任ある親として。

パソコンなんて大嫌いだ

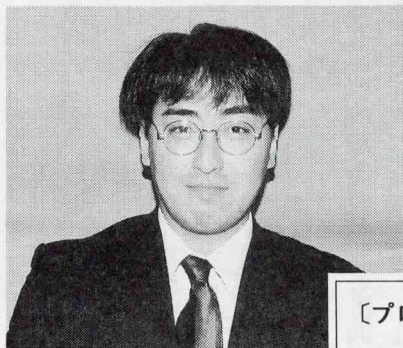
パソコンとの出会いは五年ほど前になる。ある職場へ一年間の出張？ 業務を言い渡された。そこでは「ここでの資料は全てパソコンで作る（正確にはパソコンに入っているワープロだが）。データはイントラネット（社内パソコンネットワーク）を通じて集約するので、1カ月間はパソコンの勉強をして使えるようにすること」。「おいおい、ワープロならわかるけど、パソコンなんて触ったこと無いぞ」。慌てふためいた同僚はとりあえず仕事が進まないの、自分の会社からワープロ機を持ち込んで、パカパカと手慣れた手つきで資料作成をしていた。しかしワープロソフトの保存形式がパソコンの保存に合っていない事がじきに判り、（つまりパソコンでやらないと保存ができない）さらに慌てふためいた。僕はその現実がわかって半ばあきらめてパソコンに戦いを挑む事になった（そんな大げさな）。これがパソコンと付き合うキッカケだった。つまりパソコンを使わないと仕事にならない環境にポイッとほったらかしにされたのだ。だが、この環境が自分にとって有益だった。初めは、とにかく訳がわからん。でもわからんときは知っている人に聞くのが一番。ちょうど、ある程度知識を持った人が前の席に座ったので、迷惑をかえりみず業務を停止させて聞きまくった。おかげで一年後には、メンバーで一番知識を持ったパソコンマンに変身したのだった（その当時はワープロソフトがどうか使える程度なので大した事はない）。僕の趣味はパソコンと記載したが、夢中になっているものであり、大嫌いなものでもある。確かにパソコンは面白い。インターネットを代表に、Eメール、ペイント、動画、音楽などなど画面のうえでは無限の可能性を秘めていると言っても言い過ぎではな

いと思う。パソコンを活用することによって生活が豊かになった。判らないことは、すぐにインターネットで情報が取れる。昔のように百科事典や図書館へ行って調べる必要も無くなった。旅行もホテルの予約が簡単に安くできる。買い物でも、星の数ほどあるサイトから安く購入することができる。しかしそこまで活用できるためには使いこなす必要がある。若い人は柔軟で新しい環境や機器に適応しやすいが、中高年層の方には苦手な機器の代表といわれている。パソコンが扱えない理由は意味難解なデジタル用語を理解しなくてはならない必要があり、仕組みやノウハウもある程度理解しなくてはならないところではないだろうか。パソコンを扱える人とそうでない人の境目はデジタル境界線といわれているが、それはパソコンが専門機器であり、家電品ではないからだと思う。機能を絞って使い易さを求めたのが家電品。機能を広げて様々な用途に向けたのがパソコン。つまり利用者に依存するということだから、利用者が使いこなして生活を豊かにしようとか、活用して仕事の効率を向上させようという意識がなければ、ただの箱なのだ。(偉そうに言ってしまった)前にも述べたように、大嫌いな理由は、パソコンがときに機嫌をそこねる時があるからだ。ダダをこねた子供より始末が悪い。不機嫌な妻をなだめるほうがよっぽど楽だ。へたをすると二度と修復できない代物であり、せっかく積み重ねたデータも一瞬にして消えてしまう場合もある。インターネットは犯罪につながる恐れもある。そんな理由で、ちゃんと理解して使いこなせば宝箱になる可能性を秘めたパソコンはとても魅力的である反面、シリコンの固まりに遊ばれる自分がなさないやら悔しいやらで、大嫌いな代物なのだ。

最 後 に

ふう、ここまででやっと三千五百文字。ノルマ達成かな？。ともあれ、産政塾への参加はたった二回とはいえ、僕の人生にそれなりに良い影響を与えていただく機会になりました。丹羽さん、事務局の皆さん、塾生の皆さん、ありがとうございます。皆さんと充分な交流はできませんでしたが、たった二回でも得るものは大きかったです。何かの機会にお会いできる事を楽しみにしています。

『人生の転機』



全トヨタ労働組合連合会

森 崇 博

〔プロフィール〕

もり たかひろ（30歳）

- 1970年 伊勢市に生まれる。
 - 1986年 伊勢工業高等学校入学
 - 1989年 株式会社三五入社
 - 1998年 全トヨタ労連 派遣
 - 1999年 結婚
- 現在に至る

〈家族〉 妻

〈趣味〉 本当は、自転車

今、振り返ってみると、自分が生きてきた中で、人生を大きく変える転機がいくつかある。

まずは、自分が生まれる時に遡る。最近、聞いた話だが、非常に難産だったため母親の命か子供の命を取るかの選択に父親は迫られていた。そのとき、子供の命を選択したため、自分は無事生まれることができたらしい。しかし、考えてみると非常に恐ろしい話である。

たまたま、母子ともに無事だったから良かったようなものの、父親の選択は本当に正しかったのだろうかと複雑な気持ちになることは、今でも考えさせられるものがあり、自分なら間違いなく妻の命を取るのだろうかと思う。

これがまた、ドラマではないが、廊下で父親と医師が話をしていたらしく、最悪なことに母親がその会話を聞いてしまい、この会話が結局次の事件の引き金となったらしい。

その事件とは、小学校四年生の夏ごろに起きた両親の離婚である。おかげで、小学校は転校させられるは、今まで住んでいた家には居られなくなるはで、あの頃は本当に両親を恨んでいたかも知れない。しかし、ひとつだけうれしいことがあった。非常にくだらないことかも知れないが、自分にとっては生きるか死ぬかの出来事であった。それは、三歳の誕生日に起きたのである。自分は、アニメの超合金のおもちゃが欲しかったにもかかわらず、なんと、バットとグローブが置いてあった。その日から、我が家には『巨人の星』の星一徹が現われたのである。毎朝五時に起こされ、猛特訓の日々が三歳から小学校四年まで鬼と化した星一徹との生活が続くのである。今思い出しただけでも寒気がす

るくらいの日々であった。結局、野球は自分の中から捨てることになり、反対を押し切り陸上の道へと進むことになる。

話は横道にそれてしまったが、結局、様々な闘争の末、自分達三人の兄弟は、母親についていったわけだが、これが大きな転機となったかもしれない。なぜかという、朝、起きると当たり前のように、ご飯が準備され、お風呂も何気なく入り、晩ご飯を食べる。といった当たり前だった生活が一夜にして崩れ去ったからである。

生活はというと、母親が結婚前にバスガイドをやっていたため、年がいもなくバスガイドの仕事を選んだ。そのため、生活はさほど、苦しくはなかった。が、ほとんど母親と家で会うことはなかった。おかげで、すべての家事を小学校四年生から高校三年の卒業まで続けなければならなくなってしまった。

しかし、この経験が高校卒業後に生かされることになろうとは、この時点では気付くはずもなかった。とは、いうもののそれなりに楽しい生活を送ることが出来たと思う。

高校を選択する時、選択と言っても幾つもなかったが……。

父親が建築会社を経営していたため、建設関係だけには行きたくなかった。そのため、造船科を選択し無事に入学することができた。その造船科を選択したことにより、今の会社に入社できたのである。就職先を決める際、母親の三者面談時の、第一声が「県外に出してくれ！」だった。それまで一度も親とは相談していなかったが、それを聞いて気が楽になったのは確かである。その時の自分はなぜだ

か、航空自衛隊に行きたかったのである。それを一喝したのが、担任の先生だった。絶対に自衛隊に行かせたくなかったという先生の気持ちと、母親の就職先は県外での一言で自分の就職先が決まってしまった。

たまたま、自分達の時代はバブルということもあり、就職先は多数あり、前年と比べると非常に恵まれた年代であった。その中で、進学という道も残ってはいたが、第一に『金がない！』の一言であっけなく消えてしまった。あの時、進学していたら、本当に就職できたのであろうかと考える時がある。その前に行けたかどうかということも問題ではあるが……。

無事、就職することもでき七年間を寮で過ごすことになる。七年後、寮を出た時に、前に述べた経験が生かされることになったのである。すべての家事が当たり前のように出来たのである。これは、ある意味、母親に感謝している。

また、配属された部署での上司や先輩にも恵まれていた。仕事もやりがいがあり、そういう環境をつくり出してくれた。これから皆に恩返しをしていこうと決めたそうした中、またまた、転機が訪れたのである。

ある日、職場の先輩から「一年でいいから、組合の代議員やってくれ」と言われ、「まあ一年くらいならいいか」という気持ちで引き受けた組合の代議員だったが、その中に、大きな嘘があった。代議員の任期は二年だったのである。それに気付いた時は、すでに代議員会に顔を出しているときだった。

また、一年半経った頃、大きな人事異動があり、支部二役が異動してしまうという事態が発生したのである。そうした中、支部長に呼ばれ、「副支部長を二年でもいいから、やってくれ」と言われ、断る理由もなく引き受けたが、これがまた、大きな転機を導いているとは、知る由もなかった。

この副支部長の任期中にも、人事異動があり、今度は、なんと、支部長が居る部署そのものが、異動となってしまったのである。そのため、支部長の代行（業務のみ）までが、おまけで付いてきたのである。

今にして思えば、この経験が、会社の中で、様々な方に名前を覚えて頂くことにつながっていった。通常の業務・組合の業務と掛け持ちで忙しい日々が続き、絶対に今期で退任すると心に誓ったものつかの間であった。

そうこうしている内に、全トヨタ労働組合連合会という名前が自分の周りで聞こえ始めてきた。この全トヨタ労連が今まで生きてきた中での、最大の転機であることは間違いない事実であり、普通に会社勤めしているだけでは経験の出来ないことや覚えきれないくらいの人との出会いがあった。

同じ会社に働く仲間、数千人いる中で何人の人が、こういった経験ができるのか。といったことを考えると、全員が全員できるわけではなく、本当に恵まれていたと思う。この経験すべてを自分の財産にできるように頑張っていきたいとあらためて感じた。

それと、何と言っても、この労連での奥さんとの出会いである。研修中に、とある方が「労連に来たからには、何かをつかんで帰るように」と言われていたが、帰る前に、なんと、奥さんをつかん

でしまった。

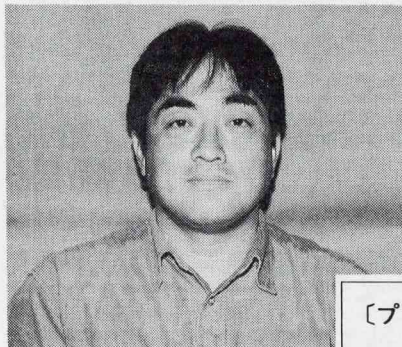
ただ、奥さんには、申し訳ないと思っていることもあり、それは、帰りが遅く、飲んで帰る日が続き、出張が多いということである。ただ、仕事の内容を分かっているだけに文句が言いたくても言えないというつらさを奥さんは持っているんだろうなあと思います。将来きつと、この分のお返しはするとして……。

たった三十年の人生ですが、このように幾つもの転機があったのだと、あらためて感じているが、その時々が少しでもずれていれば、今、ここに居る事さえ分からず、出会えることができなかった人も大勢いたはずである。今、振り返ってみると、この様々な出来事が今の自分をつくりだしたことは紛れもない事実であり、本当に多くの方々に感謝しています。

会社にて自分を育て上げてくれた上司や周りの方々に、組合という立場になるかどうかは分かりませんが、労連を退任したあと、しっかりと恩返しができるよう今まで以上に自分に磨きをかけ、努力していきたい。

最後に、この産政塾においては、まともに出席することができず、本当に残念だったと思っています。最後の日に皆さんのお話を聞き、もっと参加できればよかったのにと後悔しています。また、どこかでお会いできることがありましたら、よろしくお願い致します。

『出会い・思い』



トヨタ自動車株式会社

山 崎 一 生

〔プロフィール〕

やまさき かずお (39歳)

- 1960年 愛媛県宇和島市生まれ
- 1979年 トヨタ自動車㈱入社
第2技術部配属
- 2000年 人事部へ異動
現在に至る

〈家族〉 妻、長男、長女

〈趣味〉 テニス

産政塾が「殻の外に踏み出そう」というテーマでスタートしました。初回の会合であなたの「夢」
「生きがい」はという質問があった時、私自身、「夢」「生きがい」についてあまり考えた事もなく質問
の解答に困ってしまいました。他の塾生のなかには具体的な夢を持って熱く語る人もいたり、夢を
実現した人もいて、うらやましく思いました。産政塾の活動では、夢に思いを馳せ殻の外に踏み出し
てまで夢を追いつけておられる方を訪問し、色々とお話を聞かせて頂きました。

・ 中国人留学生の常兆さんは日本語に出会い、さらに日本に留学して日本について前向きに勉強され
ている、この姿勢に触れ、常に目標を持ち自ら行動をすることの大変さ、すばらしさを知りました。
・ フリースタイルスキーの角皆さんは、学生時代にフリースタイルスキーと出会い、四〇歳を越え
た現在、現役復帰されフリースタイルスキーとして目標を持ち頑張っておられる姿に、いつまで
も情熱を持って取り組むことの大切さを知りました。

・ ライブカフェ足助のかじやさんの広瀬さんは学生時代に出会った音楽を、かじやを継ぐ事になっ
ても、ライブカフェをつくり現在もシンガーソングライターとして頑張っておられる。この広瀬さん
との会話の中で「置かれた状況で、できる事をやる。」というお話に、どんな状況に置かれても思い
を強く持つていれば夢は実現できるという事を知りました。

・ バンドネオン奏者の三浦さんは、学生時代に出会ったバンドネオンをサラリーマンからクラブのマ
スターに転職された現在も、舞台上で続けておられる、この姿に生きがいとは何かを考えさせられま
した。

訪問し、お話を聞かせて頂いた講師の皆さんには共通点として、夢を持ち今なお追いかけておられ、

こうしたい、こうなりたいという思いを持ち続けている点と、安定した生活を放棄してまで追い求める夢に出会った事のすばらしさではないかと感じました。

さて私の場合はどうかと考えてみますと、講師の皆さんとは比べものにならないと思いますが、趣味として続けているテニスとの出会いであると思っています。

私とテニスの出会いは、私が二十二歳の頃に職場の先輩に連れられてテニスコートに出かけて行った事から始まりました。テニスを始めるまでの私は、休日といえど寮でゴロゴロしているか、車でブラブラしているという退屈な寮生活を送っていました。私はどちらかと言えばスポーツは苦手なほうで、それまで真剣に打ちこんだスポーツは有りませんでしたから、はじめから上手く出来る訳も無く、テニスコートの柵越えを連発し、先輩に「今日は場外何本だった。」と言われたものでした。そう言われながらも練習に顔をだしていると、柵越えの回数も少なくなり、少しづつではありますが上達しているのが自分自身でも実感できるようになりました。そうなる人間欲が出るもので、もう少し上手くなりたいと、職場の人達との練習だけではなく、テニスクールに通い練習をするようになりしました。一時期はテニスクールも二カ所に通い練習をしました。また、練習だけでなく市の大会にも出場したりしましたが、私より真剣にテニスに取り組んでいる人は沢山いて試合に出ても一回戦か二回戦で負け、次第に試合には出場しなくなりました、そのころからテニスに対する思いも上手くなりたから、楽しくテニスをしたいという気持ちに変わってきたような気がします。

テニスと出会った事により、多くの人と知り合いになることができました、職場ではあまり話をした事の無い人と会話が交わせるようになったり、テニスクールでは会社関係以外の方とふれあうこ

ともできました。なかでも一番の出会いとは私と一緒にテニスを始め現在も一緒にテニスをやっている友人との出会いであります。彼とは、テニス以外にも行動を共にし、楽しい思い出が沢山あります。

先日、その友人から、「テニスをいつまで続けるの」と聞かれ、「出来れば一生続けたい」とすぐに返事をしました。私は一生続けたいと思えるテニスに出会えた事に感謝をしています。

また、テニスに出会う時期が学生時代だったらテニスも、もう少し上手くなっていただろうしテニスに対する思いも、もっと強いものになっていたのではないだろうかとも思っています。

以前、息子（小学二年生）とテレビでサッカーの試合を見ていた時、息子が「僕もこんな選手になりたいな」と言っていた事がありました。彼とサッカーとの出会いは、私が勧めた訳ではなく、公園で近所のおにちゃんたちがサッカーをしているのを見て、仲間に入れてもらい一緒にやり始めたのがきっかけで、そのうち小学校のサッカークラブに入りたいと言い出し、今は毎週土曜日に雨が降っても休まずに練習に通っています。

彼がこれからどれほどの思いをサッカーに寄せられるかわからないですし、途中で他のことに代わっているかもしれませんが私から見れば、小学二年生で自分自身で打ちこめるサッカーに出会い、一生懸命に取り組んでいる姿は、私自身羨ましく、また頼もしくも思えます。

おわりに、今回産政塾に参加し出会った講師の方々、異業種の塾生の皆さんと行動を共にする中で、熱い思いや、価値観の違いなどに触れることができ、私自身の生活について振り返ることができました。また、将来の自分について考える機会を与えていただいたと思っています。

さらに、今回講師の方々の、お話を伺う中で感じました事は、我々塾生が講師の方を訪問する形を

取っておりましたので、講師の方が踏み出されている新たな取り組みの姿や、夢の大きさなど、様々な感性をより身近に体感でき、夢を持つことの大切さを実感できました。また、出会いを求めるためには、自分自身が踏み出して行かなければ、機会がなかなか無いことも改めて感じました。

今回、関係各位の皆様より多くの機会を与えていただいた事に、心より感謝をしております。

今後、未経験のことや、多くの人との出会いを通して、テニス同様に思いを寄せられる出会いを求めて行きたいと思います。また、子供たちや、出会った多くの人に、夢との出会いのきっかけ作りが、できればと思っています。

本当にありがとうございました。

産政塾を終えて



株式会社デンソー

横井 雅弘

〔プロフィール〕

よこい まさひろ（32歳）

- 1968年10月 愛知県名古屋市生まれ
- 1986年4月 日本電装㈱（現デンソー）
入社 日本電装短期大学校（現
デンソー短期大学校）にて訓練
- 1987年4月 工機部電気装置課 配属
- 1991年7月 工業技術研修センター（現技術
技能研修部）配属（社員研修
担当） 現在に至る

〈家族〉 独身

〈趣味〉 映画鑑賞、サッカー、ゴルフ、つり

「君、産政塾というのに行きなさい。」おそらく産政塾を経験した人々の多くは、この様な言葉から始まったと思われる。この産政塾は、私にとって、二〇〇〇年における大きな出来事の一つとなり、大変に貴重な経験になった。参加したくてもなかなか参加できない塾であることを知ったとなれば尚更のことである。また、減多に自分の文章が冊子に載ることがないので、原稿を書いている今も貴重な体験をしている。

私の仕事の直接的な対象は、製品でも機械でもなく人である。企業内の研修施設で、決められた事を教えている上で、時には違った話もする。したがって、今回の経験をもとに視野の広い話ができるのは、人に話す機会の多い私にとっては、それだけで直接自分の仕事に役立つことなのである。最近には休憩時間を利用して、研修にやってくる人たちと仕事以外の話もできれば良いと思っている。仕事の進め方も産政塾のテーマである「穀の外へ踏み出そう」というフレーズのもとに変化を持たせたい。そうすることにより私の仕事は活性化されると思うし、充実感もでてくるだろう。しかし、産政塾で感じ取れたものは、そういった仕事上の事よりも、人生どのように生きるかという事の方が大きかったのである。

「あなたの夢はなんですか？」

とりわけ、私が以前から苦手としている質問である。

小学生の時、担任の先生からその質問を受け、答えられず立たされたままだったのを良く覚えている。そのときは、たまたま教室の窓越しに見えた建築現場より連想し、「大工になること」と言ってその場

を切り抜けた。それ以来、はっきりとした答えを持たないまま今に至っていた様だ。

産政塾によって再び思い出されてしまったわけだが、長野で行われた産政塾でも、スキーインストラクターの角皆さんに質問され、堂々と「ありません」と答えた。まだ小学生から成長していないことを自ら証明してしまったと思うと、少々情けない気がする。産政塾で登場する講師の方々は、夢に対する答えは明確だ。また、夢を持っているだけでなく、それを実行するバイタリティーも持ち合わせている。それに魅了され、私は小学校の教室に取り残されていることに気づく。さて、どうしようか。

私を感じた産政塾の講師の方々の夢や思いは、人生の一つとして形成されていた。「(この世界に入ったのは) たまたまです。」というきつかけもあるが、しっかりと計画を立て実現に向かっている。夢や思いが人生設計のなかに、しっかりと存在するのである。それは当然と思われるかもしれないが、私は夢が無いどころか人生設計も曖昧なのである。むしろ、人生設計をしないから夢がないのかもしれない。サラリーマンであれば、夢を考えなくても生きていけるし、面倒くさいと思えば、それで済んでしまう。そう考えてしまうのは、意外に私たちの世代に多いのではないか。それとも、私だけだろうか？ では、夢はなくても良いのかというと、簡単に「はい」とは言いたくないところもある。人間、一度きりの人生なのだから、少しは持ちたいものである。

産政塾初回の感想文原稿を任された私は、文章表現力の無さに悩まされながらも何とか書き上げることができた。実は原稿作成時に以前の上司の言葉が役に立っていた。「常にその時々経験や考え

方を文章にすることは大切であり、またそれをデータベースとして個人の財産とし必要な時に使えるようにすること。」「それにより話題豊富になり、話し言葉の中に単語も増え、しっかりした内容になる。」などを教えて頂いたことがある。その頃から、少しではあるが文章を書いたり、人の文章の書き方やまとめ方をよく見るようになった。後から分かったことだが、その方は産政研フォーラムにも「物づくり」について寄稿していた。

私の文章の内容は出来はどうであれ、産政研フォーラムや産政研ホームページに掲載されると、その元上司に読んでもらおうと早速電子メールで産政研ホームページのアドレスと共に送った。

その日のうちに頂いた返信メールには、私の文章に対する感想と近況が書かれていた。それによると、私の書いた文章は、心の中にある英語に対する興味がベースになっているという。確かにそうだった。言語とは不思議なもので、学んでいるうちに、その国の文化や習慣まで学んでしまい、ある程度話せるようになると、更に詳しく見聞きすることができるようになる。その下地があって、意見が言えるようになり、原稿も書き上げることができたのだろう。その返信メールは近況へと続く。最近は良き友人とのつき合い、奥さんと海外へ旅に出かけ楽しんでいる事やそのための英語勉強法、そして、退職後は、海外の大学に一年ほど留学して、奥さんとしばらく住んでみたいという将来の夢プランまでが書かれていた。私が驚いたのは海外留学したいということではなく、前述した産政塾に参加して感じ始めている事をメールで伝えた訳ではないのに、夢や人生設計につながる内容であったことである。偶然かもしれないが、それはまるで英語に対する興味を持つ私に合った夢の一例を示して頂いた様だった。

大した人生設計をしてない私は、当然退職後のことを考えている訳がない。リタイアという言葉に良い響きを感じてはいなかった。たまたま、「徹子の部屋」に出演している大橋巨泉がリタイアに対する考え方を述べていた。それを最近本にしたという。元上司の返信メールには、そのことにも触れていた。そのまま引用させて頂くと、次のようなものである。

「最近、大橋巨泉の本が売れているようで、三十〜四十代のサラリーマンに理想的な生活を楽しんでいる人として人気があるようです。彼は老後の生活を楽しむ四つの条件を挙げています。」

- 健康であること（すぐたばこはやめろ）
- 良きパートナー（妻）を持て（老後を彼女と過ごせないなら、今すぐ離婚しろ）
- 複数の趣味を持つ（沢山の友人が生まれる）
- 財政的裏付け

私が条件に当てはまるか、またはこれらを実行できるかは疑問であるが、いずれも納得できる内容である。書店へ行って、その本を手にとって見てみると、すぐに読めそうな本だったので購入して読んでみた。タレント・大橋巨泉がどのように生きていたかは、普通のサラリーマンに当てはまる部分は少ない。しかし、「若いうちは何でもしなさい。ダメージを受けるだろうが何回でもやり直しがきく。四十過ぎてそんなことをすると回復不可能になる。」という言葉の中には四つの条件が含まれていることが読みとれ、前半生と後半生にわけた人生感共感できた。きっと、一〇年前に読んだとしても、あまり感じる部分はなかったであろうが、三十過ぎの私だからこそ理解できるようになっての

であろう。産政塾生世代には当てはまるので、興味があるようであれば、おすすめしたい一冊である。

私は、海外に興味を持ち、語学を学んだり海外に対する仕事をしたりしている。以前、私は三ヶ月ほど出張でアメリカで過ごしたことがあり、そのときの印象は、産政塾以上の殻の外に出た気分で、良い思い出として今も残っている。そこには、些細な悩み事も吸い込まれそうな広々とした土地で、日々の生活を楽しく過ごしている多くの人々を見た。また最近、短期間ではあるがスペイン出張の機会を与えられた。スペイン・バルセロナの人々を見ると、アメリカほどのダイナミックさは無いが、やはり日々楽しく生活をしている。平日の夜一二時も関わらず、街には大勢の人々で溢れていた。一度、彼らと食事に出かけたが、「私たちはいつものことだよ。」と夜遅くまで私につき合ってくれた。(写真) 活気づいた街全体が日々の楽しみのために生きていることを教えてくれている。夢が無くとも(実際にはあるかもしれないが)彼らのライフスタイルは完成されているようだった。



夢を持つことや老後のことを考えることは、充実した生き方をする人生を豊かにするものであると思う。産政塾で登場する講師の方々の様に、サラリーマンで終始する事とは違った人生を歩む道で人生を豊かにするのか、サラリーマンの道を持ちながら別に人生を豊かにするか、大橋巨泉論のように人生「前半」「後半」に分けて、「後半」重視しながら人生を豊かにするか、または職人さんの様に生涯現役で人生を豊かにするか、など色々と方法がある。

この文章が終わるまでに人生の夢ができるわけではない。未婚の私は比較的その選択肢が広いかもしれないが、型破りに今の仕事から飛び出し、違う世界に飛び込むという事をして会社を辞めるわけでもないし、今から海外に住むという目標を掲げるつもりもない。もし、「夢は何ですか？」と聞かれたら、「楽しく生きる」と堂々と答え、海外の人々のように楽しく人生を生き、次に夢が発生すれば良い。それが基本であるように思うし、夢が出来たならば、そのとき産政塾で経験したことを参考にできれば良いと思っている。

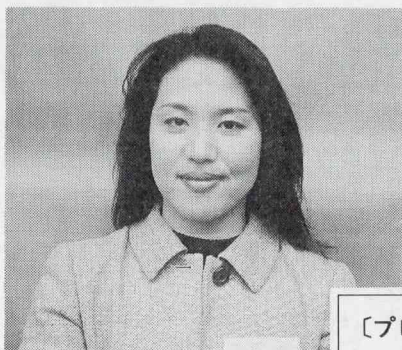
「殻の外へ踏み出そう」であるが殻はすぐ閉じることもあるので、私は今年のこの出来事を忘れずにいたい。

最後に、産政塾で色々とお話をして頂いた講師の方々、仲良くしていただいた第十一期の産政塾生の皆さん、そして事務局の丹羽さん、岡田さん、に感謝いたします。楽しく産政塾に参加することができました。ありがとうございました。

あとがき

私の原稿が産政研フォーラムに掲載された時、真っ先に読んでくれた母が、今回の原稿を見ることがなく、二〇〇一年一月に他界しました。出来上りの原稿を元に色々と話したかっただけに、残念ではありません。息子の幸せを強く望んでいた母に対する何よりの恩返しは、本文で書いたとおり「楽しく生きる」充実した人生を過ごす事です、まずは天国の母に私の書いた原稿を贈りたい。

みんなの殻と私の殻



豊田市役所社会部青少年女性課

渡 辺 昭 子

〔プロフィール〕

わたなべ あきこ（29歳）

- 1971年 豊田市生まれ
- 1994年 豊田市役所入庁
福祉部福利課 配属
- 1998年 社会部青少年女性課 配属
現在に至る

〈家族〉 パートナー 1 名

〈趣味〉 音楽、映画をみる、コタツで昼寝

1 はじまり

『産政塾』という研修があるそうだ。面白いそうだから出てみないか？」と上司に勧められ参加したのがこの一月。顔合わせの前に我が人事課へ産政研の丹羽さんより「女性は一人数だけけれど、大丈夫ですか？」という問合せの電話が入ったと聞かされた。担当の方は「それは全然大丈夫です。」と太鼓判を押してくださったと後日私に教えてくれた。(どういう意味なんだか……)

それからはや十ヶ月。原稿用紙を目の前に感想文を書いている。この研修の間、様々な人と出会い、言葉を交わし、意見を交わすことができ、本当に楽しかった。それもこれも「殻の外に飛び出そう！」というテーマそのものが皆の口を開かせ、良い意味で「何でもあり」の研修会ができたのだと感じている。「殻」とは、なんと私たち組織の中で働く人々の心をくすぐる言葉であったか。あらためてこのテーマを思い返し、そう感じている。そうして過ごした研修会であったが、企業人としての「殻」の他に私が感じた「殻」が実はもう一つあった。今回はそれについて思いきり書いてみたい。

2 出会い、そして「みんなの疑問」

研修会初日、異業種の交わりとは言うものの、異業種中の異業種「公務員」でもって「女性」という二大ポイントを掲げ参加した私。自己紹介も研修も無事終わり、さあ皆で懇親会へ。そこで、やはり私にとっては「待ってました！」というべき質問が。「渡辺さんって、結婚してないんだよね、もしかしてバリバリ？」そこで、逆に質問を「何で女性はこの研修会に参加しないの？」回答は如何や、

「研修に参加できる女性がない」のだそうだ。この研修会は勤続十年くらいの人を対象にしており、大抵の女性は結婚か出産を機に辞めてしまうので該当すると思われる女性がないのだとか。公務員で六十歳まで働くことのできる私にとっては分かつていたもののやはりショックだった。それでは、なぜ「バリバリ」だと思ふのか。ここには簡単な図式が登場する。

―女性の定義―

カテゴリー１ 結婚する女性⇨仕事を辞め、夫を支え家事に専念する。

カテゴリー２ 結婚しない女性⇨仕事に生きる。

つまり、普通の（または大抵の）女性は就職して何年かすると結婚し、出産というポイントを機に主婦業に専念する。しかし、結婚していない女性の場合、そういう普通のルートからは外れてしまっている（もしくは一人で生きていかねばならない）のでもはや男性と同じように仕事に生きるしかないのである。そもそも普通って何だ？ と考えたくなる所だけれど、それはさておきここで、私という存在とこの図式がいかにして当てはまるのか、それはズバリノ こうである。

産政塾の研修に参加している二十九歳で独身⇨仕事に生きている。

バリバリ

気持ちのいいくらい明快な答えである。これは決して男性諸君に対するイヤミではない（本当よ！）これは、世間一般のごくごく当たり前の視点なのである。今後、女性である私を皆がどのよう

に認識していくのか、とても興味が沸いた。

3　そして研修会「これって男社会？」

ある研修会の中、塾生が言った。「帰宅は毎日一一時過ぎ、子供の顔を見るのは土日だけ」これには驚いた。こんなことがあっていいのか？　人権侵害だ／＼と私は思う。しかし、それはどうやら一人や二人ではないらしい。塾生に代表される多くの男性は、日夜仕事に明け暮れ家族と共に過ごす時間すら与えられず、会社に尽くし、家族を養い、同期としのぎを削り、定年退職するまで会社の利益のために働いているのだろうか。だとしたらひどい。こんな状態で家に帰り、もし妻が「家事だって立派な仕事、これからは男女共同参画社会よ／＼ほら、洗物してちょうだいね、今日はあなたの番だから。」なんて言ったら「誰に食わせてもらってると思ってんだ／＼こっちは一日働いて疲れてるんだぞ、家事はおまえの仕事だろう。」と怒ってしまう人もいるだろうなあと思う反面、これが普通の光景で良いのだろうかと思ひ疑問だった。これが、いわゆる「男社会」だろうか。女性は結婚すると夫のサポートに徹し、夫がその持てる力を十二分に仕事に発揮できるように努める。いわゆる「内助の功」である。家計を助けるため、若しくは働きたいと思った場合でも子育てや家事に差し障りの無い時間にできるパートタイムだけ、フルタイムで働きたいと思っても「そこまでしなくても」とか「夫に迷惑をかける」とかネガティブなことばかりやっている。」と言われないうちに家事も育児も完璧にこなし、はたまた仕事までこなすスーパーウーマンでなくてはならない。これは誰の目にも明らか、続

くわけ無いでしょ。こうなりや仕事は男性に任せて、空いてる時間に少しでも楽しんだほうが得だ／と考えるのが資本主義理念の自然な流れだろう。「男社会」のつけが働く女性に重くのしかかる。

4 もうひとつの「殻」

私を感じたもうひとつの「殻」。それは社会が定めた「男性・女性」という「殻」である。

多かれ少なかれこの「殻」をだれもが持っている。でも自分でこの殻を作った人はいない。知らず知らずのうちに教えられ、身についたものだ。男性は漠然と「妻子を養う甲斐性のある男でなければならぬ。」と教えられるし、女性は「良い男性を見つけて嫁ぐのが幸せ。」と知る。でも、本音はどうか。内心「私のほうが能力は上よね。」と知っている奥さんはいないのだろうか。（これは居そうだし。）皆もつと自分に正直になろうよ／と私は言いたい。男性は「女性は言いたいことが言えてうらやましい。」と呟くより自分も言ってみるといい。案外簡単に自分を解放できるかもしれない。何より、社会が（富国強兵を唱えた頃の政治が）勝手に作った殻にはめられて、トコロテンのように押し出されているなんて悔しくなってくるでしょ？会社の理念と自分の生き方、産政塾の研修も毎回このテーマに終始していたはず、見つめてみる意義はあるのでは。

5 産政塾の田島陽子センス：ではないけれど。

私の会話の中に「出たっ恐るべし（田島陽子的）フェミニストだ／」と思った人も少なくないと思

う。(今うなずいているあなたよ、あなた。)しかし、もし自分の娘が大学を卒業し就職しようとしているとき、「女性である」というだけで面接はおろか資料すらもらえず悔し涙をこぼしていたら：「女の子だからしょうがない、はやくいい人見つけたほうがいいんだよ。」と言えるだろうか。私は言えない。しかし、男女雇用機会均等法ができて依然として女性の就職は厳しい。これは法律や制度が整っていても実際にそれを活用する人間が居なければ意味をなさないことを意味する。社会が女性の労働力を必要としていないということになってしまう。社会の常識や慣習というものが変わらなければ結局何も変わらない。ならば変えていこうではないか。と叫ぶ私に、甘っちょろいことを言うな、それでは経営は成り立たないと企業人は怒るかもしれない。だが、この先社会に出ることを法的に許容された女性が、社会の後押しの無いまま現在の男社会で生きていくとどうなるか、中には女性にしかできない「子供を生む」という特性を捨てざるを得ない人も出てくるだろう。三〇年後、五〇年後人口が減りつづけ生産力も購買力も減少し、気づいたときには年寄りばかり：なんてことにはなっていないだろうか。いや、少子化という問題はすでに誰でも耳にしているはずだ。ただ、現実味を帯びていないだけのこと。しかし、一人一人が生まれ育っていくことは長い時間のかかることであり、その時にしまったと思って、もう遅いのだ。こんな「殻」はさっさと捨てて、一人の人間として認め合っていこうではないか。常兆さんもこう言っていた、「殻の外は素敵よ。」と。

6 最後

産政塾は私にいろいろなことを感じさせてくれた。皆は働く女性である私と触れ合うことで、何か

を感じてくれたのだろうか？何かを感じてくれたなら、この研修会に参加した意義も二倍、三倍と膨らむ。やはり産政塾のような企業を超えたトレーニングの機会に、半数は自然に女性が出てくるような企業の人材育成と雇用形態が整うことを切に望む。変革の前には、今何が起きているのかを「知る」ことが必要だから。

実は今私の中には小さな命が宿っている。この子が男の子であろうと女の子であろうと、自分の責任と選択のもと自分らしく生きることのできる社会であって欲しいと心からそう願ひ、これからがんばっていききたいと思う。塾生のみんな、これからよろしく！

最後に、皆と和気藹々と語る時間のなんと楽しかったことか。それも丹羽さんを始めとする事務局の方々の広いココロのおかげだと思っています。本当にありがとうございます。

“夢”、“生きがい”、“働きがい”

(財)中部産業・労働政策研究会

丹 羽 研 次

“課題を的確に捉えること”。これ、よく聞く言葉であるがなかなか難しい。

仕事上では、管理者の得意技であるが、まあ多少はずしても理屈が優先していればさほど問題とならないケースが多い。

尊敬する先輩の教えは、「氣にいらんことがあったら、まず“氣にいらん”と発言しろ。氣にいらんことに対して呑み込んだり理解しようとするな。」というものであり、サラリーマンとして生き抜いていくためには大きな間違い？と危惧しながらも、まことに都合な“私の信条”である。まあこれも、会社生活ではそんなに失敗もなく、敵は多いが理解者もあってちょうど良いバランスである。余計な発言をしてしまった後悔よりも、発言を抑えてしまった後悔の方が圧倒的に大きいものだ。ちなみに回数は前者が圧倒的に多い。これもちょうど良いバランスである。

「氣にいらん」は、数打てば代案も生まれ、「課題を的確に捉えること」に当たることもある。数を打たない連中に比べればではあるが…。

しかし、このことを自分の人生に置き直してみた時はそんなに楽観できないのである。更に、課題の前段には“目標”や“夢”が存在しなければならぬのである。これが結構な難題であるのだ。

わたしの夢・生きがい・働きがい

今回の産政塾で、初顔合わせの際に「わたしの夢・生きがい・働きがい」をいきなり発言していた。少しわき道にそれるが、多くの時間を費やす仕事に“働きがい”を求めることを主張する私と、それだけでは駄目だと、幅広く「生きがい」を主張する塾長と意見が分かれた。塾生側に発言を

求める側の論理であり、自ら発言できるかどうかは棚上げしたことは言うまでもない。結果はご覧のとおりであるが。

初顔合わせに求めた発言は塾生を大いに困惑させてしまった。二十数名の発言内容は、物欲はたった二件、「家族」、「健康」、「職場関係」、「信頼」、「感謝」、「自分らしく」、「平凡」……。いきなりの仕掛けにそつなく応戦した回答と推測した。そのなかで一人だけ「わたしの夢は、中国に私立大学を設立して校長先生になりたい。両親に世界の素敵などところを見せてあげたい。」と度肝を抜いた発言があった。中国から現在名古屋大学に留学中で、前期の産政塾から交流が始まった関係から今回は塾生として参加いただいた常兆さんであった。すっかり日本人らしい中国人はさっそく特別塾生の役割を発揮してしまった。彼女いわく、在日外国人には二種類あって、日本の文化や日本人を理解し取り入れている外国人と、在日しても自分の国の文化や価値観で生活している外国人である。前者は「変な外国人」と扱われ、後者は「普通の外国人」となるそうである。よって、これ以降、彼女は「変な外国人」として産政塾に乱入したのである。

そうそう、理事・評議員や塾生の上司のみなさん、産政塾は国際交流もありです。

ともあれ、「わたしの夢・生きがい・働きがい」から産政塾はスタートした。よって今期のテーマは「夢・生きがい・働きがい」であった。参加費を徴収し、毎回の参加は出張扱いで参加いただいているのだから、「異業種交流」や「幅広い視野」の名目も挙げておこう。

このプロログは重要であった。

われわれの年代の父親には、家族にカラーテレビを買ってやるといった「夢」が明解であった。

開塾式の際に困惑した塾生に、“夢”、“生きがい”、“働きがい”を明解に持っている講師を訪問し交流するシナリオであった。しかし、理解しようとする能力に優れた大企業サラリーマンには少々手間が掛かった。訪ねた講師の生きざまを理解し賛同する傾向に走ってしまうことである。講師の方々には失礼であるが、みなさんの行動の是非は最優先ではなく、“夢”、“生きがい”の明解さを求めた人選であった。

夢、生きがいバトル

こうして、講師と塾生の、夢、生きがいバトルが始まった。

祖父江文宏氏は、「こどもの虐待問題は顕在化してきただけ」、「行政の対応や保護だけでは限界がある」と、私費や後援会組織、ボランティア活動で虐待問題に取り組まれている姿は最初の講師としてインパクトがありました。国会議事堂へ講師として足を踏み入れたのは四十年ぶり二度目で、今回はヘルメットもゲバ棒も持っていかなかったとお話は、数十人のこどもが生活している施設の食堂では誰も笑うことができませんでした。

角皆優人氏は、フリースタイルスキートの選手やコーチでの実績に加えて、文字どおり“自由人”。慣行や既成概念にとらわれない生きかたに多くの選手が慕い、長野県白馬村を拠点に活躍されています。「みなさん“強い思い”を持ったことありますか」から始まり、選手の皆さんも交えた交流は塾生の世界とは対極の世界との交流でありました。また、四十歳半ばで現役復帰しオリンピックを目指すとの情熱は一層刺激がありました。おまけで企画した元全日本ナショナルチームヘッドコーチのレッス

ンはいかがでしたか。

広瀬明史氏は、創業百七十年余の鍛冶屋の六代目。もともと家業を継ぐ気はなく、十数年間のサラリーマン生活からの決断であった。最近のマスコミでは、「シンガーソングライター足助のかじやさん」として有名。この二つの組み合わせが話題となっているが、ご本人は「刃物を打っているのも、歌っているのも、それぞれが広瀬明史です」、「それぞれに関係も影響もありません」とさりりとしたもの。こんな共通が……。だからこんな歌が……。の返答を予想した私たちを、ばっさりと、気持ちよく裏切っていたきました。

三浦晃敬氏は、早期退職制度利用のいわゆる脱サラ。ただし、転職先はまったくの素人であるのにも関わらず、名古屋の錦三丁目にクラブを開業というものである。転職の理由は音楽活動（アルゼンチンタンゴ奏者）への制約解消と会社での人間関係。「単身赴任」といっても、クラブのソファアードで寝起きの生活であるが、「ストレスゼロ」、「頭のなかの営業戦略がすぐに実行でき、すぐに成果に結びつく。」とサラリーマン時代よりも収入をのぞいて快適とのこと。お店に来いとお誘いいただきながらご無沙汰しております。また行きます。塾生も行くこと。

湯本裕和氏は、日本の農業問題に危機感を持ち、有機栽培の推奨のために東京の土地を売り、愛知県設楽町に農業学校を開設されました。野菜をはじめとした農産物のほかにも、牛、馬、豚、ヤギ、鶏の家畜やパン・ケーキ、味噌、燻製、と試行錯誤が何年も続いています。「早朝からの作業や毎日の服装などまったく気になりません」としながらも、失敗談やこれからの計画はたくさんあるとのこと。ただし、試行錯誤は楽しんでるように見えました。

講師の皆様の生きがいや価値観は塾生にとっていずれの企画も大きなインパクトとなりました。あらためて深く感謝申しあげます。

このバトルは閉塾をもって終戦しましたが、それぞれの生きざまや夢をどう感じ、塾生自らの“夢”、“生きがい”、“働きがい”にどう影響を与えることができたかであると考えます。塾生の人生の成果を期待します。

おわりに

私こと、二千年八月をもって中部産政研を退任いたしました。四年間の在籍でありましたがこの間産政塾の事務局を担当し、様々な出会いや経験ができましたことは私にとっても大きな財産となりました。塾生のみなさんに深く感謝いたします。

今、この原稿を書きながら、懐かしさよりも寂しさを感じています。

OB会楽しみにしていますよ。産政塾の成果がそれぞれの組織でどう活かされているか確認が必要です。

という名目で…。

“再見”。

產政塾活動記錄

《第1回会合》

期日：2000年1月20日(木)

場所：全労済豊田会館、ツインピークス

内容：第11期産政塾開塾式、

塾長挨拶、塾生自己紹介、

「変わる日本人、変わらぬ日本人」常兆氏講演
懇談会



第11期産政塾に集った塾生



◀講演する常兆さん

なぜか話題は日本と▶
中国のお風呂事情に



◀懇親会ではうち解けて
会話がはずみました

《第2回会合》

期日：2000年4月7日(金)

場所：養護施設「暁学園」(東海市)

内容：園長祖父江文宏氏を訪ねて

「施設の運営や子供に対する姿勢」について
討論、懇談会



懇親会では祖父江氏の人生について話がはずみました



◀講師の祖父江文宏氏



◀こどもの虐待問題について聞き入る塾生

《第3回会合》

期日：2000年4月23日(日)～24日(月)

場所：長野県白馬村

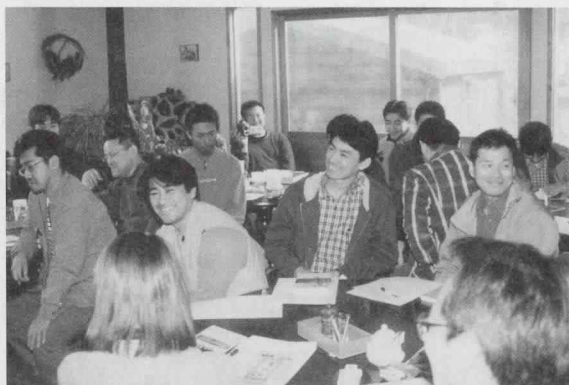
内容：フリースタイルスキーヤー角皆優人氏を訪ねて、
「フリースタイルスキーと角皆氏の人生」
討論、懇談会



フリースタイルスキーを志す選手の皆さんとの懇談会は
夜遅くまで続きました



◀講師の角皆優人氏



◀ペンションを借り切
っての討論はなごや
かに進みました

《第4回会合》

期日：2000年5月31日(水)

場所：愛知県足助町

内容：ライブカフェ「足助のかじやさん」

鍛冶師広瀬明史氏を訪ねて

「創業170年余の伝統を継ぐ鍛冶師とシンガーソングライターの人生」

討論、懇談会



鍛冶屋の店先で



◀講師 広瀬明史氏

刃物の実演を見つめる塾生▶



◀もう一つの顔「シンガーソングライター」

《第5回会合》

期日：2000年6月27日(火)

場所：名古屋市栄

内容：バンドネオン奏者 三浦晃敬氏を訪ねて、
「タンゴ・デ・エスペランサ」
クラブ ボンソワールのマスターへの転職について
討論、懇談会



バンドネオンと一緒に記念撮影



◀講師の三浦晃敬氏



◀錦三丁目のクラブで
討論

《第6回会合》

期日：2000年7月21日(金)

場所：北設楽郡設楽町

内容：フ設楽農業学校 湯本裕和氏を訪ねて、

「農業のライフスタイル」

農作業体験、討論、懇談会





◀講師の湯本裕和氏



◀農作業体験する塾生、暑い日でした

《第7回会合》

期日：2000年8月28日(月)～29日(火)

場所：つどいの丘（愛知県藤岡町）

内容：第11期産政塾開塾式、

「産政塾に参加して」討論、電気自動車コムスの試乗、
打ち上げ懇談会



塾生のみなさん産政塾はいかがでしたか？



◀塾生の社用車コムス
(電気自動車)



◀最後はバーベキューと
生バンドで打ち上げ

産 政 塾

2001年3月20日 第2刷発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒471—0833

愛知県豊田市山之手8丁目131番地

全労済豊田会館 3F

T E L 0565—27—2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山 本 製 本

正 誤 表

産政塾Ⅹの本文中に間違いがありました。
ここに訂正してお詫び申し上げます。

	誤	正
P188 上から5行目	「タンゴ・デ・エスペランサ」	「タンゴ・デ・ラ・エスペランサ」
P199 上から4行目	フ設楽農業学校	設楽農学校
P192 上から4行目	第11期産政塾開塾式	第11期産政塾閉塾式
P193 一番下写真説	生バンドで打ち上げ	生ビールで打ち上げ

塾 政 産

塾 長 植本 俊一

塾 生

トヨタ車体(株)	池浦 芳一
デンソー労働組合	石本 營
全ユニー労働組合	板倉 智宏
アイシン労働組合	上別府伸一
㈱豊田自動織機製作所	大寫 隆之
アスモ労働組合	岡本 雅典
丸栄労働組合	小野田和広
フタバ産業(株)	柴田 博
松坂屋労働組合	締次 顕治
名古屋大学	常 兆
東邦ガス(株)	杉下 昌明
㈱東海銀行	大東 輝彦
名古屋鉄道(株)	高木 敏光
アイシン精機(株)	高田 学
日本特殊陶業(株)	滝野 仁
中部電力労働組合	武田 和則
トヨタ自動車労働組合	鶴岡 光行
アラコ(株)	中村 英行
豊田合成(株)	林 賢士
中部電力(株)	三谷 建介
トヨタ車体労働組合	武藤 俊和
全トヨタ労連	森 崇博
トヨタ自動車(株)	山崎 一生
㈱デンソー	横井 雅弘
豊田市役所	渡辺 昭子

中 部 産 政 研 丹羽 研次